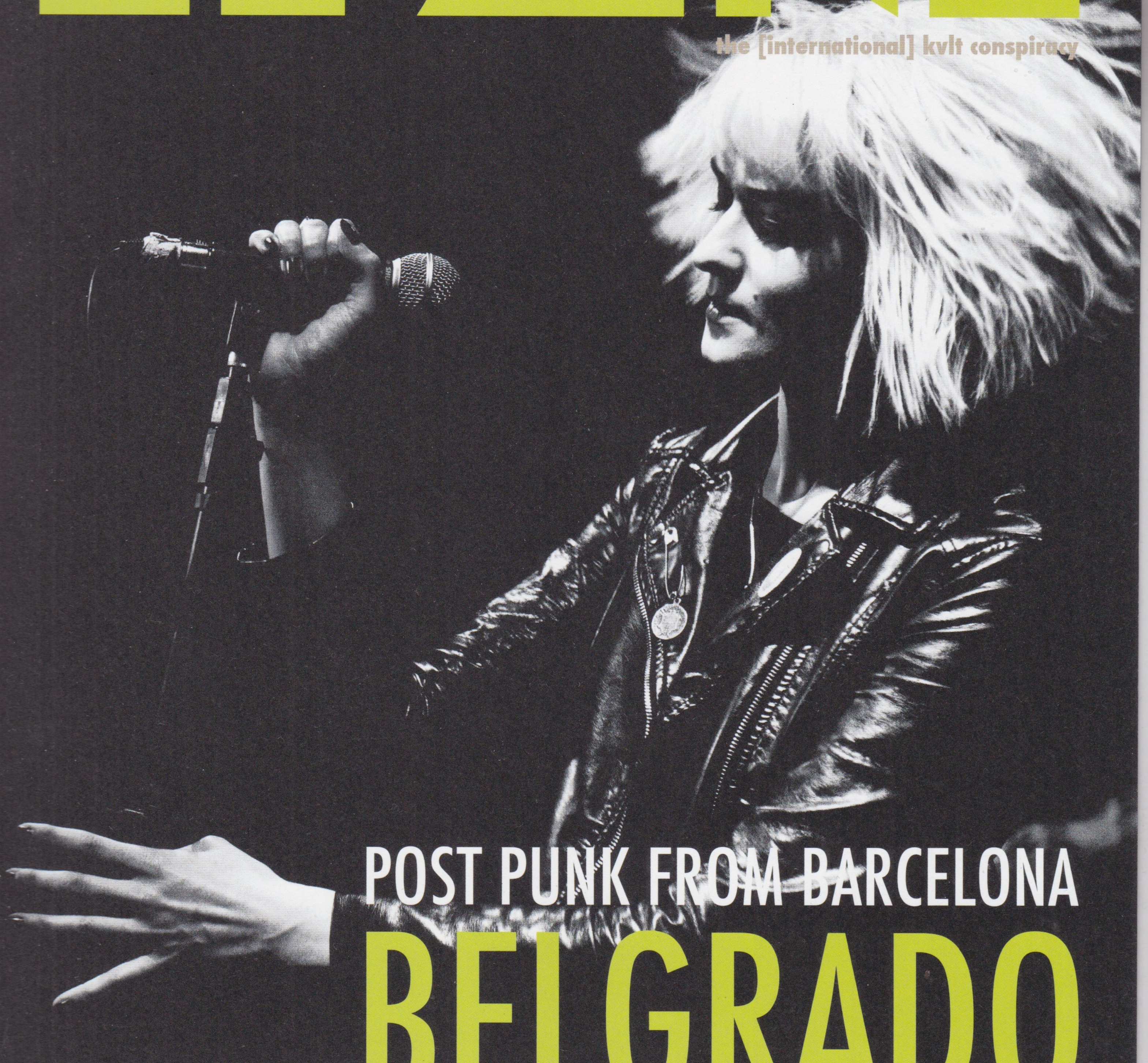
SEX IS COOL, BUT PUNK IS BETTER! VOL.21

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy



POST PUNK FROM BARCELONA

BELGRADO

SKIZOPHRENIA EURO TOUR REPORT RAKTA SOLUCION MORTAL
OVERTHROW RECORDS DIOS HASTIO GRZESTER FROM PASAZER
WENDY O. WILLIAMS BAND OF ACCUSE NAO CONFORMISMO
UNHOLY GRAVE PSYCHO SQUATT APURTU FAST ZINE VS EL ZINE

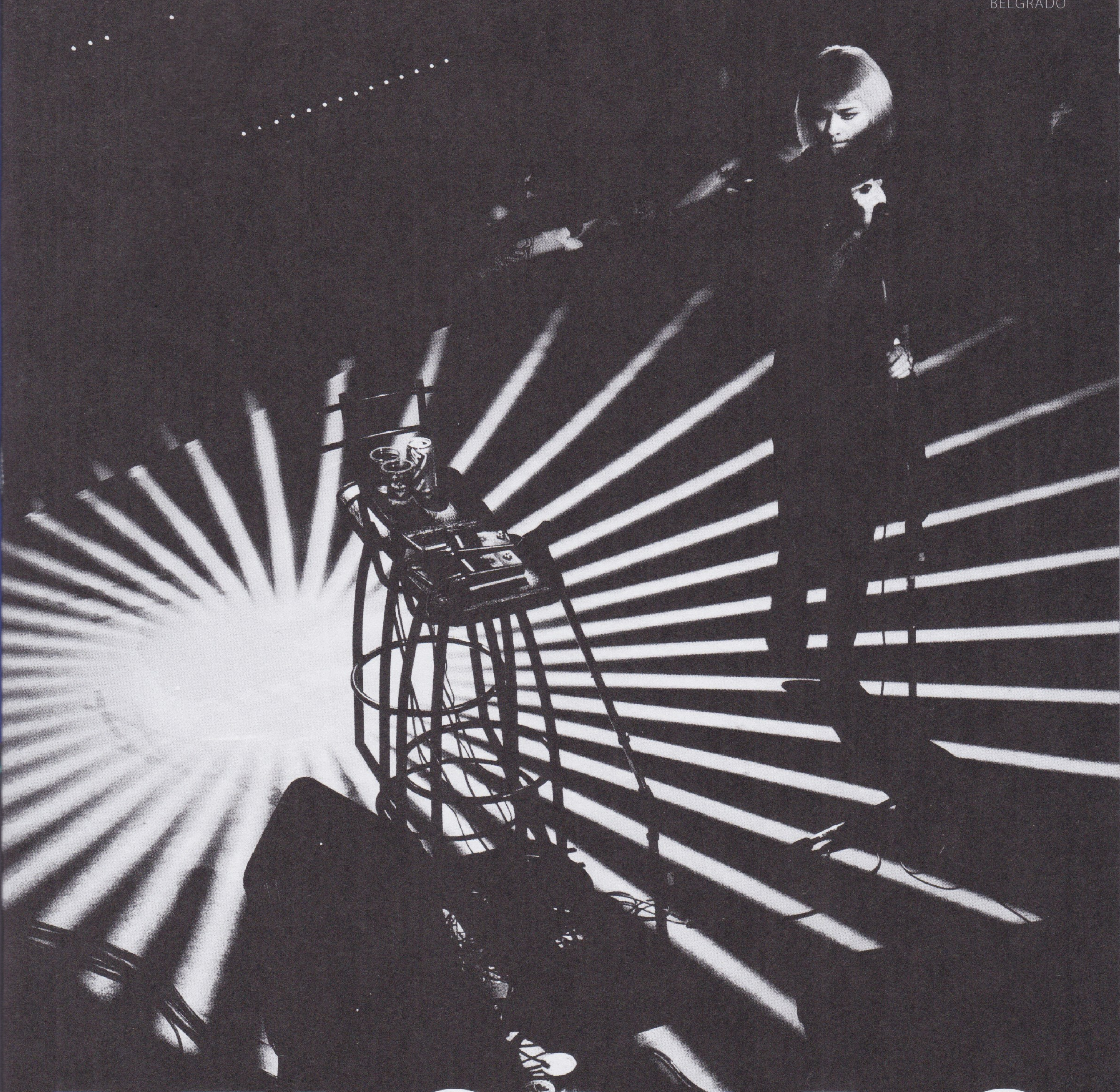
the [international] kvlt conspiracy EL ZINE SEX IS COOL, BUT PUNK IS BETTER! VOL.21

CONTENTS VOL.21





BELGRADO Photo by Robert Hanna



BELGRADO

2016年9月に待望の日本ツアーを敢行するバルセロナの女性Vo.ポスト・パンク・バンド、BELGRADO。輝かしい存在感を放つヴォーカリストPatrycjaと、サウンドとともにBELGRADOの大きな要素であるアートワークを担当するドラマーのJonathanにインタヴューを試みました。
予定の締切を大きく遅れて編集長をハラハラさせましたが、バンドについてだけでなくバルセロナのシーン、近年隆盛を極めるポスト・パンクについて、そしてBELGRADOが持つDIY理念についてと多角的に語ってくれました。

INTERVIEWED:Kazuhiko Sazanami(MOUSE/PUNK AND DESTROY)　PHOTO:Mateus Mondini(Including Front Cover)

■BELGRADOが結成されたのはいつ頃でしょうか?

「バンドをスタートさせようと考え始めたのが2010年。私たちが別々の都市に住んでいた頃です。他のメンバーはベルリンで一緒に働いて生活していました。ポスト・パンク・バンドをやりたいな、なんてビールを飲んで話しながら。みんながバルセロナに戻ってきた秋頃、バンドをスタートさせて曲を作り始めました。12月には毎日のように演奏して、翌2011年の1月には1st LPをLOS BLOQUES FANTASMA SQUATという場所でレコーディングして、リリースされた5月から6週間近いユーロ・ツアーを行いました。それが結成からバンド初期までの流れです」

■じゃあ今はみんなバルセロナに?

「そうです!」

■BELGRADOの今のメンバー・ラインナップは?

「Patrycja-ヴォーカル、Jonathan-ドラム、Renzo-ベース、Fergu-ギターです」

■バンド名、"BELGRADO"と名付けたのは誰ですか?セルビアの首都がBELGRADOという名前ですが、そこから取ったんでしょうか?

「色んな名前を考えていたんですが、リハーサルの時にああでもない、こうでもないとアイデアを出し合った結果この名前に決まりました。どこか都市の名前にしよう!となって。例えば私の故郷WARSAWみたいに。でもその名前は既に使われているので(笑)。それでこの名前、BELGRADOに決まりました。色々な歴史を持った興味深い都市なので、みんながバンド名から様々な想像を膨らませてくれる方が良いかなと思って。

BELGRADOとバンド名が決まって、その土地ですごくプレイがしたくなったんですが、最初のツアーでセルビアを訪れることができました。素敵な時間でしたよ」

■ヴォーカルのPatrycjaはSECTというバンドでドラムを叩いていたけど、解散しちゃったんでしょうか?他にメンバーが関わってるバンドはありますか?

「そうなんです、残念ながらSECTは解散です。ギターが1年以上前にベルリンに移住したので。でも私は今NADIEという新しいバンドでドラムを叩いています。4トラックで録音したデモを最近リリースしました。

それからCIUDAD LINEALのメンバーと一緒に新しいバンドをちょうど始めたので、これもワクワクしてます!

私以外のBELGRADOメンバーは今は他にバンドはやっていません。でもドラムのJonathanは昨年の夏から、自室で何か音楽を作ってるようなので、遠くないうちに聴ければいいですよね。

過去には、メンバーはフィンランドのハードコア・スタイルのDROMDEADというバンドや、私もポーランドに住んでる頃にALERT! ALERT!というバンドをやっていました。そのバンドはOHYDAと名前を変えて今も活動してます」

■今日のユーロ圏の中で、特にスペインのパンク・シーンは拡がりを見せてると個人的に感じてるんですが、バルセロナの状況はどうですか?新しいバンドがたくさん出て来てる感じでしょうか?

「バルセロナでは常に新しいバンドがたくさん産まれてきていますね。それでももっともっと出てきて欲しいんですけど(笑)。

LPもリリースしたガールズ・バンド、CHROMAはちょっとダークなパンクで素晴らしいバンドです。

ハードコアではANARQUIA VERTICALとULTRAが新しいバンドです。SECTのVo.Ninaが3人の女性とスタートさせたPESADILLAはちょうどこのインタヴューを書いてる次の日が初ライヴなので凄く楽しみです!

さっき話した私のバンドNADIEが目指すのは、HYPNOTIC(催眠術的)なパンクです(笑)。あとは4人の女の子によるUTTERっていう、英語で唄うけどスパニッシュ・パンク・スタイルのバンドもいたり。色々います!」

■BELGRADOの音楽はポスト・パンクや、ダークなニューウェーブみたいに呼ばれることが多いと思いますが、普段のライヴもそういった感触のバンドと行うんでしょうか?

「私たちは決まったバンドとばかりライヴをすることはないので、様々なスタイルのパンク・バンドやポスト・パンク、ニューウェーブなど色々ですね。どういったライヴか、フェスティヴァルかによるので。ほんと色々です」

■ではユーロ圏で、いわゆるポスト・パンクでチェックするべきバンドはいますか?

「最近解散してしまいましたが、私たちの友達でもあるCIUDAD LINEALは素晴らしいバンドでした。

他には私がとても好きなコペンハーゲンのMOTHも。最近ベルリンのフェスティヴァルで一緒にプレイしたDIATや、同じくベルリンのTRANSYLVANIA。あとはフィンランドのKUUDES SILMAでしょうか」

■BELGRADOはバルセロナのスクワットから現れたと聞いたことがあるんですが、何かそういった活動の拠点としてる場所があるんでしょうか?

バルセロナや他のスペインの都市では、スクワットは多く存在してるんですか?



「BELGRADOをスタートさせた当初は、メンバーみんなスクワットで生活していて、主にライヴやスクワットでの活動でそれぞれお互いを見かけましたね。
バンドを始めて最初の2年間は、先にも話したLOS BLOQUES FANTASMA SQUATという、20年近く存在している場所で練習していて、そこで最初の2枚のアルバムもレコーディングしました。私たちが音楽を作るうえでとても重要な役割を持った場所でした。
私とJonathanはまた別の素晴らしい場所で、5年以上スクワット生活をしていました。MONTSERRATという場所です。昨年11月に立ち退くことになってしまい、今はもう存在していませんが、ここも、とても大切な場所でした。たくさんの友人やたくさんのバンドが宿泊して。とても多くの、人生の大事な時間をそこで過ごしました。もちろん、やることはたくさんありましたが。困難なことと、楽しいこともたくさん。
MONTSERRATにお別れを告げる意味で、屋上でライヴを企画しました。素晴らしくクレイジーな夜でしたね。
今Jonathanは他の場所でスクワットを続けているし、私もここ2年間放棄された建物で生活しています。バルセロナでは、スクワットに対する法律は悪くなるばかりですが、それでもまだそういった生活は可能です。
どこか一つを拠点と考えるのは難しいんですが、先に挙げたそれらの場所と、それらスクワットでの事柄が私たちにとって素晴らしく大切なものだと思います。
私にとってそれは、労働協約に基づいて成り立つ金銭主義とは違った、オルタナティヴな暮らしを創造し自分自身で物事を産みだすDIYの根本なんです」
■パンクスがバルセロナを訪れた時にオススメの場所はありますか?
「私たちの友人が運営しているレコード屋、DEAD MOONともう一つDAILY RECORDSもオススメです。
ライヴやスクワットでのその他アクティビティーについての情報は、Usurpa(https://usurpa.squat.net)で得ることもできます」
■バルセロナ拠点のレーベルなんかもあれば教えてください。
「DISCOS ENFERMOSやDEAD MOON RECORDSでしょうか」
■ここ数年、海外のパンクスとそれぞれ住んでる地域について話していると「ジェントリフィケーション」という言葉が頻繁に出てきます。バルセロナではその地域特有の問題は何かありますか?
「バルセロナは近年変わりつつありますね。その大きな原因は観光事業だと思います。メイン地区の周辺部が、より多くの観光客を呼び込もうとしていて、地元の人々やローカル・ビジネスに対する隔たりが生まれてきています。ワールドワイドなブランドやホテルがそういった地域を占有し、その土地の人々や土地に根付いた活動などを行うスペースが少なくなっていますね。
また法律も、たとえばスクワットや移民が困難になる方向へと変わってきています」



■スペインに浮かぶマヨルカ島にも多くのパンク・バンドが存在してると思うんですが、バルセロナのパンク・シーンとマヨルカ島は深い交流はありますか?BELGRADOはマヨルカ島でライヴしたことはありますか?また逆にマヨルカのバンドも、バルセロナやマドリッドなどスペインの他の都市で頻繁にプレイするもんなんでしょうか?
「マヨルカはとっても美しい島で、とっても素敵なパンク・シーンも存在しています。バルセロナとマヨルカは距離的にも近いので普段から関わりは多いです。期間の長短を問わずバルセロナに滞在する人も多いし、ライヴや活動を活発にオーガナイズするパンクスもマヨルカに存在しています。
まだマヨルカでライヴはしたことが無いんですけど、遠くないうちにしたいですね!
プレイとは別にライヴには足を運んだことはあるんですけど、素晴らしかったです!ショーが終わって街から離れた場所に行って、月明かりの下でアフター・パーティーをしたり。翌日には海岸沿いの美しい岩場で過ごしたりも!
ORDEN MUNDIALやTRANCE、DESENTERRADAS、POU、PANTALLA、RACA MORTAなどなど、色んなスタイルの良いバンドがいますね」
■BELGRADOをやるうえで影響を受けたバンドや音楽って、何かありますか?
「たくさんのバンドやジャンルから影響を受けてるんですが、例を挙げると、60年代のサイケデリック・ミュージックや70年代のダブ・ミュージック、同様に80年代のポスト・パンクやコールド・ウェーブ。他に60年代のサーフ・ミュージックやジャズなんかも聴いています」
■BELGRADOとはあんまり関係ない話になっちゃうんですが、最近よくPARALISIS PERMANENTEというバンドの名前を耳にします。1年くらい前までこのバンドのことを全然知らなかったんですけど、スペインのパンクスには昔から人気のある存在だったのでしょうか?
「そうですよ!ここでは80年代からかなり人気のある存在ですね。もちろん私たちも大好きです。バルセロナではなくマドリッド出身のバンドで、様々なポスト・パンク、ニューウェーブ・バンドが出現した"MOVIDA MADRILENA"というムーヴメントを担ったバンドの一つです」
■これまでとこれからのリリースについて聞きたいのですが、1st LPは複数のレーベル(STATIC AGE、DISCOS ENFERMOS、DISCOS MMM etc)からリリースされましたよね?今までで何枚くらいプレスされてるんでしょうか?
「えーと…忘れちゃいました(笑)」
■では気を取り直して!2nd LP、『Siglo XXI』についてですが、これは今をときめくロンドンのLA VIDA ES UN MUSからのリリースです。LVEUMのオーナーPacoとは長年の付き合いなんでしょうか?LVEUMは一緒に事を進めるにはナイスな感じですか?
「すごく仲良くやっているので。彼との作業は心地よいですね。レーベルの仕事に対して熱心に取り組んでいるし、一緒にやれるのはハッピーですよ。

Pacoとの仲はここ数年なんですが、リリースはお互いをより親密にさせてくれました。もちろんそれ抜きにしても、素敵な友人です」

■何かイヤなところ1つくらいはあるんじゃないですか?

「彼は点心料理が大好きなので、一緒にディナーに行ったらきっとみんなの分も食べちゃうんじゃないかな(笑)」

■そして待望の3rd LPもリリースされる予定です。前作から変化は?

「多分このインタヴューが出るころには、3rd LPはまだプレス工場かな?

バンドのまた新たなステップになったと思います。もちろん日本にも持って行くので、もうすぐみなさんに聴いてもらえると思います!」

■音楽とあわせて、アートワークもBELGRADOにとって重要な側面であるように思います。ほとんどはドラムのJonathanによるものなんでしょうか?

Jonathan「僕らにとってアートワークは、レコード全体の感触を目に見えるかたちで表す、音楽と並行したものなんだ。音楽で創作したムードをヴィジュアルで拡張させるというか。

アートワークを完成させるのは僕だけど、Patrycjaも素材やアイデアの段階から関わっていて、それらは完成したアートワークにも使われているよ。一緒にアイデアを練ることもよくある。たとえば『Siglo XXI』LPに使われた背景やバンドの写真は彼女によるものだし。文字や絵を描くのや、全ての素材を組み立てるのは僕だね」

■バンクーバーのSPECTRESの3rd LPのスリーブとブックレットもJonathanが担当していますよね?他にはどんなバンドのアートワークを引き受けたのか教えてくれますか?

また、影響を受けたアーティストはいますか?

Jonathan「そうだね、SPECTRESの『UTOPIA』LPは僕がアートワークを担当しました。あとはベルリンのバンド、BLANK PAGESの『NO RECEPTION』7"epや、ブラジル・サンパウロのBALLET CLANDESTINOのデモ、ドイツ・ビーレフェルトのGLOOM SLEEPER『A VOID』LP、他にも色んなバンドのツアー・ポスターやシャツのデザインとか。

影響を受けたのは、20世紀はじめ頃のアヴァンギャルド・ムーヴメント。キュビズム、フューチャリズム、シュプレマティズム、コンストラクティビズム、ダダイズム、デ・ステイル、バウハウス、などなど」

■影響を受けた音楽には先ほど触れましたが、好きな映画や芸術家なんかはどうですか?

Jonathan「僕が好きなのはフランスのヌーヴェルヴァーグ。アーティストはさっき挙げたアヴァンギャルド・ムーヴメント周辺だね」

「私も50年代60年代のフランス映画はすごく好き。ゴダール、トリュフォーとか。それから新しいギリシャ映画や、遠くの国の色んな映画も。Jonathanが話したアート・ムーヴメントも好きです」

■ポスト・パンクといわれる音楽についてもう少し話を。個人的にこういう音楽は好きなんですが、10年くらい前、このスタイルのバンドが多く出始めた頃はそれを一過性のトレンドだと言う人も多かったと思います。でも今はパンクの中の一つのスタイルとして定着したと思ってます。パンク・ミュージックが多様性を持つのは良いことですよね?

「多様性を持つのはポジティヴなことだと思います。それは、表現の自由がもっと拡がるのを意味するし、パンクはそうあるべきだと思うので。

表現の自由とは、何処であろうと存在する体系、仕組みから脱却するということかな。それがたとえパンクの中であっても。

私にとって重要なのは、DIYな理念、倫理を追求して、やるべきことに力を与え自分の思い通りに行うことなんです」

■ブラジルでのライヴ写真も送ってくれました。ユーロだけでなくこれまでに多くの国をツアーで訪れたんでしょうか?

「ブラジルと南米ツアーはアメイジングでした!冒険と経験の連続で。

そのツアーの中でブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、チリと訪れて…21日間で11,000kmも移動しました。すっごくクレイジーでエナジーが充満したライヴばかりで。ありとあらゆる風景の中をバンで進んで行って、活力に満ちた人々に出会って。このツアーが一番最近になるんですけど、アメリカとカナダでもプレイしました。

日本のように、まだ訪れたことのない場所に行くのはとても楽しみですね!東南アジアやオーストラリアにも」

■遂に日本に!ライヴや、日本のパンクと出会うことにワクワクしてるのはもちろんだと思いますが、それ以外に楽しみにしていることはありますか?

「もちろん日本でプレイして色んな人に出会えるのが楽しみで仕方ありません!ツアーの中で多くのことを吸収していきたいですね。

個人的に、少し長く滞在して旅行もできたらなーと思ってるんです。

写真が好きなので、フォトギャラリーも訪れたいですね。あと植物も大好きなので普段見ることができない種類を、植物園や自然の中で眺めたり。それからそれから…(笑)」

■たくさんのインタヴューありがとうございました!最後に一言あれば!

「ツアーがすごく待ち遠しいです。もうすぐ会えますね」



BELGRADO Japan Tour 2016ツアー日程

9/17(土)東京/新大久保Earthdom
9/18(日)三重/四日市Vortex
9/19(月)大阪/難波Bears
9/21(水)岡山/津山K2
9/22(木)愛知/今池Huckfinn
9/24(土)東京/新宿Antiknock



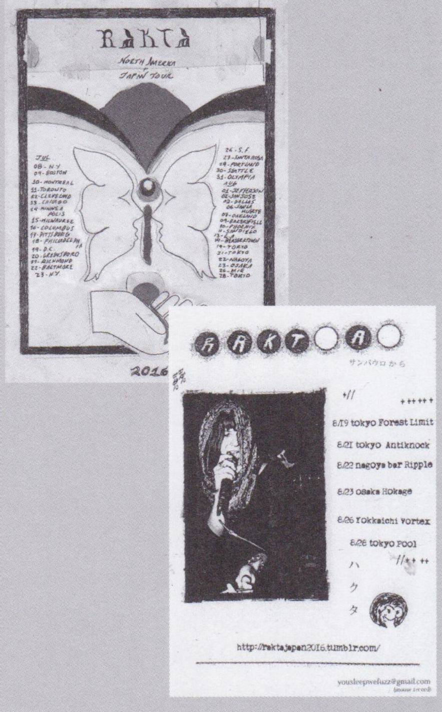
RAKTA

サンパウロ・オール・ガールズ・ポスト・パンク!MAXIMUM ROCKNROLLでも存在をピックアップされ、USA/540 Records、UK/LA VIDA ES UN MUS、ブラジルのNADA NADA DISCOSと世界主要のパンク・レーベルからのリリース、そして2014年には北米/ユーロと3か月近いツアーを行ったRAKTA(ハクタ)、2016年地球の裏側から遂にここ日本に。

GATTOPARDOやCADAVER EM TRANSEらとともに現在勃興しつつあるサンパウロ・パンク/ポスト・パンク・シーンを担い、今号のEL ZINEで特集されているBELGRADOとも交流の深いバンドです。

近年のワールドワイドなポスト・パンク群と共鳴しながらもより有機的、呪術的に飛翔する、その土地にその音楽ありなダーク・ポスト・パンク・サイケデリアを日本で体感するチャンス。





RAKTA Japan Tour 2016

8/19(金) 東京/幡ヶ谷Forest Limit
8/21(日) 東京/新宿Antiknock
8/22(月) 愛知/名古屋Bar Ripple
8/23(火) 大阪/心斎橋Hokage
8/26(金) 三重/四日市Vortex
8/28(日) 東京/桜台Pool

http://raktajapan2016.tumblr.com/

ツアー・バンとJUNTAとスキゾ　オスロに出発前



2014年末に行われたSKIZOPHRENIAのEURO TOURに次ぐ2回目のEURO TOUR！そのツアー・レポートの依頼を受けEL ZINEに初登場!!
さて、前回のEURO　TOURがそうだったように自分らのタイミングでツアーの話を向こうの友人にお願いしたわけですが、今回はさらに主なツアー・オーガナイザーがいるわけでなく、すなわち自分が企画者という形に。
参考になるかはわからないしすげー長くなりそうだけど、とにかく書きすすめてみよう。　TEXT:YU!(SKIZOPHRENIA/VOX POPULI)

■キッカケやツアー段取り

前回のヨーロッパ・ツアーでは南の方を廻ったので、行けなかった方にも行きたいなと必然的に思うわけで…、んじゃ自分達のタイミングで決めて行こうと。

行くタイミングは2016年のゴールデンウィーク・シーズンに9日間で決定。正式ドラム不在のSKIZOPHRENIAだが、前回ツアー同様カズキ(Killerpass,POVLACION)が即答OK!

前回のヨーロッパ・ツアーで特に強く感じたのが、地元津山を中心にツアー・サポートという名の旗下で勝手に楽しんでやっていたこと、ライヴハウスや周辺の路上または打ち上げ会場なんかで交わした乾杯、はたまたメールなどのやり取りで創り上げてた海外のパンクス達との繋がりは、自分達が思っていたよりもさらにひと回り巨大で偉大だったってこと。

自分たちもバンドをやり始めて結構な年月が経つし、友達もたくさんできたし、これなら誰か1人に任せっきりにしなくても、自分が企画者となり自分達の繋がりを使って行けるのではないかと。やってみたくなる。

今回は北欧とオーストリアの方も行きたいなと思ってたので、とりあえずフィンランドに着いてオーストリアから帰国というのがいいかなと。

フィンランドは1981のヤウル、ユッカ(SOTATILA,LAPINPOLTHAJATなど)に、オーストリアはゲオルグ(RUIDOSA　INMUNDICIA)に相談。「おーいいね！企画するぜ!」と話が早い。

「ベルリンくらいなら迎えにいくぜ!」とゲオルグのかっこよすぎる言葉もあり、9日間でこの間をツアーするのもどうにかなりそうなんで、初日と最終日の場所決定!!

ゴールデンウィーク・シーズンで値段が上がるのもいやだったので、飛行機を確保する。これが2015年の夏前か。不確定な部分と不安要素は盛り沢山だが、まぁなんとかなるだろう!最悪、電車で移動だ!そうやって日本ツアーに来てるバンドもいるだろ？

そこからどこに行くのか地図とにらめっこ。各地の友達に連絡して企画を頼んだり、どこのパンク・シーンが面白いとか、どんなバンドがいるとか連絡を取りはじめる。ベルリンからオーストリアまではゲオルグのおかげでわりと早く話が決まったけど、ストックホルムからベルリンの間までをどういう風に廻るかがすんなり決まらず。

そうこうしてると朗報が!ストックホルムからツアーを同行してくれるバンドがいると!名前はJUNTA!コペンハーゲンでK-TOWN FESTIVALを企画したり、ADULT　CRASHという名のレーベルをしてるヤコブのバンド。

NUCLEAR DEATH TERRORのJAPAN TOURに同行してたヤコブ!ぼくん家に泊まったこともあるわ!お礼にNUKKETEATTERIのテスト・プレス盤送ってくれたわ!

ヤップ (ENZYME,ex-KROMOSOM) デザインのツアー・ポスター



というわけで、様々な人のサポートがあり、どうにかなりそうになったSKIZOPHRENIAのヨーロッパ・ツアー。出発前からもうすでにNETWORK OF PUNK FRIENDSに感動の幕開け!!

■4月29日　関空〜タンペレ

津山国際空港ってもんがあったらどんだけ楽なんだ?と無謀な妄想をしつつ、28日の夜のうちに関西空港へ行ってた(スキゾ嫁チームの見送り。大感謝)ので空港ロビーにて起床!!今回は直行で乗り換えもなく、たかが10時間程度の移動。津山から仙台よりも早く着く。しかもビール呑み放題。呑んだり寝たり起きたりしてたらもうヨーロッパ。

ヘルシンキ・ヴァンター空港に到着!さて入国審査だ。今回は楽器持参!というのもタンペレのライヴの企画者でもあるユッカに確認したところ、
「絶対大丈夫だから持ってきた方がいい。むしろ送った方がめんどくさい。なんか聞かれたら誕生日パーティーで演奏するって答えろ!演奏でお金を貰わないならSKIZOPHRENIAの名前出しても平気!」
との事だったので節約のためにもそうしてみた。結果、全員余裕で入国!来たぜヨーロッパ!!

空港までユッカとシルック(KUUDES SILMAというかっこいいゴス・パンク・バンドのメンバー)が迎えに来てくれてた!ありがたいしユッカとは何度も会っている友達なのでメチャクチャ安心する。荷物を積んでフィンランド・ビールを呑みながら無料の高速でタンペレに向けてレッツ・ゴー!

着いたばかりということもあり景色がいちいち素晴らしく眺めてるだけで楽しい。木が渋い。道中「この田舎町がPYHAKOULUの故郷だ」とか、ユッカのパンクな案内を交えつつ2時間くらいでタンペレの少し手前にあるユッカの家に到着!メチャクチャ素晴らしい一軒家!

レコード・オフィス部屋とか色々見せてもらった後に階段上のホールにあるバー・カウンターでフィニッシュ・パンクを聴きながら小一時間呑む。

さあ、出発の時間だ!!30分ほどで着いたのは今日SKIZOPHRENIAが演奏するのとは別の、郊外にある倉庫の地下にある会場。同じ日にベラルーシのMASSPOLLUTION (GLOOM meets D-CLONEな音)ってバンドがタンペレでライヴするみたいで、そこでERISTETYT(89年頃から活動してたバンド。最近再結成したみたい)もライヴをするとな!しかもヴォーカルはユッカ!伝統的フィニッシュ・ハードコア・パンクな演奏を終えてステージを降りたその足ですぐさま移動!

10分くらいで本日の会場であるVASTAVIERTAに到着!VASTAVIERTAはフィンランドで唯一パンクス達によって運営されている会場で、今回のツアーの中で一番日本のライヴハウスに近い会場。機材を運ぶ必要もない。サウンド・チェックを済ませ、1981のメンバーやMAAILMANLOPPUのメンバーと久々の再会を果たす。

楽屋に用意してくれてたフードを食べたりビール呑んだり、物販用意したり。どんどん人が集まってきて、物販も好評で対応に追われていたら、1981からライヴ・スタート!説明不要。最高である。

続いてVASTUSTA。SHORT SHARP SHOCK FINNISH HARDCORE PUNK ATTACK!!

そして出ましたKOHU-63!影響受けてるバンドだし昔の曲はやはりテンションあがる!

MAAILMANLOPPUの格好良さに他のスキゾ・メンバーびっくり!ゴス・パンク路線の曲をまとめたCDをVOX POPULIから出したけど、基本80's FINNISH HARDCORE PUNK ATTACK!!

最後がSKIZOPHRENIA!合わせて9回ある自分らのライヴのことは基本割愛で。強いて言うならこの日はステージがビールでビチャビチャになり残り3曲くらいの時にステージ上の全ての電源が落ちたという、なんとなくフィンランドっぽいアクシデントがあったな。



1981 と MAAILMANLOPPU とユッカと集合写真　タンペレの会場の前

思い返してみれば今回行った国の中で一番知られていたイメージ。なにやらチケットもソールド・アウトだったみたいでかなりの人(といってもそんなにでかい会場ではないので200人くらいか)。物販の売れ行きもかなり好調だしたくさんの人がありがたい言葉をかけてくれたので好評だったのでしょう。

会場で呑みながらしばし談笑した後に荷物を1981号に詰め込み、いざトゥルクへ!2時間のドライヴの後に1981のヤウル宅にて就寝!!



1981 のヤウルと　タンペレにて

■4月30日　ストックホルム

2時間後起床!!ストックホルムまでの移動は船なので1981/VASTUSTAメンバーと共にでかいタクシーで船乗り場へ!

そして彼らも船に乗り込む!!!船の上で遊ぼうぜ!ってことでストックホルムで降りることはなく、そのままトゥルクに向けて帰るみたいだ。嬉しいねー。でもこれは寝れないぞ(笑)。

で、この船、中にレストランやらバーやらゲームセンターやらある馬鹿でかいヤツ。部屋にベッドもついてて、早めに予約してくれたからかどうかはわからないけど1人千円くらいという破格の値段!

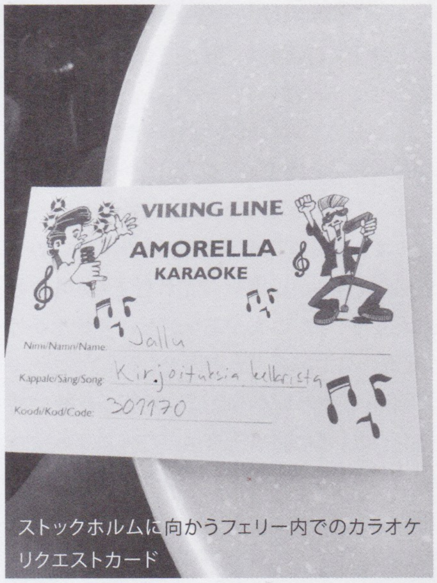
船に乗り込み部屋を確認して軽くご飯を食べた後、でかいホールのあるところでビールを呑む。上部モニターにはKARAOKEの文字。

一般客もたくさんいるここでカラオケができるのだ。カラオケ大好きなヤウルが歌うのは「APPENDIXとKOLLA　KESTAA」。こんなのあるんだ!すごい!

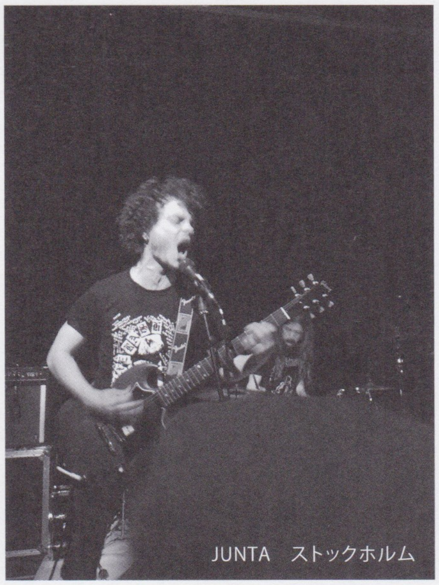
カラオケ・タイムも終わりバンド演奏が始まる。飽きたので船内ウロウロ。外で宴。小さい島だらけなんでいちいち景色がいい。しばらく呑んだ後、さすがに少しは寝たほうがいいってことで仮眠。

起床してサヨナラ・タイム。ありがとう!次は1981 JAPAN TOUR 2017で!

大量の荷物を抱え船を降りる。すぐさま身長低めでテンパのパンクスが声をかけてくる。



ストックホルムに向かうフェリー内でのカラオケリクエストカード


JUNTA　ストックホルム

「SKIZOPHRENIA?JUNTAのマルクス!車は向こうだぜ!」。車の前にはヤコブとエヴァが!初めましてJUNTA!!これから6日間よろしく!!

荷物を詰め込み会場へ!15分ほどで着いたのは周りが森で囲まれた中にある、カラフルなプラスチックの建物。

いわゆるDIYスペース。以前の建物はナチに燃やされたらしく、プラスチックならクソナチ野郎にも燃やされないだろ?ってなもんだ。

ストックホルムの企画はSEX　DWARFのパーにお願いしてて、MOB47とSEX DWARFも一緒にストックホルム・マンゲルな企画にしよう!と盛り上がっていたけど、すったもんだで会場であるCYCLOPENの企画に。

ライヴはもうスタートしてる中、楽器をおろしたりバタバタ。物販を用意してたら物販待ちの人が群がってくる!あ!そうだ。ここはスウェーデンだから通貨が変わるんだ!ヤコブと相談して値段を決める。


物販　ストックホルムにて

今回ヨーロッパ・ツアーのタイミングに合わせてディスコグラフィーLPを作って別ジャケをつけて用意してたけど、その売れ行きがすこぶるいい。

あと前回ツアーの時に好評だったので持ってきた日本のバンドのディストロも大好評!爆買いしてくれる人もいて2日でほとんどなくなった。少し安めに値段設定していたとはいえ、こんなに売れるならディストロで暮らしていけるぞ(笑)!

そうこうしてるとJUNTAの出番!うおー!こりゃかっこいい!ギター・ヴォーカルのマルクスの出で立ち・歌い方、ドタバタでもたついてるエヴァのドラム、面倒見がいい性格が出てるかのように、それを支えるヤコブのベース。曲もヨーロッパ・ハードコアの臭いプンプンなRAW PUNK!!大好きなABSURDの"Blodig Stad"のカヴァーも飛び出し大興奮!!

マルメのハードコア・バンドのDAMAGED HEADを挟み、僕たちSKIZOPHRENIA!その日できることを全て吐き出してライヴ終了、その後動けるようになるまで少し休み物販!

JUNTAメンバーからも嬉しいお言葉!いやいや、あなた達もかっこいいですよ。マジで。

日本語が少し話せるパンク青年が話しかけてくる。「すまんが、お酒呑みたいか?バーに行きますか?払います。クレジットカードある」。こんなありがたい話を断りたくないが、ツアー・チームと別行動は面倒くさいことになるので断る…。ごめんよ…。

ヤコブと今日のギャラを含めて初めてツアーの金銭的なお話を。今回のツアーは自分たちが言い出しっぺなのもあり、もちろん飛行機代の保証なんてものはなく、そんな話も全然してない。

「そういえば初めてお金の話するね。たぶんオマエもそうだけど、オレもお金の話を最初からするツアーはそんなに好きではないんだ」みたいな話をしつつも、JUNTAとSKIZOPHRENIAで廻る間はしっかり者のヤコブに金銭管理は任せることに。

荷物をまとめて本日僕たちを泊めてくれるピア(VOIDFILLER,ex-3 WAY CUM)のアパートへ車で移動。レコード観賞したり、普段の生活の話やらを呑みながら限界までした後、快適なベッドで就寝!

■5月1日　オスロ

起床!!シャワーを浴びてリフレッシュ!!シャワーってのは汚れうんぬんより、疲れを取るためにあるものなんだと気付く。

多めに用意していたつもりのLPがすでに残り半分くらいだったので、ヨーロッパ盤を出してくれたベファ(KICK ROCK/STATE POISON)に連絡して在庫をほとんど送ってもらうことに。

ピアが朝ご飯を作ってくれた。うまし。少しくつろいだ後、オスロに向けて出発!!移動時間は5時間くらい。

E.A.T.E.Rのオリジナル・メンバーであるミカエルが、オスロのライヴに行くぜ!って連絡くれていたけど、急に行けなくなったとかで道中で会うことになり、高速道路の途中で合流!

このへんがE.A.T.E.Rが産まれ育った町なんだと。大量のお土産を頂く。ツアー頑張れよ!と…。ありがたいし、昔から好きなバンドのメンバーが…、と思うと不思議な感覚だけど、パンクの世界はそんなの普通にありえたりするのだった。


E.A.T.E.R のミカエルと SKIZOPHRENIA

少し運転してオスロ市内に到着!オスロ中心部でナビを見ながらウロウロ…。建物に落書きが多くなったなーと思ったら19時頃に会場に到着!企画者であるダニエルと猫ちゃんが歓迎してくれる。初めまして!今日の会場はこのツアーでは初めてのスクワット。

EL ZINEを読んでいる人はスクワットがどういうものかという認識がある人は多いと思うけど、一言で言えば不法占拠している建物。

ヨーロッパの方では不法占拠してもしばらく住んでいたら所有権が発生したりするみたい(国や時代によっても違うんだろうけど…)。


オスロの会場であったスクワット　BARRIKADEN

日本に住む僕たちの感覚からはカルチャー・ショック。パンクが秘密基地を作っている感じ。電気や水道も勝手にひっぱってきてる(これも場所によってさまざま)。もともとスクワットだったけど、今は家賃を少し払っているとか、光熱費払っているとか、国や市からプレゼントされたとか、場所によって色々あるみたい。

で、このスクワット、パンクスなら絶対経験すべき場所!とは思わないにしてもメチャクチャ興味深く、機会を作ってライヴ見にでも行ってみることをオススメします。

さて、ライヴ会場は地下。物販、機材を運ぶ。この作業もこのツアー初だなあ。会場にもよるけど、基本的にはマイク類以外は持ち込み。寝床でもあるリビングに案内されると若いパンクスがたくさん。ご飯がもうすぐできるよー、とのこと。

前回のツアーでもそうだったけど、ヨーロッパではライヴ前に会場でフードが無料で用意されている。これが当たり前らしい。この日はメキシカン・フード。うまし。

サウンド・チェックする?とのこと。基本このツアーでサウンド・チェック的なものはないと思っていたけど、どうやらPAの人の音調整のためにも何かしらの音は出してほしいみたい。というわけでやる。

ライヴは21時くらいからぼちぼちオープン。ちなみに外はまだ明るい。ダニエルに地下にあるバー・コーナーへ案内される。ツアー・バンドはここでビールがもらえると。ヨーロッパのパンクのライヴではこのスタイルが基本。ここは1人5本まで無料。さっそくいただく。

さて、ライヴがあった日曜日はスクワット内でのミーティングがあるので、普段ライヴはやらないみたい。それに5月1日はワーカーズ・デイでデモがあるし迷ったけど、SKIZOPHRENIAが好きだからやることにしたみたい。ありがたい。

そしてこの日が、このスクワットで最後の企画になるかもしれないとのこと。オスロ市はこの建物を売り払いたいらしく、出て行かなくてはいけないかもしれないと。でも俺たちは闘い続けるよ。とにかく今日は楽しもう。といった感じ。



オスロの中庭でくつろぎタイム

オスロの中庭にて JUNTA のエヴァ、マルクス、ダニエル



怪しい地下室にたくさんの人が集まりだし、ライヴ・スタート。

1番目NEGATIV。ダニエルのバンド。初ライヴらしい。ダニエルは他にINTERNT OPPGJORというノイズ・パンクなバンドをやっている。

2番目THE ODELEGGERS。リリースもいくつかあるノルウェーのバンド。KAFKA PROCESSにも通じるノルウェーっぽいメロディとストリート・パンクを足したような感じで曲はよし。だがなんというかリハーサル感は否めない。

続いてJUNTA。相変わらずかっこよし。ツアーで一緒に廻るバンドがかっこいいほど恵まれてる環境はない。自然とモチベーションが上がる。



SKIZOPHRENIA　オスロ

続いてSKIZOPHRENIA。果たして違う環境に住む人達は、僕たちの放つパンク・ミュージックをどう感じるのだろうか。とほんの少しだけ考えたけど始まってみれば関係なし。自分たちのパンクをぶちかますだけなのだ。

終了後、物販。昨日もだったけどここノルウェーも通貨が違う、が滅多に見せないSKIZOPHRENIAチームワークで難なくこなす。物販を片付け、楽器等の荷物はステージ上に一旦置いてドリンク・タイム。

「全然知らなかったけどすげーよかったよ!」って人に結構話しかけられる。自分らの音楽を伝えるにはライヴしに来るのがやはり一番手っ取り早いな。という当たり前のことを改めて思う。

ダニエルの部屋に行きディストロやリリースを見せてもらったり、中庭の焚き火の前で騒いでるヤング・パンクスの輪の中に混じってみたりしつつ、外が明るくなったころ就寝!

■5月2日　ヨーテボリ

朝起きると、なんとも言えない表情のヨシヲが突っ立っていた。どうやらスクワット周辺を散歩していたのはいいけど、鍵が閉まって入れなくなりそこらじゅうのハシゴを集めて塀を乗り越えて帰ってきたらしい…(笑)。すげー疲れた顔(笑)。

時計を見るとまだ8時か…。正直めちゃくちゃ腹が減った…。というのも、いつもライヴ前にご馳走になるフード。あと何時間後にライヴするとか、満腹になると吐いちゃうので少し控えめにいただくのです。そしてライヴ後、何も食べずにひたすらビールを呑む。ライヴ会場にいる人全員、ナッツ的なものすら食べずにビールばかり。そういう生活スタイルなのだろうけど、最初の何日かはとにかく、腹が減って目が覚めていた。

ヤコブも基本早起き。彼はコーヒー大好きなのでいつも僕らのコーヒーをいれてくれる。面倒見もいいしシッカリしてるし兄貴的存在。

11時にリビング集合と決めて食料調達のためにSKZチームでマーケットと散歩へ。ポテトチップスを買い込む。散歩は特にどこに行くわけでもなく周辺をぶらぶらして景色を楽しむ。

時間になりスクワットに戻る。みんな揃って向かうのはBLITZというスクワット的な建物。ここは昔からある場所でノルウェーのハードコア・シーンのことを調べたら出てくる場所。SVART FRAMTID「Live In Blitz」っていうテープも当時出ているし、昔から様々なバンドが出入りしている場所。



BLITZ の前で JUNTA のヤコブ以外とダニエルとスキゾ

中を案内される。でかいホール、シルクスクリーン部屋、なんとラジオ・スタジオまである。ここでブランチを。ギグ・マネーから安価で提供してもらう。いろいろなスタイルのパンを食べて大満足。その後レコード屋さんに行った後スクワットに戻り荷物を積み込みダニエルとお別れ!

「今までで一番最高な日曜日だったよ!またいつでも来て!日本のバンドでノルウェーに来たいバンドがいたらいつでも手伝うぜ!」

さて、向かうはヨーテボリ!!ANTI CIMEX、

DISARM、SKITSLICKERSなんかを産んだパンクの聖地!!

車内爆睡!会場までワープ!着いたのは街はずれの倉庫が並んでいるところ。その一つが会場。だだっ広いスペースに自ら組んだステージ、キッチン、ベッド・ルーム、たくさんのソファー!ここは数人でお金を出し合ってみんなで使っているDIYなスペース。

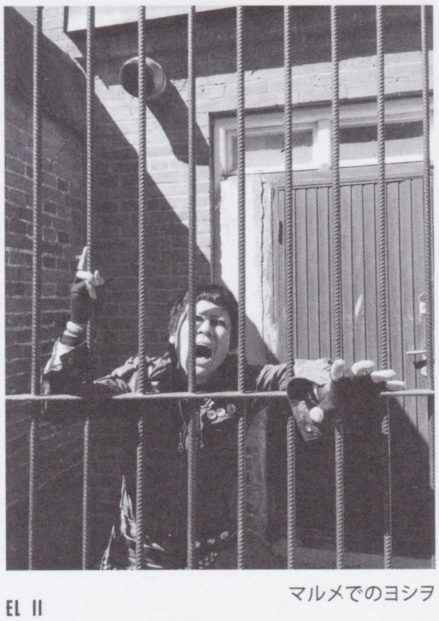
そしてそこに出入りしてるDUNDERHASTEN BLIXTENの企画(ヨーテボリと前日のオスロはJUNTAが現地のパンクスに連絡とって企画組んでくれた)。DUNDERHASTEN BLIXTENのメンバーの女の子達が作ってくれてたフードとビールをいただく。うまし。

しばらくしてライヴ・スタート!!一番目はDUNDERHASTEN BLIXTEN。フロントはギター・ヴォーカルのお兄さん、他メンバーは女の子という編成の、いわゆるハード・ロックとか"なんとかメタル"なバンド。お世辞にも全然上手いとは言えない演奏とおそらくバカテク・ギター&ハイトーン・ヴォーカルなSKITSLICKERSのシャツを着たギター・ヴォーカルのお兄さんというアンバランスなバランス感、曲もパンクっぽさを感じ、普段メタルとか聴かない自分でもビックリするくらいのかっこよさ!!お客さんもその周辺のメタルとかハード・ロック好きそうな女の子もたくさんいて大盛り上がり!!

続いてJUNTAも、地元コペンハーゲンから近くよく来ているせいか友達がたくさんいるのが感じられるフレンドリーながらも相変わらずカッコ良い演奏!!

ヨシヨシ!続いてSKIZOPHRENIA!メタル好きそうなお兄さんお姉さんからもありがたい声をいただいたので好印象ではあったのかな。

ライヴ終了後、謎のディスコ・タイム突入!!ヒット曲やなんやでみんな大盛り上がり!!そんな中、それを見て楽しんだり、今後のツアーのためにもマジメな話をしたりして夜明け前に就寝!!



マルメでのヨシヲ

■5月3日 マルメ

10時くらいに起床!!みんなボチボチ起きだしてご飯を作ってくれた!!パンに加え、豆腐を焼いたやつ!こりゃうまい!

みんなに別れを告げ、いざマルメへ!の前にヨーテボリのレコード屋さんへ!!全ジャンルが置いてありパンク・コーナーが少しある感じだけど、日本ではなかなか見ないレコードがあったり、値段もものによっては日本より安く漁るのが楽しい。JUNTAメンバーもレコード屋さんが大好きなので2軒ハシゴして漁る漁る!

「これ知ってる?かっこいいよ!」とかそんな話しながら時間が許す限り満喫!!時間になりマルメに向かってレッツ・ゴー!!途中、高速道路っぽいところで警察に止められる。

「どこに行ってるんだ?」「日本のバンドとツアー中」「なんてバンド?」「スキゾフレニア」「激しそうな名前だな」という会話のみで終わる(笑)。

トータル2時間半くらいで会場に到着!!ここもほんの少し街はずれのビルの地下。キレイめで新しめなDIYスペース!

マルメの企画は日本ツアーで対バンしたHARDA TIDERのギターのカッレに頼んでいたけど、別のツアーで居れなくなったので友達のフィリップの企画に!

荷物を下ろしリハ、物販の準備!!ご飯ができたぞー!ってことで台所へ!基本的に台所にデカイ鍋、デカイプレートにドン!ドン!ドン!!って料理が置かれててそれを皿に各自が取るスタイル。そしてこの日もメキシカン・フード!!!

「ヨーロッパなのにメキシカン・フードばかりだな(笑)!!」とはJUNTAメンバー。そういえばそうだな。聞くと、どうやら日本人だからライス(粒が長くパサパサ)を使った料理を作ってくれてるのだそう。ありがたや…。

食べ終わって、サウンド・チェックしたり、わさび味のスナックとかナッツを買いに行ったり…。スタート時間も近くなりHARDA TIDERのメンバーとも久々の再会を果たしたり、日本から帰って来たばかりのCRUTCHESのメンバーと「初めまして!」したり、そうこうしてたらSVART STADHJALPからライヴ・スタート!

何枚かリリースされた音源もかっこよかったので楽しみにしていたバンド。キャッチーさもあるD-BEATではないSWEDISH HARDCOREが痛快で心地よし!!

毎回素晴らしいJUNTAを挟みSKIZOPHRENIA!!どの会場も日本のライヴと比べたらお客さんも多い。でももちろんSKIZOPHRENIA目当て!っていうお客さんばかりではない。むしろ割合でいえばはるかに少ない。ライヴが始まるとき、前列の方はガラ空きの時もしばしば。それが逆にテンション上がる!!

パンク/ハードコアの音楽が好きで、日本のバンドにも興味があるから、いいライヴしたらその分反応がある印象。最終的には盛り上がって、アンコールがあったりライヴ終了後に声をかけられたらそりゃ嬉しいし達成感あり。

ライヴ終了後、物販!物販してる時にカズキが余りのドリンク・チケットで飲み物を取ってきてくれるというので、「ビール以外のやつあったらそれで」と言ったらテキーラが4つきた(笑)!!スキゾ4人で乾杯してたらマルメ・パンクスとのテキーラ大会になる。ドリンク&ユナイトってやつ。しばらく会場内で呑んで、荷物を全てステージに置き寝床へ移動!フィリップの案内で向かうはHARDA TIDERのカッレのアパート。

途中、また警察に止められる。飲酒検査もされる。ヤコブはアルコール呑まないので問題なし。南スウェーデンはアチコチに警察がいるイメージがつく(笑)。アパート到着!カッレ不在でお邪魔します!シャワーもあり快適な時間。JUNTAのメンバーと談笑してお休みなさい!!

■5月4日 コペンハーゲン

起床!!11時にフィリップとマーケット広場で待ち合わせ!!するとフィリップは天使のような赤ちゃんと共に現れ、一同魅了される。

なるほど。忙しそうに常に家を行ったり来たりしていたのはそういうことだったのか。



フィリップとその赤ちゃんとヨシヲ マルメのカフェにて

本日はカフェみたいなところで朝食。でかめのサンドを食べて満腹となった私たちが向かうはレコード屋!!パンクスがよく住んでいるエリアにあるレコード屋。パンクのレコードも多め。漁る漁る!!このレコード屋さんで見たことある人が来店!わ!前田さん(ENCROACHED,TOO CIRCLE RECORDS)だ!同期間でヨーロッパ周遊旅行しててベルリンのライヴに来るとは聞いていたけど、まさかのフライ

ング・ミート(笑)!気の済むまでレコードを物色したのちに、コペンハーゲンはすぐ着くけどどうする?ってことで、とりあえずコペンハーゲンに向かおう。ここでみんなとサヨウナラ!!また会おう!!

コペンハーゲンに向けてゴー!コペンハーゲンまでは橋を渡るだけ!コペンハーゲンのハード・ロックなバンドを爆音で聴きながらデンマークにイン!!

たくさんの人で溢れる中心部を車内から色々案内してもらう。JUNTAのメンバーも若干テンション高めだ。この橋を渡ったらオレらが住んでる地域だ!ってことで渡ってすぐくらいの場所に駐車。

そこは本日の企画者でもあるクリスティーナ(NUCLEAR DEATH TERRORのベースの女の子、ヤコブのパートナー)の職場。そこでベファが送ってくれていたSKIZOPHRENIAのLP追加分を受け取る。車をそこに停めて少し歩く。ある通りに入る前にヤコブが「ここ曲がった通りは友達だらけだ」って言っていたがまさにその通り、10歩歩いて誰かに挨拶して、また5歩進むと誰かとハグして会話が始まり一緒に歩き、その間にもたくさんの人と挨拶。

とりあえず公園のある場所まで行きビールを調達してそのへんで呑む。マルクスのお母さんが包丁とメロンを持って登場したり、「お!SKIZOPHRENIAだな?今日見に行くよ!」と声をかけられたり。コペンハーゲン・パンクスの住むエリアに来た感半端ない。

ライヴまで時間がかなりあるのでSKIZOPHRENIAでぶらぶら。なんか面白そうな店はないかなーと思いつつ中心部に行ってみるも特になし。ブランドのお店や大手チェーン店中心でつまらない。結果歩いて疲れただけ…。

集合時間になり、ライヴハウスへ車で向かう。会場は日本のパンク・シーンでも知名度のあるUNGDOMSHUSET。以前のUNGDOMSHUSETは取り壊されたので新たな建物。2つの建物がつながった面白い作り(UNGDOMSHUSETのホームページに経緯なんかが書いてあるから気になる人は調べてみてください)。

ハードコア・パンクが爆音で流れる台所で馬鹿でかいフライパンをふっていたクリスティーナに挨拶!お久しぶり!

ヤコブに会場内を案内してもらう。2階に台所、綺麗なベッド・ルーム、シルクスクリーン部屋、洗濯部屋、チルアウト部屋、3階には行ってないがリハーサル・スタジオが5つもあるらしい。

ご飯がそろそろできるぞー!ってことで台所へ!パセリ・ソースと小型ジャガイモとフェイク・ミートを使ったデンマーク伝統料理!うまし!ライヴ・スタートまで物販を用意したり会場内をウロウロしたり。週末にDOOM系?のフェスがあるみたいで会場のいたるところでペイントしたり、旗作ったり、灯篭みたいなんを作ってる人がいる。

続々と人が集まりだし夜9時過ぎにライヴ・スタート!地元で見るJUNTA!どこで見ようと素晴らしいRAW PUNK ATTACK!あと2回しか見れないのかー…。

続いてこの日がデビュー・ギグだというARSLEというマルメのバンド。SKITKIDSとINFERNOHのメンバーの新バンドだっていうので期待してたけど裏切らないかっこよさ!



ARSLE　コペンハーゲン

最後はSKIZOPHRENIA!!ヤコブは「ライヴはすげーよかったのに、もっと人が来て盛り上がってもいいのに!コペンハーゲン・ファック・オフ!」って冗談で言ってたけど、そうだったのかな?自分的にはぶちかませたのでヨシ!

終わって物販!この日は日本から持ってきてた日本酒を物販にフリー・ドリンクとして置いてみたけど大好評!!こんなことなら毎日分持って来ておけばよかった!今度から持っていこっと。

LPは補充したけど充分すぎる量ではないから枚数制限して売ることにしたけど足りなかった。嬉しい悲鳴。



SKIZOPHRENIA　コペンハーゲン

ライヴ終了後会場で呑む。DJの女の子が流すパンク・ミュージックを聴きながら、ANTI CIMEXという名のK-TOWN FESTIVAL募金カクテルがあったので呑みまくる。千鳥足になりながらも快適すぎるベッド・ルームに朝4時ごろ戻って就寝!

■5月5日　ベルリン

朝9時起き!9時半にご飯!パンとサラダとコーヒー!朝も早くから用意してくれて感謝。

10時すぎにベルリンに向けて出発!!途中フェリーを使用。2度目のフェリーだし興奮はそんなにないし特筆することはない。中にあるスーパーマーケットのワイン試飲コーナーでおば様達と結構な量を呑んだりしてたら2時間でドイツに到着。そこからまた2時間半でベルリンへ。KOPIという有名なスクワットに到着。門を開けて入ると中庭の光景に圧倒される。バカでかくて古くて窓ガラス割れまくり(笑)。

ベルリンのライヴはSOTATILAのツアーに同行してたイフィー(STATIC SHOCKというレコード屋を経営)に連絡をとって企画をお願いした。

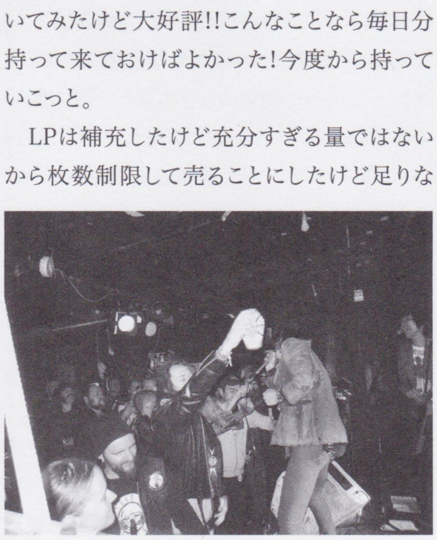
台所にいたもう一人の企画者アンドレに挨拶!ビールをいただく!荷物を運び、ステージ上のセッティングと物販用意。手慣れたもんである。ご飯をいただく、この日はマレーシア出身のパンクスが作ってくれた炒飯みたいなのがメイン。うまし。ご飯食べた後は中庭のベンチに座って犬と戯れたり、スクワット見学。

続々と人が集まりだす。HEARTFIRST RECORDSのフローもディストロと共に登場!昔からの友達との再会は嬉しいし落ち着く。

そして出ました!ゲオルグ(RUIDOSA INMUNDICIA,SOTATILA,SUICIDAS)登場!!イエーーイ!共に登場したのはマルメで会っちゃった前田さんとイフィー。そしてオーストリ



コペンハーゲンのアパートの中庭でくつろぐスキゾと JUNTA



SKIZOPHRENIA　コペンハーゲン

アからゲオルグと共に運転してきてくれたマーティン!

イフィーからレコードのプレゼントを何枚か受け取る。え?なんで?いいの?って思ってたら「リンダリンダのお返しだ」と。あー!そういえば日本でブルーハーツが気に入ったとかで、リンダリンダのepをあげたんだった!よく覚えてるなー!

そんなこんなでライヴ・スタート!

GLORIOUS?はDISASTERの曲名を名乗るだけはあるD-BEAT RAW PUNK BAND!この号が出てる頃にはADULT CRASHからのアルバムが出てるかな?要チェックです。

本日で見納めのJUNTAのライヴをしっかり目に焼き付けた後にSKIZOPHRENIAの出番。ライヴ終了後にヤコブが、「今日が一番クレイジーでベスト・ライヴだったぜ!ヨシヲのトラブルも含めてな(笑)!」。そういえばステージ上で横たわるパンクスともめてたけど、何回も邪魔されて怒り爆発したみたい。

スクワットでのライヴはいろんな人がいるという話は聞いていたけど、ここKOPIはまさにそんな印象。肌の色、世代、格好もいろんな人が入り乱れて各自楽しくやってる。アジア圏の人も多く、KOPIに2週間滞在しているというインドネシアの若いパンク・カップルや、台湾の子も話かけてきてくれて、カッコよかった!うちの国にもライヴしに来てよ、と。なら企画してよ。と連絡先を交換。こういう時SNSは役に立つ。

そういえばライヴ終了後、企画者のアンドレに出演バンドの代表が呼び出される。お金の話だ。何人の人がお金払って、何ユーロをPAを手伝ってくれた人に渡して、何ユーロを会場の経費にもらって、残りはこれだけ。これをどういう風に分ける?という話。

GLORIOUS?もマルメからフェリーで来ているということもあり、とりあえず3バンドで3等分する話にすぐ決定。こういうお金の話はすごく新鮮だった。

ちなみに今回のツアーでライヴをやった全箇所が会場代はタダでPAしてくれた人に手間賃。そして会場の維持費としてのお金をいくらか売り上げからもらう感じ。多額のお金を払って借りる日本のライヴハウス・システムとは違ったもの。もともと家賃がかからない(またはみんなで出し合ってる)からできることなのかなと思ったり。そもそも日本よりたくさんの人が出入りするのも大きな理由かなと。

さて、本日の寝床はKOPI内のベッド・ルーム。噂では汚いと聞いていたけど全然そんなことはない!これは快適に寝れるというのを確認し、KOPI内をウロウロし、いろんな人と乾杯した末に眠気と疲労と酔いでフラフラになりつつベッド・ルームへ向かい就寝!

■5月6日　チェコ

10時くらいに起床して荷物を積み込み移動!本日から僕らのツアー・サポートしてくれるゲオルグとマーティンも共に行動!ってことで2台で向かうはイフィーのレコード屋"STATIC SHOCK"。近くのカフェで各自朝ごはん。



ベルリンの STATIC SHOCK の前で JUNTA、イフィー、RUIDOSA INMUNDICIA ゲオ達と集合写真

イフィーもやって来て店オープン!!時間が許す限り漁る漁る!途中店の奥の部屋でJUNTAとのツアーのお金の清算。

支出を書いている紙を見ながら、ここでいくら使って、ガス代がいくら、ギグ・マネーがいくら、フェリー代がいくらで、バンを貸してくれた友達にいくらか渡して…、ってのをヤコブがユーロ通貨に換算しながら計算。あがったお金は全てSKIZOPHRENIAの飛行機代ってことだ。

「よし!SKIZOPHRENIA的にはこれで大丈夫?」「JUNTAが自腹きらないってのが唯一のリクエストだからそうでなければ問題なし!」

このツアー、JUNTAがいなけりゃ実現してなかった…。いや、どうにか実現はさせるつもりだったけど、JUNTAのフル・サポートがなければかなり過酷だったろうし大感謝。「SKIZOPHRENIAのためならなんでもするぜ!」って言って僕らのリクエストを毎回聞いてきてくれて、いろんなケアをしてくれ、毎日かっこいいステージで僕らのモチベーションをあげてくれて…。言葉にはできないほどの感謝。時間もないってことでお別れの挨拶も込めて、メンバー各自できる限りの感謝の気持ちを拙い英語力で伝える。

だらだら長くなるのも照れくさいのでなるべくスマートにお別れ!またね!!

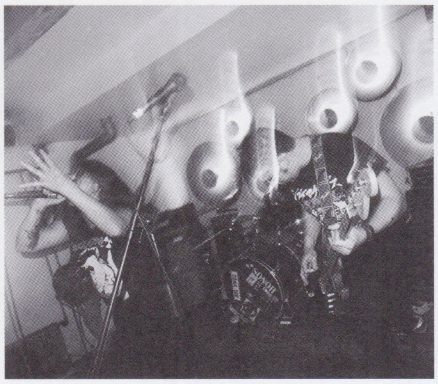
さて、ブルノに向けて出発だ!!マーティン運転よろしく!!!

ブルノまでは6時間くらい。ナビ通りに従ってたら途中で砂利道みたいな山道を20分くらい走る。結果この田舎の山道が一番景色がよくナイス・ハプニング!!

20時ごろブルノの街中に到着!!この時間はまだ明るかった北欧と比較して、遠くに来たことを実感する。大通り沿いにたくさんの人だかり!今夜の会場はバーだ!すでにオープンしてる!

RUIDOSAの他のメンバーと2週間ぶりの再会!!みんな手伝ってくれて器材と物販運びすぐ完了!!企画してくれたSEE YOU IN HELLのメンバーに挨拶したり、また通貨が違うので値段決めるのを手伝ってもらい、なにかとバタバタしてたら1番目のバンドが始まる。

重厚な感じのクラストとグラインドが混ざった感じの女性ヴォーカル・ハードコア。それを見ながら曲順決めたり、軽くご飯食べたりドタバタ。このバーでのビールはツアー・バンドは呑み放題!でかいジョッキに注がれたビールがメチャクチャうまい!!なにやらSEE YOU IN HELLのトーマスが作ってるビールみたいだ!これがうまくてハイペースでガンガン呑む。



RUIDOSA INMUNDICIA　ブルノ

続いてRUIDOSA INMUNDICIA!!うおー!ノンストップで畳みかけるハードコアが強烈にかっこよい!!途中、カロがMCで最近他界してしまったSEE YOU IN HELLのフィリップについて喋る。SKIZOPHRENIAが好きだと言って数年前からツアーに来ないか?と言ってくれてたフィリップ。前回のツアー時もチェコに行く相談はしていたけど、タイミングがよくなく断念した。今回のツアーの計画が出たときももちろんフィリップに相談、「もちろん大歓迎だ!!病院に通ってるから、もしなんかあった



ブルノ・パンクスとゲオと筆者とイソ

ら他のメンバーに連絡してくれ」と。で、他のメンバーに連絡をとることになってしまい、彼らがサポートしてくれてのこの日の企画。

なのでこの日はフィリップのためにも演奏。日本にいるたくさんの友達の想いも少しは込められたかな。ありがとうフィリップ。まだ先だろうけどSEE YOU IN HEAVENだ。

ライヴ後、SEE YOU IN HELLのメンバー達とワイワイ呑む。会話の半分くらいは"コマネチ!"、"アイーン!"だ(笑)。とあるパンクスに「LIFEのアベが呑んで撃沈したショットがあるけど呑むか?」とSLIVOVICAというお酒を奢ってもらう。各地でその国に行った日本のバンドの話をすることは多く、今回の場合、LIFE、CLOWN、D-CLONE、ZYANOSE、CONTRAST ATTITUDEの話はよく聞くし、そのバンド名が書かれたものを身に着けてる人も多い。あと寝床やライヴハウスで友達のバンドのステッカーが貼ってあるのはテンション上がるし、SKIZOPHRENIAのステッカーもその横に貼りたくなる(笑)。

陽気なブルノ・パンクスとしこたまビールを呑んだ後、本日の寝床であるウィーンのゲオ&カロ宅に向け夜のハイウェイを飛ばす!

車内ではこの日から合流したバルセロナから見に来てたエマニエルが翻訳アプリを駆使して機械が喋る下ネタが私たちの笑いを誘う!2時間ほどでゲオ宅について、もう少し呑もう!と近くのバーに行くも閉まっているからゲオの家で朝方まで呑み撃沈。

■5月7日　ウィーン

朝10時ごろカロが朝ごはんを作ってくれた!それをいただき昼過ぎまで家でゴロゴロ。ライヴまで時間があるので今日は観光だ!

近くにあるゲオルグの友達のマニのアパートの前でみんなと集合して観光地まで地下鉄で。オランダからライヴを見に来たというアレックスとも初めまして!彼は日本語が喋れるから自然と僕らの通訳に。

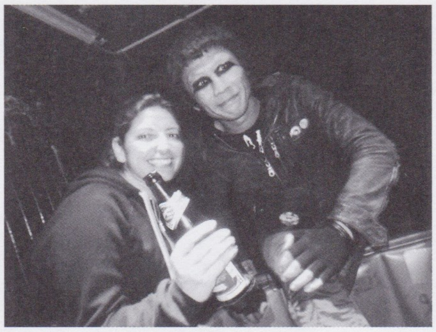
観光地を満喫した一行はその後にゲオルグの家の近所のビア・ガーデンで呑む!!こりゃいいや!

一旦ゲオの家に戻って少し休憩。20時ごろ会場へ。この日の会場はスクワット。



ウィーンの観光地にあったオブジェとヨシヲ

カロとヨシヲ　ウィーンにて



みんな大好きフットボールゲーム　ウィーンにて



スクワットでは元々どんな建物だったのかを妄想しつつ、ウロウロするのが楽しい。天井の形を見たりして、ホテルっぽいなーとか。にしてもそこからバー・カウンターを作ったり、ステージを組んだりして形になっているのは感心する。

このスクワットは溶接が得意な人物がいたのであろう。鉄を溶接してテーブルやら椅子やら階段を作ってて、バー・スペースはかなりの高さまで席があり遊び心がある。マイク・スタンドの土台部分もタイヤのホイール部分だった。この日の物販はカロやエマニエルがしてくれることに!ここはそのお言葉に甘える。夜も更けてきて、人もぞろぞろ集まりだし夜10時ごろライヴ・スタート!

1番目は運転してくれてたマーティンがギターを弾くバンドKETTENHUND!メンバー全員坊主だからかOi!要素も感じるミッド・テンポなパンク・ロック!

続いてRUIDOSA INMUNDICIA!地元でのライヴは年に数回しかしないらしい。それもあってか大盛り上がり!日本ツアー直後ということもありこれが"仕上がってる"っていうやつなのか!?とにかく地元ウィーンで見るルイドサは神がかってた!最高!!



RUIDOSA INMUNDICIA とスキゾ　ウィーンの会場にて

そして最後がSKIZOPHRENIA!この日が最後!!疲労感、喪失感なんかと共にとにかくぶちかますだけだ!!ライヴが始まった瞬間に大盛り上がりなんかないけど徐々に盛り上がり最後にはアンコールで終了!!という今回のツアーでよくあったパターン。

ライヴ終了後、ステージ横のボイラー室で倒れこむ…。復活後いろんな人と会話、土曜日ということもあるのかヨーロッパ各地から来てくれてる人が多かった。ありがたや。

集客もかなりよかったみたいでゲオもご満悦!!しこたま呑んだ後、午前3時ごろ撤収!!

運転するのは日本語を喋れるアレックス。「免許持ってない。運転したことない。でも呑んでないから大丈夫!」ってなもんでゲオの家まで送ってもらう。着いて速攻寝落ち。

■帰国

朝7時半に起きて、全員眠い目をこすりながらゲオに空港まで送ってもらう。

今回のツアー、いろんな人のサポートがあった中でもJUNTAとゲオのサポートは特に大きい。感謝の気持ちを伝えるも「お前も日本でサポートしてくれるだろ。それにパスポートとギターを届けてくれたお礼(ルイドサの初日本ツアーのとき、津山で盛り上がりすぎてライヴ会場にパスポートやらギターやらを忘れた珍ハプニング)だ(笑)」と。

勝手に楽しんでいただけで、ここまではしてないぞ!日本に来た時はサポートという名の元に一緒に楽しむしかないな。

20分ほどで空港に到着し、んじゃここでお別れだな。と、ゲオとのお別れもスマートに。名残惜しさなんて忘れるくらいの、ツアーが終わった瞬間に来るとんでもない疲労感と共に日本へ向けて飛び立つのでした。

そんなこんなでどうにか終わった今回のツアー。

パンクってやつは音楽ももちろんだし、思想的なものも大事だけど、パンクで広がり続けるNETWORK OF FRIENDSが自分にとってはなにより魅力だし財産だなと改めて思わされました。

ありがたいお誘いが各地からあるので、SKIZOPHRENIAのやり方で実現させて行きたいなと。

あ、結果的にどうにかなったけど、もしJUNTAがいなくて電車移動だったら相当きつかったと思うので、今回のやり方はオススメしません(笑)。





MILES DE EMIGRANTES MUERTOS　幾千の移民の生

Vol.19に掲載したMASACRE 68と同様に、メキシカン・ハードコアを語る上で避けて通ることのできない最重要バンド、SOLUCION MORTAL。そのヴォーカリストであるJorge　Lezberのインタヴューを毎度お馴染みNY在住のメキシカン・パンクス:Luisがとってきてくれました!

とうの昔に解散しているもんだと思っていましたがナントSOLUCION　MORTAL、現役続行中ですって!近年の音源はやはり"現代っぽい音"になってしまっているのですが、80年代初期のロウ・スラッシュ・パンクは色褪せることのない不変の格好良さで、今聴いても奮えるのです!

しかし2016年になってSOLUCION　MORTALのインタヴューが掲載されるなんて、一体誰が予想したでしょうか?!そんな激レア・インタヴュー、どうぞご堪能くださいませ!

INTERVIEWED:Luis

■SOLUCION MORTALの始まりについて聞かせてもらえる?

「このプロジェクトは、若者たちの、その絶望にまみれた日々から生まれ出たのさ。自然と誰かが思いついたんだ。メキシコじゃ今尚、社会情勢は当時のままだろ。人権は踏みにじられ、娯楽も文化も、そして発展もここにはない。

あの頃、俺たちは打ち捨てられた家のプールでスケボーをやってはしょっちゅう追い出されていた。ストリートや公園からもな。政府はこの手のサブカルチャーに見向きもしない。だから俺と俺の兄弟(ドラム)、友人の3人でバンドを組んだんだ。それから俺たちはRemen(今でもバンドにいるぜ)をベースとして誘った。多くの若者たちは時に、自己の葛藤の解決策として死を思い浮かべることがある。それをバンド名にしたいと俺たちは考えていたんだ。それに、システムへ流し込む毒液も思い浮かべていたな。こうして"SOLUCION MORTAL"は生まれたのさ。反逆の叫び声を歌にしてね」

■初めてのデモを録音したのはいつのこと?

「1982年だな。ショーを録音したんだ。今でも覚えているのが、そのショーには女の子とその父親が来ていた。その親子はパンクの格好をした奴らがたくさんいるもんだから怯えていたな。俺たちにしてみれば、過激な反抗心を表していただけだったんだが」

■歌詞を通して言いたいことは何?

「各人が抱える実生活の問題、警察の腐敗、動物へのリスペクト、人権の尊重、有害な体験、気を滅入らす何か、現実、戦争、アメリカ人による侵略とそれがもたらす社会と環境への影響」

■SOLUCION MORTALの初めてのショーはいつ、誰と一緒にやったのかな?

「俺たちの初めてのショーは、15歳の誕生日





パーティーでだったな。ティファナ中からたくさんの人たちが駆けつけていたよ。だが、俺たちの名がよく知られるようになったのは、アメリカのロサンゼルスで1984年にやったショーからだな。YOUTH BRIGADE、CHEETAH CHROME MOTHERFUCKERS(イタリア)、RIISTETYT、それに名前を思い出せないが、ドイツやベルギーからのバンドとも共演したんだ。あとはDEAD KENNEDYSともやったぜ。後日、俺たちはティファナに彼らを招待して演奏してもらった。素晴らしいショーだったな」

■アメリカでショーをするために、違法入国をしたことはある?

「あぁ、あるよ。一度ベーシストが違法入国しようとして捕まったこともある」

■ティファナのパンク・シーンはどうやって始まったの?

「俺たちと、それにパンクのカヴァーをしていたLOS NEGATIVOSというバンドが先駆者だったと考えている。当時、俺たちは闘牛や抑圧、警察の横暴などに抗議していたんだ」

■国境沿いの都市での暮らしはどう?

「音楽的に言えば、常にアップロードされているよ。ティファナはロサンゼルスやサンディエゴにすごく近いからな。知っての通り、カリフォルニアはアメリカの中でも有数の州だ。そしてティファナは多文化的な都市でもある。俺たちは今のメキシコが抱えている問題点を理解しているし、理解することによって、メキシコは文化大国へと成り得るんだよ」

■アメリカへと移住していった友人はいる?

「あぁ、ティファナやグアダラハラの多くの友人たちや、メキシコ・シティの数多くの人たちが移住していっているね」

■"Thousands of dead immigrants"という曲について聞かせてもらえる?

「そうだな、どうしてメキシコで暮らす人々が、自分や家族のために、より良い機会を得るべく自分たちの国から去らなきゃいけないのか、それを説明しているんだ。そして、国境を越えるためには先の見えない危険にさらされることになる。メキシコは豊かな自然と文化的資源を有している国なのに、それが横暴な政府によって踏みにじられる様は見るに堪えないよ」

■レコードのアートワークは誰がやっていたのかな?

「メンバー全員が関わっている。今は在籍していないが、ギタリストだったMemo Jaureguiはすごく尽力してくれていた。あいつは良い画家だったし、たくさんのアイデアを出してくれたな。現在はベーシストのRemenが協力してくれているし、最近ギターを弾いてくれているRaulは良い絵を描く奴なんだ」

■デモ音源のあとには、他にはどんな音源を録ったの?

「レコーディングしたのは3回だな。「Live in San Diego and Los Angeles」に、それから「Al Filo Del Abismo」。でもこの作品に俺は関わっていないんだ。個人的な問題があって、しばらくバンドから離れていた時期があってね。いくつか歌詞は書いたんだけどさ(普段は俺がほとんどの歌詞を書いているよ)。その後、俺たちは「En Peligro De Extincion」を録音した。EL TRI(メキシコのメジャーなロック・バンド)のレコーディングを担当したのと同じ奴らがやってくれたんだが、なんてレコード・レーベルだったか忘れちまったな。それから、ブラック・ヴィニールをBamBam Recordsからリリース。今は同レーベルからリリース予定の新作に取り掛かっているところさ。他にも俺たちの曲を収録したレコードが、世界中でたくさんリリースされているぜ」



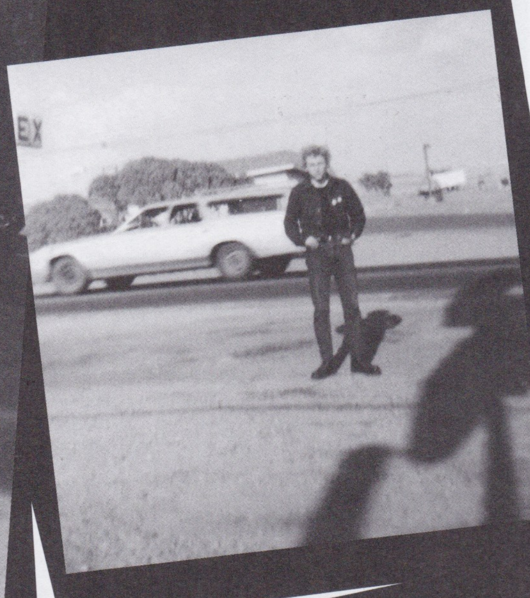
■ティファナにはショーをするための場所はたくさんあるのかな?

「あぁ、たくさんあるよ。シーンは再び盛り上がりを見せている。過去にはドラッグの密売問題が山積みだったけど、俺たちが対処してきたからな。ティファナはあらゆる面で監視されてきた。数え切れないほどの死があったんだ。だからこそ、俺は犯罪学の勉強をすることに決めたんだ」

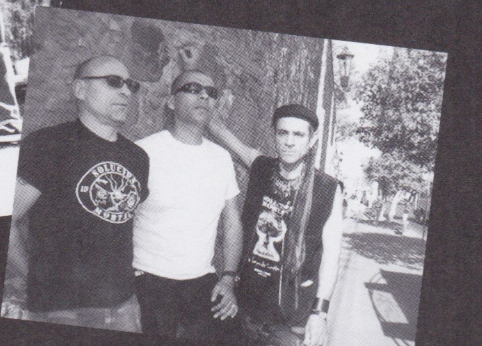
■メキシコのパンク・シーンはどう変化してきたのかな?

「パンクは俺たちと共に成熟してきた。みんな









自分たちがどう行動すべきかを考えているし、もっと社会に協力するようになった。社会と関わるようになったんだ。これはとても大切なことだ。昔はやっかいな変わり者だったが、今はそうじゃないんだよ」

■2016年現在、バンドとしてはどんな計画があるの?

「俺たちは未だやり続けている。今年はそれほどじゃなくて、3回しかやっていないけどな。俺は学校で忙しいし、それにメヒカリに引っ越したんだ。でも先週末にはティファナで演奏して、近いうちにメキシコ・シティ、ケレタロ、グアダラハラ、モンテレイでも演奏する予定がある。アメリカだとオークランド、サンディエゴなどでやるつもりさ」

■80年代当時は、どんなバンドと共演するのが好きだった?

「BROKEN BONES、CHAOS UK、THE ADICTS(彼らとは何度も共演したね)、VARUKERS(イギリスのパンク・バンドの象徴的存在)、アメリカならBLACK FLAG、DEAD KENNEDYS、それにもっと色々といたけど、思い出せないな」

■メキシコの新しいパンク・バンドのことをどう見ている?

「本当にいいね。俺たちが得てきたことを彼らは利用すべきだね。メタルとハードコア、それにトラッシュやグラインドコアのショーと入り交じったりさ」

■現在だとどんなバンドと対バンしたい?

「選り好みはしていないよ。彼らの活動に嘘偽りがなければいいんだ。そう、ESPECIMEN(※メキシコでは有名なパンク・バンドっぽいです)のBenny Rottenみたいに、嘘まみれじゃなければいいのさ。あいつはニューヨークのバンドの名前を使ったり、おまけにニックネームすらもオリジナルじゃない(俺たち全員、あいつが誰からニックネームを拝借したかを知っているぜ)。それに俺はあいつのことをよく知っているんだ。なにせあいつはSOLUCION MORTALをクビになった男だからな。あいつは誠実じゃなかった。そして、俺たちと一緒にやっていたことをこれまで口外していなかったんだ。だけど今じゃSOLUCION MORTALの曲を俺は書いていたなんて言っていやがる、クソ野郎が。ハハハ」

■メンバーは他のバンドでも活動しているのかな?

「俺の兄弟のAlan Lezama(ドラマー)はVERBAL DESECRATIONと、あともう一つ名前は思い出せないがスカコア・バンドでもプレイしている。Raul Ochoa(ギタリスト)はティファナのメタル・バンド、PUERCOSでも活動していて、アメリカとメキシコ中央部をツアーしたね」

■SOLUCION MORTALに関する逸話は何かある?

「俺はいつも"Depresion"という曲を父に捧げているんだ。彼はあの曲が大好きだった。父が死に瀕していたとき、俺が訪れると、彼はあの曲を聴いていたんだよ。騒々しくて喧しくないかと訊ねると、彼はこういった。"お前らが家で練習しては散々騒いでいたから、もう慣れちまったよ"ってね。その瞬間に、俺は父を本当に理解することができたんだ」

■日本のみんなに伝えたいことはある?

「日本で演奏しないかと誘われたことがあって、俺たちは行くつもりだったんだよ。だけどギタリストのメンバー・チェンジがあって、計画は頓挫してしまった。前任のギタリストに日本との連絡を全て任せていたせいでね」





dios hastio

Vol.17でも寄稿してくれたペルー出身のNYパンクス:Rabiosoによる、彼の母国ペルーのハードコア・バンド:dios hastioへのインタヴューです。日本のTHE FUTURESとのスプリットや膨大な数のリリース、そして南米らしいガッツ溢れるハイテンションなクラスティー・サウンドで、今でも"ペルーと言ったらdios hastio!"って人も多いかなと思います。インタヴューに応じてくれたのはヴォーカルのJose Moron、ギターのOscar Reategui、ドラムのOADM。

INTERVIEWED:Rabioso

■最初に、dios hastioがいつ始まったのか教えてもらえるかな?いつ、どうしてこういったスタイルのパンクをやろうと思ったんだい?他にもバンドはやっていたの?

Jose M「俺がこのバンド名を思いついたんだ。dios hastioは俺が他の奴らと過去にやっていたプロジェクトだったんだが、何回か練習をしただけで終わっちまった…。そのすぐあとに、俺はOscar Rとバンドを結成し、このdios hastioという名前を使い続けることにした。OADMもすぐに加入してね、それが95年頃の話しさ。バンドは常にこの3人を基調として、あとは他のメンバーが出たり入ったりという感じ。俺は以前、ATROFIA CEREBRALやMATERIA ORGÁNICA、DICTADURA DE CONCIENCIAでプレイしていた。OADMはSUBVERTOR、SUPLICIUM、それにHADEZなんてバンドをやっていたな」

Oscar R「俺はのちにdios hastioのベースとなるEduardo Novaと一緒に、MIERDAってバンドをやろうとしていたんだ。91年のことだ。だけどそれはうまくいかなかった。そんなときに、Jose Mがdios hastioのアイデアを俺に持ち掛けてきたんだ。それで俺が抱いていたMIERDAのアイデアとdios hastioが融合していったのさ。

92年になると、俺はNADA TUYOというバンドでもプレイをし始めた。そのバンドは、DOOMやEXTREME NOISE TERRORといったエクストリームなハードコアから影響を受けていたな。その後、より実験的でエレクトリックなグラインド・ノイズ・バンドT.S.Mでも演奏するようになった。

それとは別に、Jose Mがやっていたノイズ・バンドATROFIA CEREBRALのレコーディングに参加しないかとあいつには誘われていたんだ。89年頃だったかな。ATROFIA CEREBRALには『Nada Importa Ya』という作品があるんだが、色んなヴァージョンをレコーディングしてね。最終的にそれは6thデモとなったんだ。それから『Sabemos Que Esto Es Una Porquería ..¿¡Y Tú?』をレコーディングしたんだが、その後、ATROFIA CEREBRALのバンドとしての活動は散発的なものになってしまう。ただ、実のところATROFIA CEREBRALは数ヶ月前から前線復帰しているんだよ。リリースがいくつかあるからね。もう一つDESCARGA NOCIVAというノイズ・バンドもやっていたんだけど、それはグラインド・コアへと発展していって、その後のdios hastioのルーツの一部になったんだ。91年頃だったんじゃないかな、そうだろJose?そうそう、"dios hastio"って書いてくれよ、"DIOS HASTIO"じゃなくてね。

で、続けると、MATERIA ORGÁNICAがMATERIAと名乗りだした頃に、デモをレコーディングしようとしたんだ。そのスタジオはHADEZというバンドが所有していて、そのHADEZでドラムを叩いていたOADMをJose Mと俺とで引き抜いたってわけだ。こうしてdios hastioは結成されたんだよ」

■dios hastioは沢山の音源をリリースしているし、だからこそ世界中でその名が知れ

渡っていると思うんだ。スプリットやアルバムも、外国からリリースしているよね。国内外のレーベルから、どうやってアルバムをリリースしているの?日本からもアルバムを出しているよね?ディスコグラフィーは膨大だろうけど、これまでにどれだけの音源をリリースしているのかな?

Jose M「このバンドは当初からレコーディングとリリースを目的としていた。そもそも、"リリースをしないバンドは、存在していないのも同然"って考えがあったからさ。だから初期からレコーディングしようと精力的に自分たちで動いていた。最初に手っ取り早くテープを出して、それからCD。ヴィニールは外国(日本、アメリカ、フランス)からリリースした。何せここじゃヴィニールをリリースする手立てがないからね。大量のリリースがあるのは事実だけど、20年もやっていれば、多すぎるってほどの量じゃないと俺は思うけどな。リリースのリストがこれだ。



カセット:

Raza de Gusanos 1996年
No hay nada que esperar 1997年
Split with WOJCZECH 1998年
Ascenso del Error 1998年
A medio camino de Ür 2001年
Split with ZAHERIR 2013年

CD:

Advenimiento de lo Inevitable 1996-1999 2000年
Cervix Inferno 2003年
Split with AGATHOCLES 2005年
Split with AGATHOCLES/THE GAJNA 2009年
Advenimiento de lo Inevitable 1999-2014 2014年

7"EP:

ST 1999年
Split with AUTONOMIA 2000年
Split with THE FUTURES 2001年
Split with SEPTICEMIA 2002年
Morfología Del Desastre 2003年
Kerosene 2006年
Split with COCHE BOMBA 2009年
Fragmentario 2014年

LPコンピレーション:

Animal Liberation 1999年
Chaos of Destruction II 2000年

























South America in Decline　2000年

CDコンピレーション：
Youth Against Police Violence　1998年
Yo los Descubrí　2001年
Fugarte Rebelde　2003年

Oscar R「もし俺たちが好きなだけレコーディングできるのなら、アルバムを50枚は出しているはずだぜ。実際、初期の頃は経済的な困難もあったから、レコーディング作業も無駄がないようテキパキと必死になってやっていたよ、『Advenimiento de lo Inevitable』CDを出した99年まではね。あの年に当時のドラムのTotoが抜けて外国へ行ってしまったんだ。おかげでCD製作の作業が停滞してしまったんだが、OADMが戻ってきてくれてからは曲が本当にたくさんできたよ。『Morfologia Del Desastre』や『Cervix Inferno』に収録されている曲だね。
このバンドに関する困難と言えば、大抵はやはり経済的なことさ。それにレコーディング技術の問題もあった。俺たちが使っていたスタジオは、そのスタジオのオーナーのバンド、HADEZが自身のCD『Even if you die a thousand times』を出したのを機に、デジタル・レコーディングに切り替えてしまったんだ。
あと、2005年まではレコーディングを定期的に行っていたし、すぐにリリースもしていた。COCHE BOMBAやAGATHOCLESとのスプリット、『Cervix Inferno』CD、他のバンドとのスプリットやアルバムにしてもね。2006年に、ドラマーが再び旅に出てしまうことになったので、その前に新たなレコーディングを開始した。だけど俺たちが作った曲は、どれも過去の曲に似ていてね、本当のdios hastioが持つスタイルができるコンディションには程遠かったんだよ。
その後にOADMのお別れコンサートをやって、新たなドラマーを探し始めた。だけどレコーディングした楽曲のクオリティの低さに俺たち自身ガッカリしちまってさ、ほぼ10年間くらい音源のリリースのペースが遅くなったんだ。でも今は、2005～2006年頃のレコーディングの調子が戻ってきているね。20曲くらいたまっているから、もうすぐリリースすることができると思う。その中の何曲かは、2014年にリリースした『Fragmentario』に収録されているよ。
どちらにせよ、前述した通りドラマーがすぐ旅に出てしまうから、バンドは度々止まらざるを得ないんだ。最初はまだ問題なかったけど、2度目のときはバンドがほぼ死にかけたよ。…"Ya no hay nada nuevo que decir y esperan mil oidos alla afuera"(There isn't nothing new to say and there's a thousand ears waiting outside)という曲があるんだけど、これはバンドを結成するのは簡単だってことを歌っている。どのアルバムでも、デーモンとか裸のサタン、キリストとファックすることを繰り返し歌っていればいいんだからさ。まぁ、それってダサいけどね。
現実とは何かとお説教したり、アナーキーだの共産主義だの右翼がどうのこうのなんて、俺にとってはどうでもいいのさ。何を感じ、考えているのか、それこそが俺たちの人生であり、そこに変化が生じるんだ。昨日、俺は今までに出会ったことがないタイプの人間に会った。彼は「お前がOscar Reateguiだな。dios hastioは俺のお気に入りのバンドなんだ」と話しかけてきた。そして"Disfixia"や "Extremo Evidente","Ataque de los Cuasares"といった曲についても話し出すと「dios hastioにはニーチェイズムがある」と続けた。俺には分からない。だけど彼には俺たちがそう見えているんだろうよ」

■俺が98年に地元のピウラ(ペルー北西部)でdios hastioを見たときはメチャクチャ驚いたね。その音楽のエナジーと演奏のパワー、それにもう一つクールだなと思ったのは、ペルーの北西部で演奏してくれたってことさ。だって、誰もあそこには来たがらないからね。ペルー国内をツアーしたり旅して廻るのは簡単?それとも大変?他にどんな場所でプレイしたことがある?何かエピソードは?

OADM「ピウラは俺たちが初めてリマから出て演奏した場所だから、たくさんの思い出があるな。当時、ベースはEduardo Novaだったんだけど、ピウラの後にはトルヒーリョやチクラーヨ、アヤクーチョという都市を廻ってチリとの国境近くのタクナまで行ったんだった。他に訪れたことのある都市はカハマルカ、アレキパ、イカ、イロだね。地元のバンドと共演するのはいつだって楽しいし、良い時間を過ごしているよ」
Oscar R「そうだね、おかげで俺たちはペルー国内の色んな都市を知ることができた。俺たちを呼んで企画してくれた奴らには感謝しているよ。本当に素晴らしいツアーだった。アヤクーチョの3人組のバンドがベストだったかな、あいつら2時間半も演奏してくれたんだ。それにペルーのバンドや、NIRVANAなんかのカヴァーをするインチキ・ハードコア・バンドもいたね。俺たちがステージに乗り込んだら、ビビッてガールフレンドたちと一緒に逃げ出して、ステージには楽器だけが残されたってこともあった。あいつらともグレートな時間を過ごせたよ。くたばれインチキ・ハードコア野郎!トルヒーリョでも似たようなことが起こったな。ツアー中に誠実だったバンドは、俺たちの友達でもあるグラインド・コア・バンドのAUDIO TRAUMAだけだったよ(トルヒーリョのバンドでNAPALM DEATHみたいなスタイルだよ)」

■今年、初となるアメリカ・ツアーを予定しているけど、このツアーがどんな具合になりそうか聞かせてよ。期間はどれくらい?アメリカの移民政策についてはどう考えているのかな?

Oscar R「アメリカはファシスト国家さ。訪れて楽しい国ではないね。ペルーで日々起こっている数多くの闘争の事実を伝えるためだけに、俺たちは行くのさ」
OADM「アメリカに入国する許可を得るだけでも非常に困難だからね。多くの時間と金がかかるんだ。俺たちはまだ、必要書類をかき集めている段階だしね。こうしたクソみたいなことをやったところで、結局は大使館の事務官が許可をくだすか否かにかかっている。事務官を納得させられればみんなハッピー、ダメだったら忌々しいプロセスを再び踏んで金も再び取られるってわけさ。ツアーの最初は、NYCで開催されるラティーノ・パンク・バンドのフェスに参加する予定だよ。それからチャンスがあれば東海岸ツアーもしたいんだけどね」

■日本のパンクスに伝えたい言葉はある?

Oscar R「日本は重要な国だね!ありとあらゆるシーンにおいて、オリジナルなバンドがいる。その全てを聴けているわけじゃないけど、中でも俺が大好きなのはSYSTEMATIC DEATH、GAUZE、OUTO、BATTLE OF DISARM、DISCLOSEだよ!!!!もっともっといるけどね!!!来年にでも日本に行って、俺たちが叫んでいる様をみんなに見てもらいたいよ!!Cheers and Resistance!!!」
Jose M「そうだな、俺たちには日本の友達との最高の思い出があるんだ。俺たちの最初のEPは日本のPeace Punk Recordsからリリースされたし、THE FUTURESとのスプリットEPはAnswer Recordsが出してくれた。新曲をみんなが気に入って、バンドをサポートしてくれたらいいね。どうもありがとう!」



OVERTHROW RECORDS

某日。20代のヤング・パンクスとお話しをしていた際に、なんの拍子かでOverthrow Recordsの話題になったのですが、彼は「Overthrow?知らないです」と…。鳴呼、これが所謂ジェネレーション・ギャップか、と僕は大層驚いたわけです。が、このままでいいワケがない。我らがOverthrow Recordsを微力ながらも世にアッピールせねば!という謎の使命感に駆られた僕は、主宰者である森下氏に俄然、取材を申し込んだ次第であります。氏の音楽的嗜好の変化から、リリースの裏側、そして今後の展望まで、ジックリと話しを伺ってきました。

[6月8日　高円寺　味楽]

■ここ最近、ずっとポスト・パンクにのめり込んでいますが、キッカケはやはりJOY DIVISIONですか?

「そうだけど、それは古い話しな。DOLLが終わるちょっと前に連載もらってたじゃない?で、連載を一回休んでJOY DIVISIONについて書いたけど、あれが2008年か。ちょうど『Control』とか『Joy Division』って映画が公開されていて、それでJOY DIVISIONのコレクターズ・エディションみたいな再発盤も出てさ。JOY DIVISIONは元々、好きは好きだったんだけど、普段はハードコアばかり聴いてたから、たまに聴くものというか、メインではなかったんだよね。ただ、聴き直すキッカケがそこで生まれて。あのバンドは『Unknown Pleasures』と『Closer』の2枚しかオリジナル盤を出してないけど、『Still』とか、イアン・カーティスが亡くなってからリリースされたものもようやく聴いて"あぁ、すごいな"と。再発見だったんだよね。年月が経ってから聴いて、よりよく聴こえたというか」

■若い頃とはまた違う。

「そうだね。聴こえる拡がりがね」

■そこからポスト・パンクに一直線?

「いや、そういう訳でもないんだよ。でも当時、2008年の辺りだと、ポートランドのLEBENDEN TOTENのKeithがいるTHE ESTRANGEDは、もう演ってたと思うんだよね。存在は知っていたけど、自分がイイと思って聴けるバンドかどうかも分からなくて。でも、EPやアルバムを聴いたら"これはイイな"と。言わばTHE ESTRANGEDはそのシーンにおけるポスト・パンク・リヴァイヴァルの先駆けだったんじゃないのかな。ハードコアをやっているバンドのメンバーがサイドでポスト・パンクを演るという、世界的な流れのね。それと同時に、Frank(LEBENDEN TOTEN)のレーベル、Whisper In Darknessから出ていたSPECTRESってバンドも、Frankがリリースしたからってすぐに買ったんだけど、最初は全然解からなくてね。でも今になって聴くとすごくカッコイイよね。最近も3rd LPをリリースしたし」

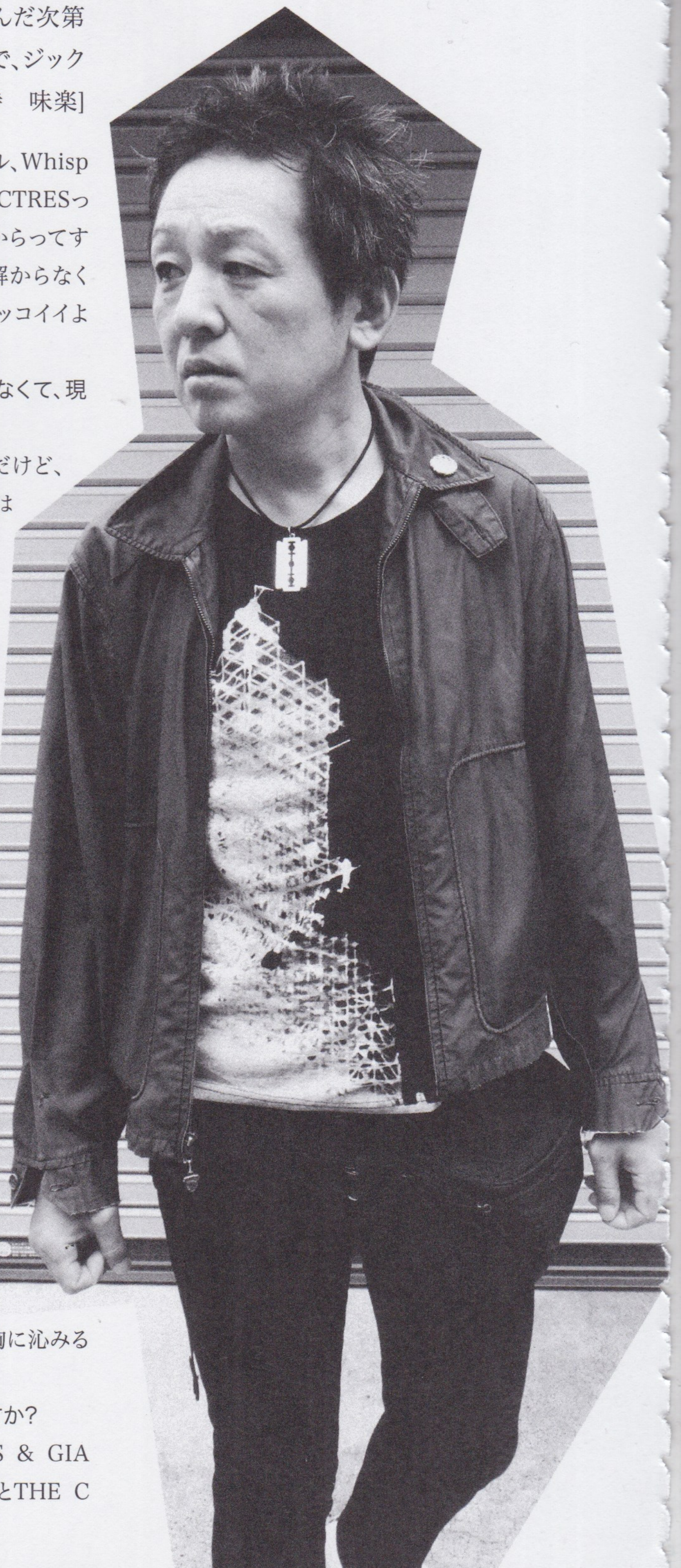
■古いポスト・パンクに行くんじゃなくて、現行のバンドに行ったわけですか?

「今は同時進行になったと思うんだけど、現行にすんなり移行できるほどには勉強してなくて…。JOY DIVISIONは全世界的に無数と言っていい程のフォロワーを生んだじゃない?そのフォロワーまで聴いてみようという気にはまだならなくて。けど80年代後半まで活動していたTHE SOUNDってバンドを聴いて、"この音いいな!!"って。モロにJOY DIVISIONの影があるってわけじゃないけど、そこからかな、どんどん広がっていったのは。THE SOUNDはポスト・パンクとも括られたりもするけど一般的にネオ・サイケって呼ばれるジャンルのバンドで。サイケっていうと、俺なんかには今でもよく解からない難しいロックって感じがするけど、ネオ・サイケはそうじゃなくて、メロディの押しが強くて。ギターのアルペジオで、ジワジワと胸に沁みるトコがいいんだよね」

■例えばどんなバンドがいるんですか?

「昔のバンドだけど、SAD LOVERS & GIANTSやSNAKE CORPSとかね。あとTHE CHAMELEONSにPARTY DAY、THE WAKEにTHE NAMESとか。あと本来はダーク/コールド・ウェイヴって呼ばれてるのが一番好き。昔のだとベルギーのSIGLO XXとかポーランドのSIEKIERAの後期とか。現行だとLEDER ESTだろ、LEBANON HANOVER、トルコのSHE PAST AWAY、スペインのANTIGUO REGIMEN、イタリーの(現在はベルリン拠点)SOVIET SOVIET、ロシアのMOTORAMA。歌姫系だとVOID VISION、TROPIC OF CANCERにSALLY DIGE、MUSHY…って挙げてくともうキリがないな(笑)」

■そういう音楽的嗜好の変化が、Overthrowのリリースにも影響を。



「とは関係なく、それまでハードコア・パンク・オンリーで来たわけだけど、2008〜2010年辺りって、本当にレーベルを辞めたいと思っていて。気持ち的に病んでたんだね。(個人の就く)仕事的にも重責のあるポストに就いてて、レーベルのことも同時に考えてなきゃいけなくて、かなりしんどかった。世間的には、今よりももっと自分のリリースが売れていた時期だったけど。一時、俺が元気なかったときあったじゃん?」

■あぁ、落ち込んでて扱いづらかったです。

「2011年になって、会社にその役職から降ろしてもらって。陰では出世コースを自ら降りるなんて馬鹿じゃねえの?!って言われてたらしいけど、そんなの興味ないから。で、悩みが一度、リセットされて。あの時見上げた空の青さは生涯忘れないよ(笑)。その辺りから、音楽を聴くことに前向きになってきて」

■2011年ってDESPERDICIOとか、FEROCIOUS X feat GUILTY.CやHAAVAをリリースしていた頃?

「そうだね、その3枚をリリースした年。けどもそれをリリースした後に、今度はそれが何なのか解らないけど、何か"自分のレーベルの役割"というものを果たし終えた様な気になって。それで"いつをもって辞めよう"とかじゃなくて、その後は何もリリースせずに(レーベルが)自然消滅でもいいのかなと思い始めてたというか」

■その2年後で久々のリリースがTHE C-3'S。

「うん。2012年の秋に実家がある豊橋にフラッと帰省して、そのときに時間があったから四日市のVORTEXまで足を伸ばして。バンちゃんがTHE C-3'Sってバンドを演ってて、初めてのDEMOを出していたのは知っていたから、お店で買おうと思っててさ。それで聴いたらすごくカッコ良くてビックリして。"よくここまで緻密ってか、自分たちをどう観せたいか、聴かせたいかのイメージを作れるな"と。しかも全員、ルックスは可愛いいしカッコイイし。彼女たちにしてみればまだ、それでさえ音が目指してたのには粗かったのかもしれないけど、なんでこんなすごいキレ味を出せるのかと思って。それで、ひと月くらい経ってからVORTEXに電話して、その時はアリサちゃんが出て、"すごいよかったよ!!"って話しをして。俺はてっきりそのDEMOが既に評判になってて、とっくにどこかのレーベルから声がかかっていると思っていたんだけど、彼女に聞いたらそんな話しはないって言うから、"できればリリースしたいな"って。で、後日バンちゃんからOKもらって、メチャクチャ嬉しかったね。残念ながらTHE C-3'Sは解散しちゃったものの、その後のTHE RUSTEDも彼女らと共に、この終わりかけてたOverthrowに新たな生命、息吹を与えてくれたというのが、本当にあると思う」

■THE RUSTEDは最初のデモCDRを聴いて?

「いや、それは入手できなくて、津山のコンピ(『Get Back Our Future』)で聴いて、格好良いなと思って。話が前後しちゃうけど、実はMASSHYSTERIとかTHE VICIOUSとか、名前は知っていたけど、全然聴いていなかったんだよね。随分経ってからMASSHYSTERIを聴いて本当にビックリしてさ」

■以前に、"DOLLの最終号の表紙ってMASSHYSTERIだったんだな"って言ってましたもんね。

「あの頃はなんとも思ってなかったんだよ。TRAGEDYのYannickのFeral Wardみたいないいレーベルからリリースしてたのにスルーしちゃってて。何っての…野球とかで球が放られてくるじゃん。でその球をバットの芯で捉えるとすんごいあの硬球でさえ、球が凹んだのが手に伝わるよな。で、すんごい飛ぶじゃん。あんな感じにMASSHYSTERIが入ってきてね。で、THE RUSTEDに戻ると、MASSHYSTERIの前身たるTHE VICIOUSのフォロワー的な感じなんだけど、人によってはウチからの最新作を聴くとよりMASSHYSTERIに近づいていると思う人もいるかもしれないけどね。で、彼らをリリースしたいと思ってたんだけど、メンバーのことを知らなかったから、タマキ(SKIZOPHRENIA)に電話したの。"あのバンドって近々リリースあるのかな?"って。そしたら"近くCDが出ます"と。で、そのCDを買って聴いたらまたコレが最高でさ。タマキが(Overthrowがリリースしたがっていることを)バンドに話してくれて。そしたら、メンバーは次の日にはOverthrowのDiscogsを見て、"このカタログにうちらも載るのか"って言ってたみたいで(笑)」

■ノリノリですね(笑)。

「本当かよ!!って嬉しかったよな。それで直接タツキ(THE RUSTED)に連絡して、したらすぐOKで。更に嬉しかったね。だからタマキにもバンドにも本当に感謝だね」

■THE RUSTEDのあとにはDESPERDICIOの7インチが。

「タハハハ(苦笑)…さすがにこの号が出ている頃には、リリースできてると思うんだけど。盤はすでにできあがってて、ドラムのヤッピーが作っているジャケットが遅れてて。頼むぜヤッピーってな(笑)。でも、日本で唯一のゆるキャラ・スパニッシュD-Beatって感じで、それがいいんだよな。ヴォーカルのパパンなんて、カットオフしたGジャンにパッチをやったらベタベタ貼りまくって、どう見てもメタルヘッドなのに、それであの音が出てくるというあのトンチンカンさがいいんだよね(爆笑)。そんなDESPERDICIOが本当好きだからさ。彼(パパン)は、数少ない俺とタメ歳のひとりで、ライヴだと派手に飛んだり跳ねたりしているけど、自分自身をいたわってんのかな(笑)。無茶な飛びをしないで、ちゃんと着地を考えているのが(笑)」

■(笑)。レーベル・ロゴもTHE C-3'Sのリリースから変えましたよね。

「うん。一新したいという気持ちがあって、あれを描いてくれたのが、スペインでFIRMEZA 10とかOTANとかを演ってるTeodoroが描いてくれて。"COLD WAVYなロゴにしてほしい"と言ったら描いてくれて、メチャクチャ気に入っているけどね」

■で、この間はNEW ORDERのライヴに飯嶋さん(RECORD SHOP BASE)と一緒に行ったんですよね。

「飯嶋君が頑張ってチケット押さえてくれてさ。矢沢の武道館は彼とよく行ったしな(笑)。JOY DIVISIONとNEW ORDERは切っても切れない関係にあるけど、以前はNEW ORDERを一生懸命聴こうというのがなくて。JOY DIVISIONのコレクターズ・エディションがリリースされたのと同じくらいだったかな?NEW ORDERのそれも出たから全部買ってみたら、JOY DIVISIONとは違うけど、ハートをギュッと鷲掴みにされるような感じがあって。曲調もどっかフォーキーだったり、イタロティークだったり、バブリーに(笑)ユーロビートにハイエナジー調だったりとバラエティに富んでて面白くて、俄然のめり込んでいって」

■ライヴはよかったですか?

「すんげえよかったね〜。結局、言われるところのお約束は例えたくさん盛り込まれてても…。俺の大好きな"1963"とかも演ってくれて」

■あと、LUST FOR YOUTH(デンマーク)のライヴにも行ったんでしょ?

「いや、それがな〜…行ってないんだわ。まるっきり失念してた…(苦笑)。招聘してたのが原宿のrecord shop Big Loveさんで、前売りを買おうと思っていたんだけど、それを買ってねえから。(来日公演があった)4月末はTHE RUSTEDのリリースでてんやわんやで、すっかり忘れちゃってて。気がついたのはライヴ終わった2日後でさ…観たかったよな〜。また来て欲しいよな〜LUST FOR YOUTH…。仲さん、マルくんごめんね」

■けどLUST FOR YOUTHってPosh Isolationの主宰者がメンバーだったりで。ICEAGEとかの周辺でもあるんですね。

「ICEAGEは観に行ったね、去年暮にな。すげ

えビシッと演ってたって感じだった」

■ICEAGEのお客さんって、やっぱり若くてオシャレな感じなんですか?

「うん。ってか年齢層は判らんけど、俺なんかが普通に行ってたライヴの客層とはやっぱり違うよね。知らない人達ばっかりだったけど。とは言えそこで拒絶したりはないよ。誰だって最初は真っ赤な他人様だからな。どこかで邂逅するかも知れないしな」

■でも、パンクやハードコアを一切聴かなくなったわけじゃないですよね。

「もちろん。ラティーノ系とかはさ、気になるバンドも多いし。もうすぐ来るGENERACION SUICIDAにTOZCOS、FUMIGADOSとか。去年はLOS CRUDOSも観に行ったしね。マーチンに久々会えてうれしかったよ」

■しかし、Overthrowを始めたのが1990年。今年で26年ですか。

「何だか無為に年数だけは増えたけど、他のレーベルと較べると、うちは超スロー・ペースだからな。毎年必ずリリースがあるわけじゃないけど、これでいいんじゃねえのかなと。自分のやれる範囲でしかやれないし」

■50歳を過ぎてもレーベルをやっているなんて、思ってました?

「うーん、そう言われると分からないけど、40歳になったときに、"あと10年は続けたいな"と思った。けどさっきも話したみたいにその10年のうち、前半がかなり辛かったかな。俺が40歳になったのが2005年で、2010年までが辛かったね」

■今後、出してみたいバンドはいますか?

「新しいバンドで俺が知らなくてもいいバンドはいるんだろうけど、まずはTHE RUSTEDは2nd EPもリリースするよ。THE RUSTEDは年齢的にも若いバンドで、ギター・ヴォーカルのタツキが今年で29歳かな。タツキはあとから加入したらしいけど、ex THE SICKじゃない?THE SICKは津山ではSKIZOPHRENIAよりデビューが早かったから、THE SICKのほうが先輩だと思っていたけど逆なのね。でも、20代のバンドがうちにいるのは嬉しいよね。彼らは音楽的にもまだまだ高みに行けるバンドだと思うから。NEW ORDERじゃないけど、ハートをギュッと鷲掴みにする曲をこれからこそ作れるだろうし、それを願ってるし信じてる」

■ゆくゆくはLPも。

「いけたらいいよな。本当に一生懸命に演っているのが伝わるからな。心から支持してるし、ウチには希望の星だよな」

■…タツキさんにはよく電話しているんですか?

「昨日も電話したよ」

■ハハハ…。

「話しが無駄に長いって言いたいんだろ(笑)。けどいつも次のリリースの話しばかりしてるね」

■いいですね、20代と50代でそういう話しができるのは。

「うん。確かにそうかもな。あと、LEBENDEN TOTENはいいよな」

■テープ(『Stagnation Fragmentation』)が出ていましたよね。

「レコーディングで、もう曲も体勢も完璧な状態らしいんだけど、エンジニアがいなくなったみたいで。失踪なのか、フラッと旅に出たという意味なのか分からないけど、Frankが(そのエンジニアを)捜すって言ってて。でもあのテープはFrankに送ってもらって聴いたけど、やっぱり曲がいいわ、フックが効いているというか。キャッチーさもあるし、曲にメリハリがあるから」

■今後、Overthrowを60歳、70歳になっても続けてもらって(笑)。

「それはないだろ(笑)。そもそも明日生きているかどうかも分からないし。やっぱり年明けに倒れたのがね(※胃潰瘍出血で入院)、自分でもビックリしたけど。無頼を気取るんじゃなく、退院後も酒はガンガン飲んでるけどな。世間じゃあそういうのを大馬鹿っていうらしいけど(苦笑)」

■じゃあ、読者にメッセージで締めましょう。

「ずっと通販で買ってくれている人もいるし、本当にありがとうと言いたい。自分のレーベルごときが今、この時代に何ができるか?っていうのもあるけど、大事にしてもらえるようなレコード、カッコイイと思ってもらえるレコードを作っていきたい。あとはここまでレーベルだなんて、胡散臭いながらも一応はそれらしく続けてこれたのは、バンドがいてくれたからだよな。こんなテキトーなレーベルなのに、本当にこれまでリリースさせてくれたバンドには感謝してるよ。それから友好的につき合ってもらってるレーベルや個人ディストロの方々や、昔から扱ってもらってるレコード店の方々も本当にありがとう」

■やたら謙虚ですね。昔は、"俺が聴きてぇもんを作るだけだ!"って言ってたのに(笑)。

「そんなこと言ってたか(笑)?でも、買い続けてくれてるコアな人たちは大事に思いたいし、ありがたいよ。あとなぁ、大昔、あるリリースから半年以上経ったときに、往復ハガキがうちに届いたんだよ。"まだ在庫ありますか?"って。"ありますよ。為替か現金書留で代金を送ってください"と返したら、それが届いて、もちろんレコードを送ったんだけどさ。そのあとにお礼の手紙が来て。東北の、何県だったかな、漁師をしている人で。"一日の大半を海で過ごす自分は、レコードが買える盛岡とかの都会に行くこともなかなかできず、通販が唯一の手段です。諦めかけていたレコードが買える、こんな嬉しさはありません。どうぞこれからもお体に気をつけて、いいレコードを作ってください"って丁寧な手紙がきて、涙が出そうになったよ」

■いい話ですね。で、最後にいい人アピールをして終わる、と(笑)。

「ああ、確かに俺って結構、実はイヤな奴だからな…(苦笑)」

■…えっ?あ、うん、そうですね。えー、今日は、どうもありがとうございました。

「えっ?!終わり…(驚)?!フォローしねえのかよ(汗)?!」



THE RUSTED



DESPERDICIO　photo by タカダユウコ

UNHOLY GRAVE

CRUCIFIED 21 YEARS

1993年から活動を続け、Raw Grind Terror Madnessをブチまけている名古屋のUNHOLY GRAVE!
そんな彼らのアルバム『Crucified』は1995年に、日本からはCDで、ヨーロッパからはカセット・テープでリリースされた。そして21年のときを経て、このアルバムがKarasu Killer RecordsとGive Praise Recordsによって限定再発されるのだ。
日本のグラインド・コアを体現するUNHOLY GRAVE、そのヴォーカルにしてグラインド・ファーザー:Takaho(ex-DEATHPEED/NAUSEA)にインタヴューを試みた。

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■僕が日本を離れてから数年が経ったね。UNHOLY GRAVEとグラインド・コアのシーンが懐かしいよ。だけどこのインタヴューができてすごく嬉しい。機会をありがとう。ハロー、Takahoさん、調子はどう?
「ハロー、Rafa!!俺は元気でやってるよ。ありがとう!Rafaが日本に帰ることを考えてるって聞いたけど、早く実現したら嬉しいよ」
■UNHOLY GRAVEは1993年からグラインド・コア・バンドとして活動を続けている。その活動の原動力は?あなたにとってグラインド・コアとは?
「俺はライヴをやり続けるのが好きなんだよ。決まりきった生活は退屈だから。俺にとってグラインド・コアとは情熱だね。最適な自己表現手段と言えるかも知れないな」
■『Crucified』のラインナップで、今でもバンドに残っているのは誰?
「ギターのTeeちゃんと俺だけだね。Teeちゃんはこのアルバムを作った後で一度脱退してるけど。その時に声を掛けたのが元DEATHPEED、GIBBEDのKajisa氏。その後Teeちゃんが復帰してツイン・ギター編成の時もあったよ」





■歌詞のテーマは?どうやって作詞しているのかな?
「人生の不条理やテロの愚かさ等、テーマは幅広く求めているよ。歌詞ノートがあって、思い付いた時に書き留めているんだ」
■最も影響を受けたものは?
「2001年9月11日のテロには衝撃を受けた。音楽的に1枚を挙げるならMETALLICAの『KILL 'EM ALL』だよ」
■UNHOLY GRAVEは嘘偽りのない、オールドスクールなロウ・グラインドをやり続けているよね!!!世界中から新たなグラインド・バンドが数多く出てきているけど、この再興をどう見ている?今のグラインド・コア・バンドに対して考えるところはある?
「100%正直に言えば、新しいバンドについては良く知らないんだ。でも俺達が始めた1993年と比べるとグラインド・バンドが増えているのは素晴らしいことだよ!」



■GRIND FREAKSギグを名古屋で毎月企画しているよね。だけど去年は他の都市でも企画した。いい経験になったのかな?
「名古屋で毎月は企画していないよ。地方で企画することは新鮮だし、全ての企画から多くのことを学んでいるね」
■いつも日本にはたくさんのバンドがいる。この事実についてどう思う?オススメのバンドはいる?
「若手のバンドを挙げるとしたら、グラインド系なら福岡のTAINTED DICKMENだね。グラインド系以外だと、大分のKNAVE、東京のGUEVNNA、岡崎のVERTIGO等が良いね」
■日本のバンド以外で追っかけているのは?
「質問は"海外のお勧めバンドはいるか?"ってことかな?テキサスのWAR MASTERはとにかく最高だよ」
■最近ショーはやった?海外ツアーの予定はあるかな?南米でやる機会は?
「毎年5月恒例の"GRIND BASTARDS"フェスが終わったばかり。海外は10月に"CALIFORNIA DEATH FEST"に出演するよ。11月には"GRIND FREAKS in KOREA"もあるし。南米公演の予定はないけど、行けたら最高だろうな!」



■読者にメッセージをもらえる?
「"やれるチャンスがあるなら自分が本当にやりたいことをやれ!"。ありがとうRafa!」



石塚ユウ
BAND OF ACCUSE

不肖私のEL ZINE勝手インタヴュー・シリーズ、今回のターゲットは福島のハードコア・パンク・バンド、BAND OF ACCUSEのヴォーカル・石塚ユウ氏です。
BAND OF ACCUSEの各地でのライヴだけでなく、レイシスト・デモなどへの抗議行動などで彼に会った人も多いかと思いますが、勇猛活発なユウ氏に、2011年の震災を経てあらためて浮き彫りになった、ミンシュシュギ国ニッポンにおける、「都市による地方の搾取」を軸に、福島の一パンクスからみた、パンクスのネットワークのこと、福島のこと、アンティファのことなどを聞いてみました。

インタヴュー・構成:鈴木智士(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/)　[5月1日　日暮里　居酒屋ただいま]

■ではまずインタヴューのはじめのよくある質問から。結成はいつ?
「いつだったかな。確か2008年ごろだったと思います。メンバーは、ドラムのシンと、ギターのヒダカの3人で始めました。俺がバンドやりたいなあと思っていたときに、暇そうだったし音楽の趣味も合いそうだったからヒダカに声を掛けて、シンはまだ高校生だったと思うけど、たまたま見に行ったライヴで当時彼は已是という会津のバンドでドラムをやってて、いいドラマーだと思ったし、あと別の日のライヴの後に、終電逃して公園のベンチで寝てる姿を見て、いい感じだと思って声を掛けた(笑)。ドランク・パンクだし(笑)。
今はギターのヒダカがバカンスに行ってて、まだ帰ってきてないので、ヘルプでベースがSTRANGE FACTORYの山田君、ギターはSTRANGE FACTORYのリョウ君や、SWINDLESのノブ君が交代で手伝ってくれてます。メンバーが定まってないけど、我々は活動することを諦めることはありません」
■バンド名について、和訳すると「告発するバンド」という意味で、パンク・バンドの存在意義をそのままバンド名にしてて、潔いなあと思ったけど、この名前にした理由は?
「俺は何事も守りに入らずとにかく攻めまくって敵をぶっ潰す方なんです。格闘系のゲームなんかでも防御なんて一切しません。子どもの頃戦争ゲームにハマってたのですが、とにかくあらゆる土地を植民地支配しまくってその土地の資産を根こそぎ搾取して初っ端から核爆弾レベルの兵器作って世界制覇することに快感を覚えてました(笑)。もちろんゲームですけどね。それでこの名前にした理由は「THE酔っ払った勢いとその場のノリ」です(笑)。ジミヘンの"Band of Gypsys"みたいでいいんじゃないぐらいの感じでしたね。あと個人的にカッコいいバンド名にしたくなかったってのもありますね」
■その場のノリかあ(笑)。じゃあBAND OF ACCUSEを始めた当初、こんな音楽をやろう、ってのはあった?
「当初はD-Beat、クラスト・パンク。でも今はそれらのジャンルも含めトータルでハードコア・パンク・バンドでありたい。メンバーそれぞれ様々な音楽が好きで、音楽性的にハードコア一辺倒ではない曲もあったりして、とにかくなんでも吸収したいし、挑戦したいというのはあります。なんでもやればいいってもんじゃないけど、でも挑戦し続けたい。変わっていきたい。ある意味クロスオーヴァーなバンドでありたい。でも基本的にはパンクだし、パンク以外やる気もないです」

人任せにしてたら何も起きないから、
だから自分達がやるしかない

■福島、郡山で企画をやったりしてるけど、地元でライヴを企画することについて教えてください。僕も今手伝ってるVOĈO PROTESTAで去年呼んでもらったけど、REDD TEMPLEと一緒にやったりで面白いライヴだった。
「集客はいつも厳しいし、バンドは少ないし、そもそも東京みたいに、パンク、ハードコアのバンドだけでライヴができないですね。でもただ、そこにも面白さがあるというのも最近思っています。REDD TEMPLEはストイックに音を追求してて凄いですね。
他には、ここ最近絡んでるバンドだけに絞るけど、REBEL ONE EXCALIBUR、ONE STROKE、BT8B、STRANGE FACTORY、POTRAIT、THE PATH、あと最近haptが出てきたり、mozって高校生のバンドが出てきたり、会津に已是がいたり、いわきにTHE


さっちゃん@利蒜堂

HAPPENINGでベース弾いてたさっちゃんがいたり。
郡山はパンクが皆無だけど、世代も性別も人種もジャンルも超越して繋がってて、そこは良いとこだし、面白いところだと思います」

■福島はニューヨーク・ハードコア系のバンドが結構いるような気がするけど、一緒にライヴやったりする?

「そうですね。それまでは何となくは存在を知っていて知り合い程度だったけど、結束したのは震災以降です。郡山にREDD TEMPLEのメンバーがやってるTISSUE★BOXというスタジオがあったり、あとBEHIND THE 8 BALLのメンバーがやってる利蒜堂というライヴができるBARがあって、どちらも震災以降にできた。それらの存在が本当にデカいですね。気軽に集まれる場所ができたのは福島のシーンにとって本当にデカい。ビジネスライクじゃないから俺みたいなビンボー人も迎え入れてくれる(笑)。昔の郡山のシーンって退屈でクソつまらんくて、偉そうにしてるだけのパンクのオッサンとか、そんなシーンだったけど、今は面白いと思う。だからガンガンあちこちからバンドが来るし。海外のバンドも来るようになったんだと思います。
とにかく、地方のシーンはある意味コレクティヴとして運営していかないとシーンとして成り立たなくて、畑の違う人達でも協力しながらじゃないとやってけない。競争じゃなくて協力が絶対的に必要なんです。あと理想としては、福島のシーンで、アナキズムの考えを実践したいというのはありますね」

■利蒜堂はロケーションも雰囲気もいいところだったけど、最近無くなっちゃったの?

「さっき言ったように、利蒜堂もTISSUE★BOXも震災以降に仲間が作ったオルタナティヴなスペースです。他にも沢山あります。震災で一度リセットされて、何もかもなくなってしまったから、また一から始めようという意識はなんとなくみんなにあったのかもしれないですね。場所にしてもバンドにしても。「オレ店始めるわ!」「OK!サポートするよ!」、「オレ新しくバンド始めるわ!」「OK!サポートするよ!」みたいな。
利蒜堂は、無くなるというか、一度休憩して今度は別な場所でまた始めると思います。それまでうちらみたいな下層の人間の居場所が無いのはちょっと辛いけど(笑)。利蒜堂(Rebuild)だけに再建するだろうし、また俺達の遊び場、拠点になって、シーンの起爆剤になることを願ってます」

■じゃあ逆に、東京でライヴをやって思うことは?BAND OF ACCUSEはよく東京でもライヴやってると思うけど。

「地方の人間である自分が都市部のことについて言及すると、どうしてもルサンチマン的思考になってしまいがちなんですが、ことパンク・シーンにおいては、やはり刺激になるし学ぶことが多いです。あれだけのバンドがいて、人がいて、ライヴハウスがあって、レコード屋もあって。でも羨ましく思う反面、もしかして音楽性や○○系などの括りでシーンが分かれちゃったりして、井の中の蛙だったりするのかなぁなんて。もしそうだったとしたら色々大変そうだし、勿体ないなぁなんて超勝手に思ってたりします。
そういや昔東京のバンドをサポートしたとき、「東京じゃこうはやらない、東京だとこうだ」って東京スタイル押し付けてきた都市帝国主義バンドは今も活動してんのかな…。まぁいいけど(笑)。
やはりどうしても都市部のやり方や考え方に影響受けるけど、地方には地方の良さがあって、地方にしかできないこともあるので、都市部のバンドも福島に来たときそれを理解して楽しんでくれてると思うし、そういう意味で今は都市と地方に差異があるとは思いたくないってのはあります。うちらもガンガン東京のバンド呼んで企画してます。こんなクソみたいな街ですからね」

■「クソみたいな街」というのは、バンドもいない、人もいないってこと?

「過疎化したクソつまらない街だから、だったら面白いことやって面白くしてやろうぜ!ってぐらいの意味ですかね。俺にはパトリオティズムなんてもんないけど、ただ福島に住んでて、地元で活動してて、地元で活動してる仲間がいて、その仲間達と協力し合いながら、シーンを盛り上げようとしてるにすぎないです。たまに、福島にかっこいいバンドはいないとか、福島では面白いイヴェントなんてないとか言ってる元パンクのやつらもいるけど、そうやって人のせいにしないで、自分達がやればいいじゃんと思いますね。
地方も都市部も関係ないかもしれないけど、地方の場合、誰かがやってくれるわけじゃないから、人任せにしてたら何も起きないから、だから自分達がやるしかない。バンドとか企画とかシーンとかに限らずだけど自分がやればいい。そうじゃなくてもやってる人をサポートすればいい。DIYパンクじゃん、ってことですね」

パンクのコミュニティは小さかったとしても物凄く強固なもの

■4/24に先述の利蒜堂で、熊本大分地震の連帯ライヴを早速やっていたけど、これはなぜ、どういう経緯で企画した?

「俺達に何かできることはないかなと考えて、じゃあライヴをやって支援しようってことになりました。俺達らしく。他人事に思えなかったですし。
さっきと重複するけど、福島、郡山は、特にTISSUE★BOX、利蒜堂、ピークアクションを基盤に、ちょっとしたコレクティヴ化していて、だからすぐに行動できるんですよ。みんなお互いに協力的だし。それで沢山のお金や物資が集まって、お金はTURTLE ISLANDのヨシキさんが中心にやってる橋の下基金に託して、物資は津山のウシロダ工房に託しました。これからは野宿者とか障がい者とかをサポートするような動きになれればいいなと。Food not Bombsのような活動もできたらいいなとも思ってます」

■他人事に思えないというのは、自分たちが震災を経験して、ということ?

「もちろんそうです。福島のみんなも(熊本で地震が起きて)何かしら、どうしよう、と思っていたんだとも思います。自分たちが2011年の震災のときに大変な思いしましたからね。地球がブッ潰れたか、核戦争でも起きたのかってくらいでしたから。自分の場合だけど、当時住んでいた家に住めなくなって、ライフラインが止まって、食べる物もないし、住む場所もないから転々として、家族は車中泊してたし。ガソリンが無いから原発が爆発しても逃げられない。金もない。失業した友人も沢山いた。ノイローゼになった2人の子をもつ友人もいた。俺達が拠点にしてたピークアクションってライヴハウスもぶっ壊れたし。みんな大変な経験してきたから、福島で今回の熊本大分の震災を他人事にできる人はいないと思う。パンクは人類愛ですから(笑)」

■今回は僕もそうだったけど、東京だと誰かがやってくれるだろうから、そこにカンパしたりして乗っかればいいやと思う人が多いと思うが…。

「それもさっきの話とつながってて、福島じゃ誰かがやるのを待ってたら何もできないし、何も起きないから、俺たちがやるしかないなと。人任せにはできないから。誰かがやってくれるから、それに乗っかろうという発想は俺達にはないです。政府?行政?慈善団体?パンクの知り合い?いや自分でやるしかない、ってことです」

■こういう災害などのときに、行政の支援などに頼らずに、パンクスのネットワークでできることは何だと思う?

「ハナから行政に頼るつもりはないです。まず信用していないし。3.11以降なんて、国や政府に任せてたら福島や東北だけじゃなくこの



国自体が滅びちまうよって誰もが思ったはずだし。
今も福島の被災地の支援を東京のパンクスと連携してやってるけど、20キロ圏内の南相馬とか5キロ圏内の大熊に行って人的支援や動物保護のサポートしていて、行政や東電なんかに任せてたら殺されてしまうし、人だろうと動物だろうとあいつらが起こした事故の犠牲にするわけにはいかないから。一種の反原発運動でもあるんだけど。信用してないから俺達がやるまでです」
■ただパンクのコミュニティはそんなに大きいわけじゃないので、支援を行ううえでもどかしさみたいなものも感じることがあると思うけど、パンクのコミュニティの限界についてはどう思う?
「確かにパンクのコミュニティの力だけでは限界はあると思う。場合によってはパンク以外の支援団体などと連携することもあるかもしれないけど、基本的にはパンクのコミュニティでやっていけたら理想ですね。自ら限界を求めたくはないです。やはり団結し連帯して、危機的な状況を乗り越えていく必要がある。これは今回の熊本大分だけに限らず、重複するけど野宿者、障がい者などの社会的弱者を、小さい小さいパンクのコミュニティだったとしても、サポートしていければいいと思います。俺達も社会的弱者じゃん。そしてパンクのコミュニティは小さかったとしても物凄く強固なものでしょ。パンクのネットワークって凄いと思う。



俺はパンクの繋がりを信じてます。話は変わりますが、地方というのは繋がり、コミュニティが絶対なので、震災や原発事故によってそのコミュニティがぶっ壊されて、現在も避難してる人の孤独死や自殺が絶えない状態なんです」
■震災によりコミュニティが崩壊された結果、孤独死や自殺が絶えない、というのは、行政の支援なんて期待できるはずもなくて、まさにパンクなどのコミュニティによってしか克服できない問題なのかもしれないね…。

都市の加害性、「お前ら東電を燃やしてこい」

■さて、震災、福島の原発の話が出たところで、BAND OF ACCUSEの"Death to Capitalism"という曲について聞きます。少し説明すると、この曲は、ある反帝国主義・反原発コンピレーションに入る予定で(その後結局リリース自体がお蔵入りになった)、2013年のはじめごろに、僕が歌詞と声明文の翻訳の依頼をレーベルから受けて初めて読んだんだけど、身につまされるというか、言葉が生きて迫ってくるような歌詞、文章だなと思って。このまま埋もれさせるのもなんなので、ここに歌詞と声明文を丸々載せます:

Death to Capitalism/
BAND OF ACCUSE

闇を照らす犠牲のシステム
被曝を強制する
豊かさを送り続けてきた過去半世紀
犠牲と差別だけが生き残る

俺たちが武器になり、奴らに殺される

底知れぬ資本主義の闇
第三世界を侵略する
核武装の為の原子力
最悪のシナリオ

俺たちが武器になり、奴らに殺される

お前に送る電気でこの地は支配され
すべてが破壊された
反原発とは名ばかりの傍観者
加害性を自覚しろ

俺たちが武器になり、お前に殺される

【声明文】

とりあえず先に言っておく。
原発はクソだ。憎い。ファックだ。
人間は太陽を造った。
それ以来、この国、いや世界中で平和なんかあったか?
あったと思うならそれは君が見ようとしない真実の世界があったって事だ。
なんで俺たちが人殺しの加担をしなくてはならないのだ。
福島原発はジェノサイドだ。

原発は国策である以上、政治抜きには語れないが、それ以前に我々はこの地、この福島に住む人間として感情論抜きには語れない。

我々は人間の豊かさや利便性を生産するだけの操られた使い捨てのロボットではない…。

3.11以降、生と死についてよく考えた。
地震と津波による多くの死。
そして多くの家族や友人を失い、希望を失った。
生きるか死ぬかの瀬戸際で、それに追い討ちをかけるように原発事故はおきた。
数万人の人々が避難生活を強いられ、生気を食い続けられ、今なお孤独死と自殺者が後を絶たない。
死が止まらないのだ。
遺族や被災者の、怒りと悲しみに震えながら流す涙はこれからも拭えないだろう。

これはTVの中の物語でもない。教科書に載ってる過去の歴史でもない。
ましてやNO MORE FUKUSHIMAなんて過去にされちゃ困る。
現在進行形であり現実なのだ。
もう一度言っておく。
これは現実なんだ。

仮設住宅に住む一人の女性が言った。
「東電を燃やしてこい」
我々の心にも火がついた。
ここは戦場なんだ。
我々はこの地に住むことを決め、これからもこの地で闘っていくことを決めた。
しかし国家や資本家だけが相手ではない。
リスクは福島で背負っているのにも関わらず、利益は関東圏で享受されてきた。
国や東電を批判するのは当たり前だ。
だが差別で動く原発は必ず犠牲になっている人達が居る事を認識しているか。
3.11以前も、そして震災後の収束作業においても福島のみならず全国の貧困層が被曝労働に従事している。
犠牲の上に我々の生活が成り立っているのだ。

おそらく多くの人が加害者と言う自覚はないだろう。
もし無いならば我々はお前とも戦う。
そこのお前のことだ。

これは某レーベルから発売される予定だった、東京3バンド、福島1バンドによる「反帝国主義、反植民地主義としての反原発」4wayスプリット音源のために書いた歌詞と声明文です。レーベルの意図があっての東京3バンド、福島1バンドだったんだと思います。あのときは反原発デモが今よりも盛んで、パンクも含めてみんなが反原発の方向を向いてた。みんなが国や東電を批判していました。「福島返せ!ノーモアフクシマ!」。みんな楽しそうでした。派手な衣装に身を包み、恋人とのデートのようにデモ行進をする。私達は福島と共にある、福島の人達を想ってる、福島と連帯している。「福島返せ!ノーモアフクシマ!」でもそのとき自分は、何故か違和感を感じていました。そのとき感じた違和感を歌詞と声明文にしました。
これ以上具体的な説明はしません。福島の人間が、何を伝えようとしてるのか、考えてもらって理解してもらえたら幸いです。

■仮設暮らしの女性の「東電を燃やしてこい」という一言にしても、その「ノーモアフクシマ」の運動からは出てこないような切迫感のようなものを感じるけど、この女性は今はどう暮らしてる?
「そう。リアルでした。南相馬に被災者をサポートしに行って、仮設住宅を周って話し相手になったりしてたんですけど、高橋ってばぁちゃんが俺達に向かって「お前ら東電を燃やしてこい」って言ったんですよね。それでズドーンと俺の心にも響いた。その言葉だけで想いが伝わったし、その言葉だけで東電を解体するために闘う覚悟はできた。
南相馬や20km圏内に住んでる人はみんなそのくらい国や東電を憎んでる。南相馬という最前線の地で闘ってる人の口から出る言葉は本当にリアリティがあるんですよ。
東電を燃やしてこいって言った高橋のばぁちゃんは今も仮設暮らしだと思います。娘と孫を震災で亡くしたのにとても元気な人で、逆に俺達が元気をもらってる。支援しに行ってるなんて偉そうなこと言ってるけど、ある意味自分達が支援されてる感じですよ」
■端的に、都市生活者の加害性って何だと思う?
「ぜんぜん難しい話じゃなくて、都市部が潤うために、地方に何でも押し付けてきてるわけで、沖縄もそうだし、原発の海外輸出もそうだし。国とか政治家とか電力会社とか、そいつらを批判するのは当然だけど、自分を問う必要もあるというか、自省せずにただそういう権力を批判しても、何も変わらないと思うから。これもさっき言ったことにつながるけど、自分が変わらないと何も変わらないということが言いたかったんです。自分を問う必要がある。原発輸出なんかだって、日帝本国人としての自覚が必要でしょう」
■他人事ですませない、ということだ。そもそもハードコアとかパンクって、いかに「個」であることか、ってことだと僕は常々思っているけど…。
「そう、だから声明文の最後も、個に突きつける意味で、「そこのお前のことだ」って書きました」
■2012年の12月に僕が東京でライヴを見たとき、STRANGE FACTORYのドラムがMCで福島のことを話すときに、「こんなところでこんな話をして申し訳ないんですが…」と前置きをおいたことがあって、そのときに、何かすごい悪いなと思って。これも都市の加害性の一部というか、無意識のうちにでも、そこでライヴを見ていた我々が、福島から来たこのバンドにこの前置きをさせるように仕向けてしまっているわけで。当事者性の共有がまったくできてなくて、原発をめぐる都市と地方、っていう構図が、そのままパンクのライヴにも出てしまってるように感じた。
「これはドラムの気持ちがよくわかります。相手を選ぶというか、ライヴなんかではMC以外で震災や原発の話をしないことの方が多い。相手に負担をしいて不快にさせてしまう、って気持ちもあるんじゃないかな。聞かれればいくらでも話すけど、自分から積極的に話すことってあまり無かったかも。被害者意識をアピールしたくなかったってのもある。見栄かな?でも我々も、その被害者意識ってやつを克服することが大事だと思ってます。被害者意識が強いから申し訳ないって思うんだから。ドヤ顔で話してやる」
■原発の話などが、ライヴのときなどでも「相手を選ぶ」トピックになってしまうというのは、実はパッと見は健全に思えるコミュニティでも、依然ものすごく表面的というか、その他者との間にある「表層」みたいなものを壊せていないのかもしれない。
「それはやはり当事者性の共有ができていないってことですもんね。だから国や東電だけの問題だけじゃないことを理解してほしかったから「加害性を自覚しろ」って言いました。でもただ「空気」が支配してるだけで、個はそんなことないと思う。思いたい。うちらはその「空気」を食っちまえばいいだけだし」



原発から14km地点の「希望の牧場」
国は現在でも被ばくの証拠を残さない為に、牧場の放棄と300頭いる牛の殺処分を命じているが、牧場主は抵抗し続けている

俺達はパンクでしょ!ANTIFAでしょ!
非国民上等でしょ!

■話は変わるけど、去年国会前などで、SEALDsやその周辺の人たちが「国民運動」といい出して、それに追随するパンクスもいたけど、個人的に、ああいうときに「国民」の側につくパンクスというのはびっくりした。ありえないと思った。パンクスが国民というのは世も末だなあと。ユウ君も見たり関わったりしてきたと思うけど、それについては何か思うことはある?
「彼らを全否定はしません。支持できる部分もありますから。実際仲間もいるし。でも確かにパンクが国民運動を支持するのはないかなって思いましたね。自分の立ち位置がどこを前提とするのかだと思うのだけど、パンクが「国民」を前提としたら、それはもはやパンクではなくなってしまう。国民を前提とすることで、必然的に非国民として排除される人がいることを容認してんのかいなと。
自分もネット上などでこれらのことで揉めたこ

とがあったし、あとヘイト・デモのカウンターで、大学生が目の前で弾圧されて逮捕されたのに、「あいつらは極左だからどうでもいい、ほっとけよ」って言っていた人がいて、誰であっても捕まっちゃだめでしょ、と思った。自分たちが絶対的な正義と規定して、それ以外のクラスタは「敵」みたいなやり方に憤りを感じました。お前らがセクト主義なんじゃんと思って(笑)。とにかく国民主義的キャンペーン運動なんてクソだと思った。俺達はパンクでしょ!ANTIFAでしょ!非国民上等でしょ!」

■「国民」というレッテルが貼られるときに、疎外される対象の側でいたいということだね。あと特に3.11以降の運動は、右も左も関係ない、みたいな風潮もあったりするけど、そんな状況の中でパンクスなんて真っ先に弾圧受ける対象だろうに、それが自ら「国民」って言っちゃうことの怖さは覚えといたほうがいいのかと。

「そうですね、パンクスが捕まったときに、「あれはパンクスだからほっとけばいい」というふうにもなりかねない。あと「民主主義」ってなんだよって感じですね。パンクが与えられたその民主主義のレールに乗ってどこまで行くのだろう。代々木?誤解されることが多いからついでに言うと、俺は共産党も支持していない。どの党が政権握っても同じでしょうと」



在特会のヘイト街宣へのカウンター＠福島駅前

■そもそも「民主主義」がニッポンにあるのなら、基地を沖縄に押し付けたり原発を福島に押し付けてきたことはどうなるのかということでもあるよね。

話は少し変わるけど、『明治維新という過ち』(原田伊織著、毎日ワンズ)という、去年話題になった本を読んだときに思ったんだけど、政府「中枢」からすれば、会津は「賊軍だ、非国民だ」って言われてきて、実際に今の福島の人はそれをどう思ってる?

「福島だと、どこで誇りを思うか、っていうのがあって、賊軍であることはかっこいいと思ってるんじゃないかな。そうじゃないと強くなれない。一種の反逆精神。保守パンク、右翼パンクもある種の反逆精神から来ているようにも思えますね。反米愛国。対象がどこに向くかだけの違いのような気もします。

在特会とかネトウヨも、バカだとは思うけど、完全に非難することはできなくて、一歩間違えれば自分がなっていた可能性だってあると思う」

■育った環境もあるだろうし、あとは自分の頭で考えるか考えないかの違いではあるよね。

「そう、その背景とかを考慮せずに、頭ごなしにバカとか死ねとか批判するのも、ある意味ではファシズムなのかとも思いますね」

血の通ったバンドをやりたい、血の通ったヴォーカルでありたい

■さて、次のお題だけど、なんでハードコア・パンクをやっているのか、という身も蓋もない質問です(笑)。

「好きだからですね。俺はパンク原理主義だけど、サウンドだけじゃなくて気持ちや姿勢のほうも重要。もちろん姿勢が最重要でサウンドは二の次ってわけじゃなくて。表現はたまたまハードコアってだけで、場合によってはアコースティックかもしれない。さっちゃんなんかはすごいパンクだと思うし。表現方法はあまり関係ないと思う。バンドの姿勢、っていう点で、「伝えたい」というのはいつも強く思ってるし意識してる。伝えることをあきらめないというか」

■「伝える」ってのは、福島の経験のこと?

「政治的なメッセージもそうだけど、それは例えばファッションでもいいし、音でもいいし。ZINEでもいい。要は表現するってこと。伝えようとすることが表現でしょ。伝える人がいて、伝わる人がいて、なんつーかヒューマニズムですよ(笑)。俺は血の通ったバンドをやりたい、血の通ったヴォーカルでありたい。SNSでもガンガン表現してる(笑)。まぁSNSなんてスーパーどうでもいいけど。そんなの人それぞれ価値観が違うけど、俺はその「伝える」ことをパンクから学びました」

■じゃあ姿勢として、このバンドはお手本になる、ってのはある?

「バンドじゃないけど、レーベルのAcclaim Collectiveですね。音楽と政治を別のモノにしないで、それらをストイックに追求する姿勢はリスペクトしてます。バンドだとLIFEですね。20年やっていても、むしろ今の方が勢力的に活動していて、とにかく前進しようとしてるのが伝わる。Nさんなんて、家に行くと必ず誰かしらいて、海外のパンクスとかもガンガンサポートしてる。被災地に行って支援してたり、そういう活動なんかも含めトータルで影響受けました。そしてそういう人達がやってるバンドのサウンドはやはりカッコいいのです」

■最近聴いてるバンドは何かある?

「正直ニッポンのバンドを聴くことの方が多いけど、キリがないので、海外のバンドだけにするけど、イギリスのRADICAL DANCE FACTIONや、他にBLACK STAR DUB COLLECTIVE、スペインのACCIDENTE、スウェーデンのINSIDIOUS PROCESS。あ、あとミロっていうフィンランドの友達が最近始めたTUHOON TUOMITUTがカッコいいです。世界中にカッコいいバンドが多すぎて追いつけないけど、カッコいいバンドと出会った時の衝撃は中学生の頃にセックスピストルズと出会って衝撃クラった時以上のもんです(笑)。だから今も世界中のパンク・シーンをチェックしまくってるし買い続けてますね。物販かディストロか水戸のKNOXで入手することが多いかな。基本的には現行のバンドにしか興味ないです。シーンをサポートしよう!逆に何かありますか?」

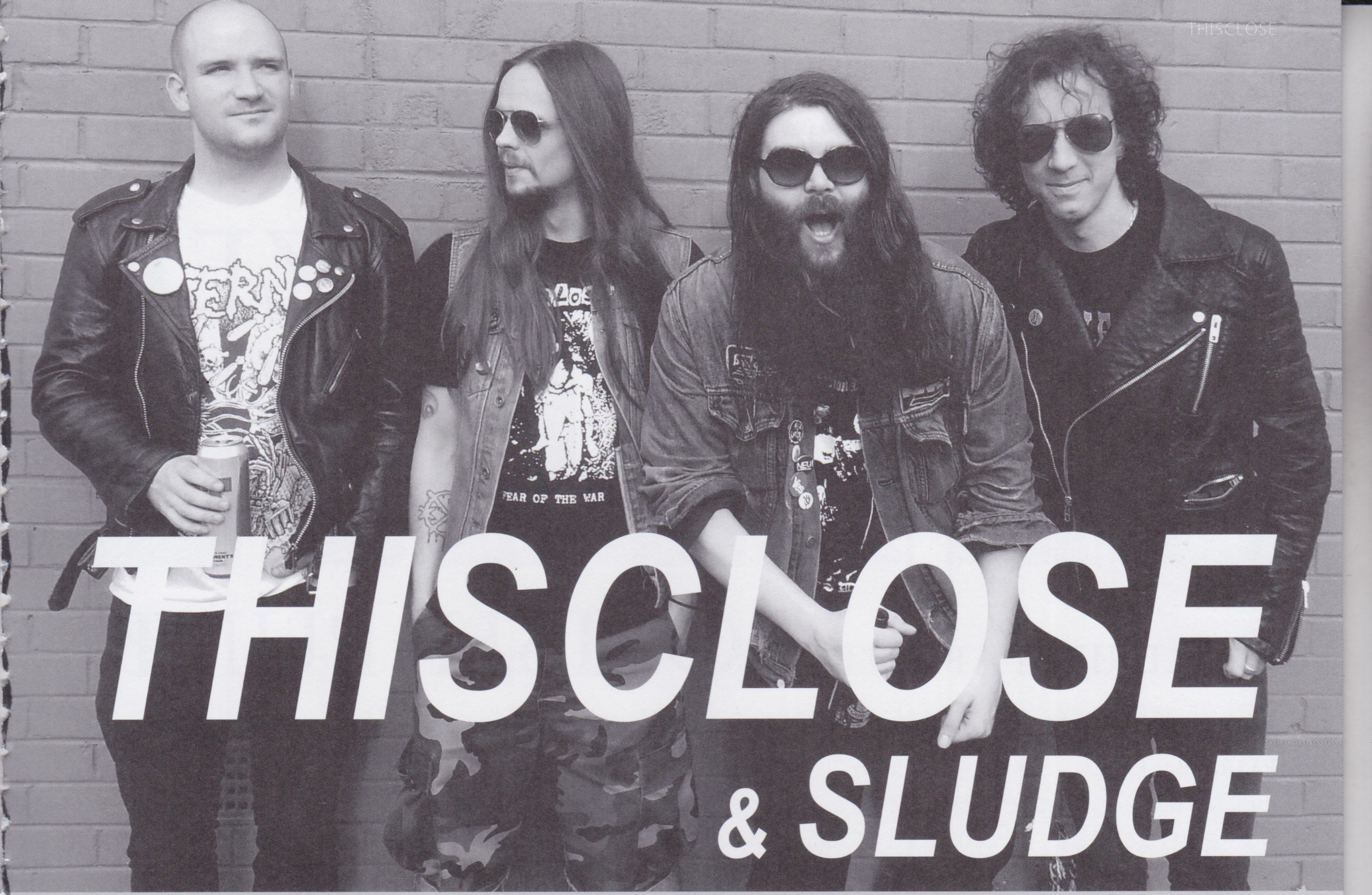
■この前買ったDREAM DEATHの新作はよかった、しょうもないドゥーム・メタルだけど(笑)。

とにかく生きていたい

■じゃあ最後に、今後の展望などは?

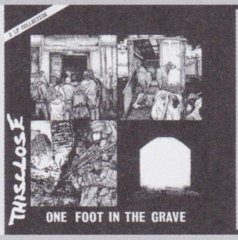
「とにかく生きていたいと思う。世の中のことに対する不満だって結局はそこなんだと思う。そのためには自分にとってパンクが必要。だからこそこれからもパンク・シーンをサポートし続けていきたいです」





THISCLOSE
& SLUDGE









NEWS! NEWS!! NEWS!!!
Vol.15にインタヴューを掲載させてもらったスコットランドのGrave New Beatバンド: THISCLOSEが和歌山のSLUDGEとの日本ツアーを2017年に予定しています!以下はTHISCLOSEのRoddyからのメッセージ!

THISCLOSE(スコットランド)とSLUDGE(日本)は2017年4月6、7、8、9日に合同でジャパン・ツアーを予定しています。東京、名古屋、大阪でライヴを行うことを希望していて、それらのライヴの準備、企画を手伝っていただける方、またはライヴをプロモート、告知していただける方を探しています。ご協力いただける方は、下記のメール・アドレスまで日本語でご連絡ください。info@punkbeat.net

THISCLOSEはスコットランドのハードコア・バンドで、DISCHARGEの初期から現在までの全ての音楽性、スタイルに非常に影響を受けたバンドです。2012年に結成され、これまでに3枚のLPと2015年に合同でUSAツアーを行ったACTIVE MINDSとのスプリットを含む4枚のシングルを様々な国のレーベルから発表しました。
これらのリリース作品についての情報は下記のサイトでご覧、視聴していただけます。
www.thisclose86.bandcamp.com
www.youtube.com/thisclosetv

SLUDGEは和歌山のハードコア・バンドで、これまでに2枚のCDRと、CRUST WARよりフル・アルバムを1枚リリースしています。彼らの2枚のCDRはヨーロッパのOUR FUTURE RECORDSより1本のカセットとして今年後半にリリース予定で、その後アメリカのレーベルSPHCからTHISCLOSEとのスプリット7インチを合同ジャパン・ツアーに合わせてリリース予定。
彼らのデビューLPの中のいくつかの曲はこちらのサイトで視聴可能。
www.discosmutacion.bandcamp.com



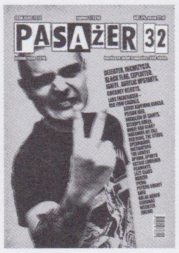




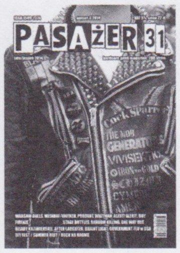


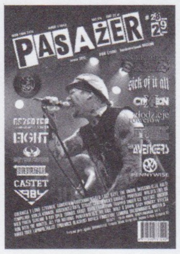
GRZESTER FROM PASAZER











IS TALKING ABOUT POLISH PUNK

弊誌Vol.18～19にフィンランドのハードコア・バンドVIVISEKTIOのインタヴューを寄稿してくれた、ポーランドの老舗ファンジンPASAZERのスタッフ、Grzester。今号にもPSYCHO SQUATT(フランス)とAPURTU(バスク)のインタヴューを寄せてくれたのですが(次頁に掲載)、ここいらで一つ、彼自身にポリッシュ・パンクの過去と現在について話しを聞いてみるのも面白いんじゃないかと、インタヴューを決行してみました。若干、80's至上主義っぽいところもありますが、現行のバンドもしっかりチェックしているので、日本全国津々浦々3000万人(?!)のポリッシュ・パンク好きの皆様には楽しんで頂ける内容になったと思います(現地の観光情報もあるよ)!

■パンク/ハードコアとの出会いは、まだ共産主義だった頃の、80年代のポーランドのバンドでしたか?当時はDEZERTERやTZN XENNA、SIEKIERA、MOSKWA、ARMIA等々、素晴らしいバンドがいましたよね。

「80年代当時、俺はディスコ・ミュージックを聴いていたんだ。MODERN TALKING、PET SHOP BOYS、SABRINA、C.C. CATCH、SANDRAとかね。俺が知っていた音楽は2つだけ。ディスコとメタル、それだけだったのさ。初等教育を終えたあと、何か変化が欲しかったんだ。それで、ラジオを聴いていたらMAGNUMというメタル・バンドを発見した。まぁ、それほど格好良くはなかったんだけど、そのときに偶然、ラジオでかかっていた他の曲もいくつか録音したんだ(80年代のポーランドには、4つの公共ラジオ放送があるだけだった)。Tomasz Rylkoという愉快な男が良い音楽を流してくれていたな。そこでかかっていたのが、俺にとって初めてのパンク・プレイリストだったんだ。EXTREME NOISE TERRORやVERBAL ABUSE、BAD BRAINSにTHE STUPIDS、RANDOM KILLING、そしてNEGAZIONE。これだ!と思ったよ。それが1988年の秋のこと。多分、そのときはポリッシュ・パンクはまだ聴いていなかったんじゃないかな。初めてのコンサートに行ったのもその頃さ。当時、少しは知られていたVADERというバンド(彼らがSLAYERのカヴァーをやっていたのを覚えているよ)と若いメタル・バンド、AMENのコンサートだった。そのすぐ後にローカルなパンク・バンド、DIE FALLENのライヴを見たんだった。サックスがいるバンドだったな。そうして色々と聴くようになったけど、音楽を聴くのはたやすいことではなかったし、徐々にって感じだった。なにせ俺は100人くらいしか人が住んでいない、田舎に暮らしていたからね。この手の音楽を扱う店なんてないし、テレビもラジオ放送も数が少なかったからさ。俺が音楽に自由にアクセスできるようになったのは、共産主義の独裁政権が崩壊した後のことだね。18歳になると、バイクに乗って国中を旅してまわって、遠くのコンサートにも足を運ぶようになった。大抵は一人で行ったけど、そこで知らない人たちと出会ったりしてね。今では考えられないくらい、クレイジーな時代だったよ。君が言及したいくつかのバンドは、その頃にはもう解散していたか、ほとんど活動していなかったようなバンドだ。それに俺も当時は知らなかったしさ。DEZERTERやARMIAを見るために、首都まで数百キロも移動しなきゃならなかったな。そういうときは、電車で移動したけど、ナチ・スキンヘッズともめたり、寝る場所もなかったりで。グッタリして帰宅したものさ。ときには、家族には秘密で行ったりしていたし…。思い出す分には懐かしいけど、危ない旅だった。俺が初めて見たDEZERTERのコンサートでは、彼らが交通事故に巻き込まれたっていうんで、もう見れないんじゃないかとヒヤヒヤしたよ。ギグは素晴らしかったけどね。スキンヘッズと喧嘩したりさ、ろくでもなかったね」



DEZERTER

■あなたは世界中のパンク/ハードコアを聴いていますよね。どういった音楽的な遍歴があったのでしょう?

「その通り、俺は世界各地のハードコア・パン



クに興味があるのさ。90年代初頭のポーランドではジャズ・コアが流行ったことがあってね。NO MEANS NOやVICTIMS FAMILYとかね。俺にとってはあまりいい時代ではなかったな。ときに、ああいったサウンドこそが現代のハードコアなんて言われていたけど、俺には全然アグレッシヴに聴こえなかったし。俺はもっとイカれた、ワイルドなバンドを求めていたんだ。ただ、91年に見たNO MEANS NOのコンサートはグレートだったし、彼らは今でも俺のお気に入りのバンドではある。ASSASSINS OF GODも心底好きだったし、今でも好きだ。だけど他のジャズ・コア・バンドは必要ないね。クラスト・パンクが盛り上がったとき、俺は数多くのアグレッシヴなバンドと出会った。いくつかの良いバンドがポーランドからも輩出されたし、外国からはもっとたくさん出てきたね。日本からも、クラシックなクラスト・バンドが登場したよね。もちろん、俺はありとあらゆる古いポリッシュ・パンク、70'sも80'sも90'sも(これは古いってほどじゃないけど)、大好きだ。例えばKSU、BRYGADA KRYZYS、DEADLOCK、TILT、SIEKIERA、MOSKWA、TZN XENNA、REJESTRACJA、ABADDON、ARMIA、PROWOKACJA、ALIANS、APATIA、SANCTUS IUDA、AMEN、WŁOCHATY、LIBERUM VETO、POST REGIMENT、HOMOMILITIAとかね。DEZERTERは今もお気に入りだし、歴史上の最重要バンドでもある。それに大切なのは彼らの歌詞だ。とてもリアルで、俺の人生に重大な意味を持つものなんだよ。それに母国語で歌う、異国情緒に溢れるバンドも大好きだな。UKとかUSAのバンドじゃなくてね。そういった古いバンドの音源をずっと捜し求めているんだ。なにせ、俺が好きな時代ってのは、80〜86年だからさ。『WELCOME TO 1984』、『CLEANSE THE BACTERIA』、『PEACE/WAR』といったコンピレーションに収録されているバンドはどれも最高だ。COLERA、RATOS DE PORAO、OLHO SECO、LOS VIOLADORES、SOLUCION MORTAL、POWERAGE、HEIMAT-LOS、NEGAZIONE、WRETCHED、STALIN、VICIOUS CIRCLE、G.I.S.M.、INFERNO、IMPACT、SCRAPS、RAZZIA、SLIME、ANTI CIMEX、PUKE、HEADCLEANERSとかね。だけど、最も愛しているのはフィンランドのバンドなんだ。RATTUS(マイ・ゴッド!)、TERVEET KADET、RIISTETYT、TAMPERE SS、VARAUS、BASTARDS、KANSAN UUTISET、POHJASAKKA、MAP、DESTRUCKTIONS、それにもっともっとね。彼らは最高だ!いくつか新しいバンドからも刺激は受けるけど、俺は古くて、オリジナルでシンプル、プリミティヴで正直なバンドが好きなんだ!数年前に俺はフィンランドの伝説的なPUNTALA ROCKフェスティヴァルに行ったことがある。偉大なバンドのメンバーと、何人とも知り合いになれたし嬉しかったね。時々、俺はバンドのコンサートを見に、ベルリン(500キロ離れているんだけどね)に行くこともあるぜ」

■ベルリンはヨーロッパの中心だし、多くのバンドが訪れますよね。では、ポーランドへツアーにやって来る外国のバンドは多いですか?

「たくさん来ていると思うよ。有名なところで言えば、AGNOSTIC FRONT、GBH、NEGATIVE APPROACH、ANTI SECT、SOIA、H2Oとかだな。外国のバンドがコンサートをやるのは容易だと思う。ただし、彼らが金銭目的だけじゃなく、楽しみたいのならね。でも、逆説的に言えば、多くのバンドがチェコやドイツには行くのにポーランドではプレイしない。RIISTETYTとかMDCとかね。他の国では何回かやるのに、ポーランドでは一度だけだったり、または一度もやらなかったり…。一般的に、多くのコンサートが開催されているけど、客はどんどん少なくなっている。15年前、俺はポーランドで最も重要なスクワット、ROZBRATに暮らしていた。多くのギグがあり、俺もたくさんの企画をしたよ」

■あなたはPASAZERの編集者なんですか?ライター?何年くらいPASAZERで働いているんですか?

「いや、俺は編集者じゃないよ。編集者はBezkocさ。彼と一緒に働くようになって、…17年くらいかな?当初はコラムを書いていたけど、その後にレヴューを書くようになって、今はレヴューと、古いバンドへのインタヴュー、それに彼らのヒストリーなんかを執筆しているね。COLERAやRATOS DE PORAO、RANDOM KILLING、LOS VIOLADORES、VARUKERS、RIISTETYT、KOHU-63といったバンドのね。俺のやったVIVISEKTIOのインタヴューは、EL ZINEで読んでくれたと思う。それにPSYCHO SQUATTとAPURTUもね。こうして外国とコンタクトをとるのは、俺に多くの喜びを与えてくれるんだ」

■PASAZERそのものについて紹介してもらってもいいですか?ジンだけじゃなく、音源のリリースもしていますよね。PASAZERはポリッシュ・パンクを象徴する存在だと、僕は思っているのですが。

「そいつはナイスだな!PASAZERジンは20年以上、発行をしているね。最初はファンジンだけで、その後にカセットとCDをリリースするようになり、10年ほど経ってからレコードもリリースするようになった。有名なポーランドのバンドをたくさん手掛けていて、DEZERTERにREZIM、ZIELONE ZABKI、BRZYTWA



KNIFE IN THE LEG



RUTA



OJCA、FORT BS、1984などをね…。それに新しいバンドも。DIYシーンのためにあらゆるものをディストリビューションもしているし、パンク・ロックの様々なアイテムも扱っている。ファンジンは、今は年に一度の発行だけど、関われて楽しいよ」

■今のポーランド・パンク・シーンに対する印象は?若い世代は台頭してきていますか?それともベテランが大多数?

「ポーランドのパンク・シーンは何ら重大な局面にないね。古くからの活動家たちの趣味だったり、ミュージシャンたちの楽しみみたいなものでさ。これはヴォイス・オブ・ア・ジェネレーションなんかじゃない。多分、良いバンドはたくさんいるし、アルバムを作るのも簡単になった。演奏する場所もすぐに見つかる。だけど、バンドの多くは歳をいった連中によるものだよ。若いバンドが現われたとしても、そのメンバーのほとんどはティーンエイジャーじゃないだろうね。この数年で、主要なバンドが解散してしまった。APATIA、ZLODZIEJE ROWERÓW、EYE FOR AN EYE。彼らがいなくなって残念だし、その後を継ぐ者たちもいやしないんだ。パンクスをストリートで見かけることもなくなった。今や、このカルチャーは社会に影響を与えることもなくなったし、社会もまた、このカルチャーに見向きもしない。パンクは脅威ではなくなってしまったのさ」

■では、昔のパンクと今のパンクの、どんなところに違いを感じますか?80年代のポーランドでは、パンクが社会に大きな影響を与えていたと?

「昔のパンクは独自性があって、粗暴だったんだよ。社会は衝撃を受けたし、その存在を嫌っていた。その結果が、警察やナチ・スキンヘッズ、社会そのものに対する攻撃性となったのさ。パンクは必要とされていなかった。だけどそこが、メインストリームのカルチャーに流されたくない多くの若者を惹きつけたんだ。だけど今では、このカルチャーに存在感は感じられない。昔、シーンにいた連中も今では公共のメディアや政府機関で働いていたりする。良いことだと思うよ。学校にパンク先生がいたら?何が悪いってんだ。だけど、公に対するパンクの影響力はないね。20～30年前は、ストリートに多くのパンクスがいたし、アンチ・ナチやベジタリアン、反政府などの大規模なデモも行われていた。かつてのコンサートは暴力的で安全じゃなかった。今じゃ安全、だけどパンク・カルチャーは受け身になってしまっているんだよ」



LAZY CLASS

■僕はEL BANDA、RUTA、UTOPIA、FIGHT(彼らはポーランドとドイツの混成だけど)、KNIFE IN THE LEG、GOVERNMENT FLU、PRODUKT、EDELWEISS PIRATENとかが好きなんですが、こういったバンドはまだ活動しているのでしょうか?あなたのオススメのポーランドのバンドは?

「君は女性ヴォーカルが好きなんだな!君が言及したバンドのいくつかは既に存在しないよ。EL BANDAは活動を再開して素晴らしいギグをやっているね。RUTAは滅多にやらないし、やってもクラブでのコンサートじゃなく大規模なフェスでだね。PAPRIKA KORPSというレゲエ・バンドのミュージシャンたちが加わったり、シンガーがDEZERTERやMOSKWA、POST REGIMENTのメンバーだったりするんだ。UTOPIA、KNIFE IN THE LEG、EDELWEISS PIRATENは今はもうやっていない。GOVERNMENT FLUはアメリカでよくやってて、たまにヨーロッパって感じだ。彼らのライヴは20分間のキラー・セットだよ。FIGHTのライヴは見たことがないな。PRODUKTは全然好きじゃなかったんだけど、ラスト・コンサートを見たらすごく好きになった、素晴らしいライヴだったよ!比較的新しい、もしくは知られていないバンドでオススメなのは、TRUD(D-BEAT)、UPADEKとADULT CRASH(US 80'sスタイル)、オールドスクールなハードコア・パンクのMORUSは、シンガーがPOST REGIMENTだね。あとはFIGHT THEM ALL(US 80'sスタイル)、LAZY CLASS(Oi!、ストリート・パンク)、AUSCHWITZ RATS(ポゴ・パンク)、WIEZE FABRYK(コールド・ウェーブ)、SOCIAL CRISIS(女性ヴォーカルのクラスト・パンク)、SCHROTTERSBURG(ポスト・パンク、ノイズ)、NON PRESIDENT(ハードコア、パンク)」

■早速、MORUSをチェックしてみました!僕の一番好きなポーランドのバンドはPOST REGIMENTなので。ところで、こういったバンドのほとんどはワルシャワでプレイしているのでしょうか?あなたの地元、イワヴァのパンク・シーンはどう?

NON PRESIDENT



ANSA



「ワルシャワ出身のバンドは多いね。だけど他の地方のバンドもたくさんいる。ルブリンのクールなバンドならKNIFE IN THE LEG、ALERT! ALERT!、UNION、OHYDA。ポズナンにも格好良いバンドがいるね。FIGHT THEM ALL、THUG LIFE、ASTRID LINDGREN、CYMEON X。小さな町の出身のバンドも多くいて、APORIA、ANSA、PERU、NON PRESIDENT。だけど首都ワルシャワが圧倒的だな。オススメのコンピレーションに、『WARSAW PUNK ATTACK VOL. I-II-III』があるよ。イワヴァにはパンク・シーンがないな。ポスト・パンク/コールド・ウェーブのSZUMKOTがいるだけさ。たまに活動しているSZWINDELというパンク/スカ/ロックのバンドもいるが、ここのアンダーグラウンド・シーンに興味深いやつはいないね。コンサートをするような場所もほとんどないしさ。フィンランドのKOVAA RASVAAとYHTEENOTTOを、この人口3万人程度の町に呼ぼうと企画したんだけど、結局やる場所が見つからなかったんだ!もう何年も暮らしているけど、そろそろここでの生活も変えないとな。だけど町並みは素晴らしいよ。1945年まではドイツだったんだが、第二次世界大戦後にポーランドになったんだ。27キロにも及ぶポーランドでも最長の湖を有してて、夏なんて最高だぜ。ここのパンクは死んでいるという事実はあるにせよ、それでも魅力的な土地さ!70キロほど行くとオルシュティンがあって、そこで活動していた/いるクールなバンドと言えばUTOPIA、EDELWEISS PIRATEN、PRODUKT、UHURU、UPADEK、ADULT CRASHだね。イワヴァから35キロのところにはオストルダという小さな町があるんだが、そこにはKAMIKAZE(!)という女性ヴォーカルの強烈なパンク・バンドがいるよ」

■あなたにとってパンクの魅力とは?パンクはどんな存在ですか?

「難しいが、同時に簡単でもある質問だな。パンクは俺に起こった最良の出来事だ。このムーヴメントは、俺がそれまで知らなかった多くのことに眼を開かせてくれたんだ。素晴らしい人たちとの出会いもあった。例えば、メキシコのコンサートでXENOFOBIAのメンバーと会って充実した時間を過ごしたりね。こんなことが、ロックやメタルのコンサートであり得るかい?アニマル・ライツ、反人種差別、反資本主義、セルフ・ヘルプ、同性愛。こういったことは俺の仲間たちにとっては重要ではない。だけど、パンクを通じて学んだことでもある。以前、俺はこんな壁の落書きを目にしたんだよ。"セックスはクールだぜ、だけどパンクのほうがイイね! "。こいつが真実さ!」

■僕たちがポーランドに行ったときに、オススメの場所は?観光地でもパンク・スポットでもOKです。

「パンクの話題で言えば、それはもうポズナンのROZBRATスクワットだね。地元の強固な活動家グループ、ANARCHIST FEDERATIONが運営しているんだ。トルンのPUB PILONでは多くのギグが行われている。ポーランド南部のジェレプスコではULTRA CHAOS PICNICというイカしたパンク・フェスがあって、バルト海沿岸に位置するグディニャではDIY FESTIVALが開かれているね。たしか日本から来たってやつがそのフェスにいたな! イワヴァには気楽に来てくれよ、だけど夏の方がいいね!ここの冬は不快だし、どの地方でも夏がオススメだよ。海はひんやりしているし、湖は美しい。俺が住んでいるところにも、たくさんの湖があるんだ!あとは千年もの歴史があるクラクフ、ヴロツワフ、グダニスク、それにアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所やマイダネク(ルブリン強制収容所)、ヴィエリチカ岩塩坑、タトラ山脈やビエシュチャディ山地、ベスキディ、ズデーテン山地といった壮大な山々かな。首都ワルシャワも訪れるには良いだろうね。実際問題、この都市は第二次世界大戦後、跡形もなくなった。広島にどこか似ているよ。だけど今では復興し旧市街も再建された。多分、ポーランドは驚くべき観光地ってわけではないけど、探訪する価値はあると思う。共産主義の終焉以降、この国は発展に努めてきたし、それは成し遂げられたと思うんだ。日本のバンド、STALINは有名なJAROCIN FESTIVALに出演した。1990年のことだ。だけど、あの頃とはもう時代が違う、今は遥かに良くなっているよ」

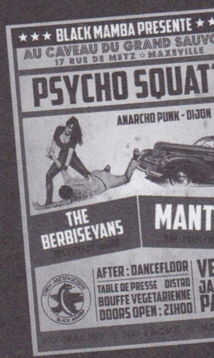
■日本の読者にメッセージをお願いします。

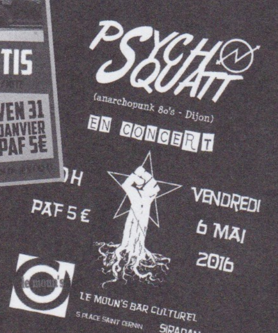
「あくまでも俺の意見だけど、日本のパンクスは、日本国外の人たちとコンタクトをとることに興味がないのかな。日本やポーランドのパンク・シーンについて、英語で連絡を取り合えるなら、それって面白いと思うんだけどな!20年も前に、BATTLE OF DISARMがヨーロッパ・ツアーを行った。企画したのは俺の友達でMALARIE RECORDSを主宰しているMartinだった。彼は、このバンドのメンバーはストレンジだって言っていたんだけど、しばらくしたら、素晴らしいやつらだって言うようになったんだ。だから、俺たちはコンタクトを取り合うべきなんだよ。俺は日本のバンドをたくさん知っている。その多くは昔のバンドだ。だけど彼らに関する情報は皆無さ。誰か協力してくれよ!合言葉は"ノイズ・ノット・ミュージック!"。パンクでい続けようぜ!」

コンタクト:grzester12@poczta.onet.pl









"FRANCE BOMBS AGAIN!" from POLAND　The First Volume

PSYCHO SQUATT

前頁のGrzesterへのインタヴューに続きましては、フランスの女性ヴォーカル・ハードコア・パンク・バンド:PSYCHO SQUATTへのインタヴューby Grzesterでございます。正直に言いますと、僕はこのバンドのことをチットモ知らなかったのですが、聴いてみるとこれが当地のLA FRACTIONにも通じる素晴らしいアナーコ・メロディック・サウンドでして、この手のスタイルを追い求めている人には100%オススメできるバンドなのです(彼らのウェブサイトで聴くことができます)!
そして、インタヴューに応じているギターのRudyは数多くのバンド(ACTIVE MINDSやLA FRACTION、PETROGRAD、INNER TERRESTRIALS、HEYOKA等々)をリリースしているMalokaというレーベル/コレクティヴの一員でもありまして、PSYCHO SQUATTは知らなくてもMalokaの名にはピン!と来た人もいるのではないでしょうか?
また、個人的には「近隣諸国と比べて、なぜフランスには(人口・国力のわりに)パンク・バンドが少ないのか?」という永年の疑問に答えが提示されたので(あくまでRudy一個人の意見ですが)、目からウロコの内容でした。
尚、大変に長いインタヴューですので、複数回に分けてお送りします!　INTERVIEWED:Grzester [grzester12@poczta.onet.pl]

■まず、PSYCHO SQUATTというバンド名はどこから?スクワットで生活しているときに、奇妙な人々であったり、奇妙な物語とかがあったのかなって考えたんだけど。
「確かに、俺たちはイカれた奴らと出会ったよ(俺たち自身もイカれているけどさ)。そしておかしなシチュエーションで一緒に暮らしていたんだ。スクワットではイギリスのアナーコ・パンク・バンドを、ずっとかけていたね。このバンド名はRUDIMENTARY PENIの曲名から拝借したんだ(※"The Psycho Squat"のことだと思われる)。俺たちはバンド名にピッタリだと思ったんだけど、どうやら適切じゃなかったみたいでさ。なにせ、色んな人たちからクソみたいな名前だなって言われるからね!!!」
■バンドは約30年前に始まったよね。長い年月を経て、結成当時のラインナップは何人残っているのかな?
「そう、バンドは1986年に2人の人間によって始まったんだ。他のメンバーが加入したのは1987年で、俺たちは16～17歳だったね。2014年5月まではヴォーカル以外同じメンバーだったんだけど、そいつは今、フランス南部でサーカスのプロジェクトに関わっているよ。それで、2014年5月にドラマーが交代したから、最初期から現在まで残っているメンバーは4人。サックスのDavid、ベースのMul、ギターのLoopingと俺、Rudyだね」
■バンドが始まった当初は、どんな曲をやっていたの？
「あの頃はイギリスのアナーコ・パンク・バンドのカヴァーをやろうとしていたね。俺たちのウェブサイトでCRASSの酷いカヴァーを今でも聴くことができるよ(psychosquatt.fr)。いかに俺たちが酷かったか分かると思う…。それから少し経って、俺たちはイギリスのバンドからの影響と、フランスのオルタナ・サウンドをミックスするようになった。バンドで言うとBERURIER NOIR、NUCLEAR DEVICE、HAINE BRIGADE、PARKAJ MENTAL、PARIA PUNK、LUCRATE MILKだね…。当時は、リヨンに住んでいる友だちのバンド、HAINE BRIGADEがすごくサポートしてくれていたな。彼らのおかげでBERURIER NOIRやDEZERTERと共演することができたんだ」
■パンクでいることは当時、簡単なことだったの?若者たちによる少人数のグループだった?それとももっと大規模なムーヴメント?
「フランスでパンクでいるのが容易だったことなんて一度もないよ。フランスはすごく保守的で、新しい考えを受け付けない国だからさ。それに俺たちが暮らしているのは田舎だしね!フランスでパンクが大規模なムーヴメントになったことはない。90年代初頭にフレンチ・オルタナティヴ・バンドが有名になったことを除けば、パンクが表舞台に立ったことはないんだ。今でもツアー中のイギリスやアメリカのバンドのほとんどが、スイスやドイツに行くその途中に、フランスに立ち寄るだけ。ギグは精々、一度か二度しかやらないしね。ギグを企画しやすい会場やスクワットも少ないしさ。そんな中、ディジョン(フランス中部の都市)のMalokaは貴重な存在だよ。1988年、俺たちが初めてのレコードを作るときに設立した、今も活動しているコレクティヴなんだ！」
■仲が良かったバンドは?どんなバンドからインスピレーションを得ていたのかな?
「前述したようにHAINE BRIGADEとはすごく親しかったけど、他にもLUDWIG VON 88やSHERWOOD POGOとは友達だったよ。当時、フランスのパンク・バンドは、本物のパンクって言うよりもロックンロール寄りでね。PARABELLUMとかLES RATSみたいなバンドさ。いくらポリティカルなシーンをサポート

していようが、俺にとってあいつらは全然パンクじゃなかったぜ。俺たちの地域でベストなポリティカル・パンク・バンドはFINAL BLASTにORIGINAL DISEASE、DESERT CULTURELだったな。今のディジョンには格好良いパンク・バンドがいるけど、俺たちがポリティカルだったせいで、1980年代は他のバンドから嫌われまくっていたよ」

■ダブル7"EPをリリースしたことがあるよね。2枚組なんて珍しかったと思うけど、そのアイデアはどこから?Malokaからの初のリリースでもあったわけだけど。

「独自性のあるリリースをしたかったし、自分たちで作品をプロデュースしたかった。パンクの最大の強みってDIYにあると思うんだよね。他のバンドのレコード・リリースに協力したいという思いから、1988年にMalokaを創立したわけだし。LPを出すお金がなかったのもあって2枚組にしたんだ。ちょうどボリビアから帰ってきたばかりの友達がいて、彼の撮った写真をジャケットに使ったんだよ。あとは、リヨンに住んでいたPoisonという友達に残りのアートワークはやってもらった。1200枚をプレスして10ヶ月でソールド・アウトになったよ!『Maximum Rock'n'Roll』にも掲載されたし、レコードはチリからノルウェイまで送ったね。しかもある日、Alternative TentaclesのJello Biafraから電話があったんだ。レコードを何枚か欲しいってね!」

■DEZERTERと共演したと言っていたけど、ポーランドのパンク・バンドはフランスで知られていたの？

「いや、ポリッシュ・パンクは当時、フランスじゃ全く知られていなかったよ。多くのフランスのパンクスは、他の国で起こっていることに対して好奇心がなかったんだ。彼らが知っているのはフランスのバンドと、有名なイギリスとアメリカのバンドだけ。レコードのトレードをしていた人たちだけが、ポーランドのバンドのことを知っていたよ」

■ギグはよくやれていたの?パンクス向けの会場はあった?スキンズとのもめ事はあったりしたのかな?

「当時は今とは状況がかなり異なっていたな。ギグが企画されることは稀だったし、演奏できる場所も僅かだった。ただ、あの頃の人々はギグのために200キロも離れた場所まで出向くのも厭わなかった。そんなにギグはやっていなかったけど、やったとしても大抵はベネフィット・ギグだったよ。それにパンクスだけがギグに来るってわけでもなかった。小さな村でもやったし、変わった会場や状況でもやったよ。例えばパンクの写真展が開催された公共の図書館だったり、教会だったり。あとはスクワットや公園でやったこともある。市長の自宅前にある公園でやったときはSCRAPS(フランスのハードコア・パンク・バンド)とBRAINS OF HUMANS(スイスのアナーコ・パンク・バンド)と一緒だった。ギグを止めさせようとする警察官がそこいら中にいたな…。スキンズとの関係は、時々緊張状態になることもあったけど、他の国ほどじゃなかったよ。80年代後半には、俺たちの企画がナチによって襲撃されたこともあったし、俺に限って言えば、住んでいたアパートが2回、あとは車が1回ナチによって破壊されたんだ。だけど俺たちはどうにか奴らを町から追い出した。それからはディジョンの状況はいいよ」

■フランスは完全にDISCHARGE影響下の範囲外にあったと思うんだけど、どう思う?つけ加えれば、SCRAPSやRAPT、FINAL BLASTといったバンドは、多分あの頃はそれほどハードコア・バンドを聴き込んでいなかったんじゃないかな。

「完全に同意するね。前述したように、フランスのパンクスは好奇心が欠けているし、他の国のパンクスほど旅行もしないんだ。ここの大部分のバンドは、ロックンロールをやっているにも関わらずパンクを自称しているんだよ。ヴァイオレンスな音楽のバンドがギグをするのは、ここではいつの時代も大変なんだ。スカ・バンドやPARABELLUMみたいなバンドのギグなら、500人が駆けつける。だけどDISORDERを見に来るのは50人さ…。TOXIC REASONSがフランスに来てギグをやったのを覚えているよ。入場者はたったの53人。その前日、彼らはスイスで1000人を前にして演奏したっていうのにね。90年代、俺たちはスイスやドイツにバンドを見によく行ったもんさ。90年代中期になるとまた変わってきて、フランスからもパワフルなバンドが出てきたな。LOUDBLAST(※フレンチ・デス・メタル)やHOAX(※同名バンドがたくさんいますが、もちろんフランスのバンド)はかなり有名になったけど、まぁ、それくらいか」

■ところで、フランスにはドラマーの問題でもあるのかい?もちろん冗談だけどさ。でも、ドラム・マシンを使っているバンドをよく耳にするんだけど。

「ミュージシャンといつもつるんでいる奴のことを何て呼称するか知っている?ドラマーっていうんだよ!真面目に言えば、どうしてフランスのバンドがドラム・マシンに惹かれるのか俺にも分からないな。ドラム・マシンを使ったバンドによるフェスティヴァルまであるんだぜ。…おかしいだろ、ハハハ」



■フランス国外だとどこでプレイしたことがある?

「スペインやバスク、スイス、それにドイツでは何回もやったね。ベルギーへのツアー予定もあったけどキャンセルされて、ロシアにも招待されたことがあるけど、それは俺たちが行くことができなかったな」

■PSYCHO SQUATTはヴィニール音源がすごく少ないよね。デビューからLPを出すまで何があったんだい？

「そうだな、実はダブル7"EPを1989年にレコーディングした後で、俺たちは解散したんだ。メンバーが集まって演奏するようになったのは、2010年以降のことなんだよ。89年当時、ヴォーカルはリヨンのスクワットに行き、Davidは勉学のためにパリへ行ってしまった。それで俺たちは、違うメンバーを探すくらいなら解散したほうがいいってことになったのさ。だけどその翌年の8月には、LES FOSSOYEURS SEPTIKというバンドとのスプリット・アルバムをレコーディングしたんだよな。いい加減、それがリリースされればいいんだけど。セカンドLPは2016年中に出す予定でいるよ」

■君たちはフランスでどうやってヴィニールを販売しているの?アルバムにはCDもつけて発売しているよね。

「俺たちはヴィニールの宣伝なんかはしたくないんだ。だけど、CDをつけて出すことにしたのは、それほどコストがかからないってことと、しばしば、レコードは欲しいけどプレイヤーを持ってないって話しを聞くからさ。最初に500枚プレスして6ヶ月足らずで完売したよ。それで追加でもう500枚プレスした。それはギグで売ったり、他のレーベルとトレードしたりした(特にドイツとイギリス、ポーランドのレーベルとね)。俺たちのウェブサイトにリンクが貼ってあるから、そこからLPとダブル7"EP、あとは過去のクソみたいなレコーディングがダウンロードできるよ」

(以下、次号に続く)





APURTU

前々頁のGrzesterへのインタヴューに続きましては、バスクのパンク・ロック・バンド:APURTUへのインタヴューby Grzesterでございます。正直に言いますと、僕はこのバンドのことをチットモ知らなかったのですが(…デジャヴか?!)、ドイツの名門レーベルHöhnie Recordsからのリリースもあるので、Höhnieマニアックスやバスク・パンク・フリークスの方ならご存知…なの?いや、知らないでしょ!?どんだけオブスキュアなバンドだよ!!と突っ込みたくもなりますが、前号に掲載のESKORBUTOインタヴューと併せて読んで頂ければ、バスクのパンク・シーンに対する理解がグッと深まるかと思います(インタヴュー内容はすごく面白いのですが、ぶっちゃけAPURTU自体、そのルックス同様のサウンドです…)。尚、本稿もやっぱり長いので分割して掲載させて頂きます!

INTERVIEWED:Grzester [grzester12@poczta.onet.pl]

"BASQUE BOMBS AGAIN!" from POLAND The First Volume

■APURTUはどんなバンド?何年か前にHöhnie Recordsのカタログを読んでいたときに初めて知ったんだけど、いつからこのバンドを始めたの?

「ハロー、僕たちのバンドに興味を持ってくれてありがとう。答えているのはギター・ヴォーカルのAitorだよ。APURTUはバスクの都市、イルン出身のパンク・ロック・バンドで、バスクの言葉で歌うのが特徴かな。1989年に結成して、2015年8月14日に地元でラスト・ギグをやったんだ。アルバムを7枚リリースしていて、4月にドイツでやったコンサートのライヴ・アルバムも出したいと思っているところさ。僕たちは主にバスクで活動していたけど、何回かスペインで、あとはフランスやドイツでたくさん演奏したね。それにイギリス、スロヴァキア、ブルガリアに行ったこともある」

■君たちの音源を2枚、LPで持っているんだけど、どんなレーベルからリリースがあるのかな?

「僕たちの7枚のアルバムのうち、3枚はヴィニールなんだ。ライヴ・アルバムはヴィニールで出すだろうね。それと、過去の古いアルバムを少数プレスのヴィニールでもリリースしようとしているところさ。僕たちのパートナー・レーベルは同時に友達でもあるんだけど、彼らの協力なくしてヴィニールを出すこと、そしてディストリビューションすることも不可能だったね。PasazerやHart Scum、Höhnieといったレーベルが、僕たちが行くことの叶わない場所へとアルバムを届けてくれたのさ。あとはこの国のパートナー、PetruskaやSkizo、Mal Maiも忘れちゃいけないな」

■APURTUは77スタイル・パンクと評されているけど、同意する?君たちはその活動初期において、SEX PISTOLSを筆頭とする偉大なるバンドからの影響を受けていた?

「うん、いくつかのレヴューで、僕らは77スタイル・パンクと書かれているね。もちろん77スタイルは大好きだし影響を受けているよ。SEX PISTOLSにBUZZCOCKS、BOYS、PANKRTIとかね…。だけど他の時代、他のスタイルのパンクだって好きだけどね」

■君たちはスペインでは広く認識されているのかな?もちろん、ビルバオ(バスクの都市)のパンクスにはよく知られているよね?

「ハハハ、僕たちはどこでも知られちゃいないよ。バスク語で歌うパンク・バンドがやれる場所なんてスペインにはないし。そしてバスクにも、標準から外れた音楽や歌詞を歌うパンク・バンドに居場所はないしね。僕たちは異端なのさ。ウンザリするほど拒絶されたしね」

■しかし、もう演奏していないって本当?どうして?僕は賛同できないな。だって君たちはまだポーランドにも来ていないじゃないか!

「本当さ。昨年の8月14日にラスト・コンサートを地元でやったんだ、残念ながらね。けど、もうバンドが疲労困憊しているように思えたんだ。モチベーションもなくなってしまって、それでバンドを終わらせる決定をくださなくちゃならなかった。でもいい友人同士だし、何か問題があるわけじゃないしね。ポーランドに行けなかったのは残念だね、多分、新しいバンドで行けたらいいな」

■長年に渡って活動していたけど、今のバスクには他にもバンドがたくさんいるのかな?

「昔のバンドが数多く復帰しているよ。80年代に若者だった人たちは、ヘロインでヤラれちゃった人が多いからね。休止せずに昔から活動を続けているバンドは少ないんだ」

■バスクと言って最初に思い浮かぶのはやっぱりKORTATUだよね。個人的にメンバーのことは知っている?

「KORTATU、ANTI REGIMEN、VOMITO、BALDIN BADA、そしてBOLINGAS ANO

NIMOSが僕たちの都市の第一世代のパンク・バンドだよ。80年代半ばのね。KORTATUは大きな衝撃を与えたし、成功を収めたバンドさ。彼らは1984年から1988年まで活動して、1987年にはポーランドでも演奏をした。そのときにポーランドのテレビ番組にも出演してね、そのビデオを持っているよ。彼らが帰国すると、ポーランドの音楽をたくさん紹介してくれた。おかげで僕もDEZERTERやLADY PANKなどといったバンドを知ることができたのさ。KORTATUが解散した後にNEGU GORRIAKが登場して、彼らはKORTATUよりも成功したね。国際的にもその名を知らしめたバンドだよ。VOMITOの活動期間は1984年から、ヘロインでヴォーカルが死亡する1998年までだった。何年か前に彼らは再結成して、精力的にギグをこなしてアルバムも残したけど、ラスト・コンサートをやったみたいだ。ANTI REGIMENはそれほど人気はなかったけど当時はよくライヴをしていたね。デモを2本とLPを1枚リリースしていて、1984年から1990年まで活動していた。その後に復活して、僕も2004年から2005年の間だけだけどメンバーとして参加していたんだ。BALDIN BADAはバスク国内ではかなりの人気を博したバンドで、1986年から1995年まで活動していた。BOLINGAS ANONIMOSは無名のバンドで、1984年か1985年からの一年間だけ活動していた。このバンドはレコードのリリースはないね」

■ビッグ・ネームのバンドと共演したことはある?それとも、知られてはいないけど格好良いバンドとよくやっていた?僕の同僚は20年前にビルバオでLA POLLA RECORDSを見ているんだけど、そのときのオーディエンスは6歳から60歳までいたって言うんだ。それって普通のことだったのかな?

「人気のあるバンドとは全然共演していないんだ。ほとんどは小規模のコンサートやスクワット、バーで演奏していたからね。有名無名問わず、僕らが共演したバンドの一例を挙げるとすると、ASTA KASK、DIE SCHWARZEN SCHAFE、EYE FOR AN EYE、ANTI REGIMEN、VOMITO、MALOS TIEMPOS、KAOS KOOPERATIV、SUTURA、PECOZZA UNITEDとかだよ。多分、君の同僚が行ったのは、ストリートでみんながお祝いをする"祝祭日"だったんじゃないかな。LA POLLA RECORDSはすごく人気があったし、音楽を生業にしていた数少ないバンドの一つだった。ドラマーが死んでしまって解散したけど、ヴォーカルはGATILLAZOという新しいバンドを結成しているよ。5枚のアルバムを出していて、コンサートをやればたくさんの人が詰めかける人気のバンドさ」

■"Euskal Herriko rock erradikala"やBRR(RRV)、"Martxa eta Borroka"には関わっていたの?

「いや、それら全ては僕らがバンドを始める以前にあったものだからね。"Martxa eta Borroka"(Party and Fight)は1985年に独立党が行った政治運動で、多くのパンクやその類いのバンドが演奏して都市を廻るというキャンペーンだったんだ。政党は、パンクを若者たちによる新たな勢力とみなしていたから、取り込もうとしていたのさ。"Euskal Herriko rock erradikala"やRRV(Radical Basque Rock)はロック雑誌に関わっていた何人かが1983年に創案したんだ。そしてバスクのレコード・レーベル"Soñua"はバスクのバンドをカタログ化して、外国へ販売しやすいようにした。当時活動していた多くのバンドは、自分たちが分類化されることに賛同していなかったよ。僅かなバンドだけが、大規模なプロモーションをしてもらい、たくさんギグをやっていくらかの金をレーベルから受け取っていた。80年代後半になると、勢力を失ってて誰もこの名前を使わなくなったけどさ」

■アルバム『Katuen Hirian』ではブルガリアの詩人、Maria Donevaについて言及していたよね。このアイデアはどこから?

「Maria Donevaの曲には2ヴァージョンあって、一つはバスク語で、もう一つはブルガリア語なんだ。Maria Donevaは子供向けの詩を書いていて、彼女は数多くの詩集を出版している。僕の妻がブルガリア出身でね、彼女が妊娠したとき、家族に会うためブルガリアへ旅行したことがあるんだ。僕たちの娘は6ヶ月目で生まれたすごい早産でね、非常に厳しい状況だった。彼女は保育器の中で、毎日、毎時、毎秒、生きるために戦っていたよ…。Maria Donevaは妻の友人で、僕たちの娘のために詩を書いてくれたんだ。僕はその詩にメロディをつけて、保育器の中の彼女に向けて毎日歌っていたんだよ。アルバム『Katuen Hirian』の曲はブルガリアで作曲した。ブルガリアに滞在していた6ヶ月の間にね。アルバムには多くの、正反対の感情が込められている。悲しみ、喜び、喪失感、充実感、笑い、そして涙…」

■バスクにあるGaztetxeについて耳にしたことがあるんだけど、これって何なんだい?

「Gaztetxeはバスク語で、"ユース・ハウス"の意味さ。占拠されたオルタナティヴなハウスで、スクワットと異なるのは、そこに人は住んでいないってところかな。だけどオルタナティヴな活動をする場所として、コンサートやスピーチ、シアター、あとは作詩をしたり、ベジタリアン料理やコンピューター・プログラムを教えたりする教室にもなるんだ。30年以上も前からある古いGaztetxeも、新しいGaztetxeもあって、しょっちゅう役所と色んなことでもめているよ。役所にしてみればGaztetxeは追い出したい存在だからね。こんなやっかいな場所があって欲しくないし、その土地を転売したいからさ」

■ヘロインについての話しが出たけど、誰もがESKORBUTOメンバーの悲劇を知っている。だけどヘロインは一般に浸透した問題でもあるよね。君はヘロインをやっていた?

「幸いにも僕はやったことないよ。ドラマーはまだ生きているけど、ESKORBUTOメンバーの件は最大の悲劇だね。でも、他にもたくさんの例がある。例えばCICATRIZのメンバーなんて全員死んでいるからね。そう、ヘロインは80年代、そして90年代初期までは広く浸透していた問題だった。当時の若者でヘロインをやっていた奴らの多くは、今では生きていない。ヘロインをやると最終的にどうなるかという情報もなかったし、感染した注射器を使いまわしたりとかね。粗悪なドラッグ、深刻な失業問題、そして警察と政治家は腐敗し、大なり小なりドラッグの取り引きに関わっていた…。こうした多くの要因によって、大量死が引き起こされたんだ」

■80年代のパンク・ムーヴメントは、若者の間では一般的なものだったのかな?それとも選ばれた極一部の人たちしか知らなかった?今ではパンクは一般に知れ渡ってはいないよね。

「そうだね、パンクは若者たちには知られている存在だったよ。もちろん多数派ではないけど広く知れ渡っていた。40年にも及んだ独裁政権下での均一化の後、当時の若者は新たな自由と自己肯定を模索していた。そんなときに、並行して最初のパンクが登場したのさ。フランシスコ・フランコの死後も、政府による恐怖政治や警察による弾圧、警察による殺人はまだ横行していた。民主主義への移行なんて偽りだったのさ。おかげでバスクのパンクの多くは、その歌詞もアティテュードも非常にハードなものになったんだ。パンクのコンサートには多くの人たちがやって来た。ときには何千人もね。だけど、実際には何も残らなかった。パンクは馬鹿げたサブ・ジャンルに細分化され、その多くが表舞台に立つことがなくなった。一つのスタイルが流行ると、その手のバンドが出てくるけど、流行りが終わると同時に消えていった。パンク・バンドは歳をとり、コンサートに足を運ぶ若者は極僅かになっていったのさ」

(以下、次号に続く)

NÃO CONFORMISMO

NÃO CONFORMISMOのヴォーカルであるFredは語るべき真実と、イエス/ノーをハッキリと言う誠実な男だ!僕はいつも、"ブラジルでは正直でいることは許されない"と言ってきた。本物の勇気を持たなければ、正直者ではいられないのさ!ここではありとあらゆるルールがまかり通り、支配しているのだから。

今日、僕は朝7時からNÃO CONFORMISMOのレコードを聴いている。彼らの音楽と歌詞は、誠実そのものだ!"何をすべきか、どう生きるべきか"、彼らのアティテュードは、ハードコアについて改めて考えさせられるものなんだ!　INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■バンドの歴史やディスコグラフィー、初めてのショーについて聞かせてもらえる?それと、このNÃO CONFORMISMO(nonconformity　※不服従)というバンド名にはどんな意味があるのかな?

「結成は1993年、その一年後に『Famintos Por Liberdade』というデモを録った。だけど、そこから活動は停止してね。ショーも一切やらなかったんだ。2009年にOLD SCHOOL NICE LESSONSが94年のデモ・テープをリリースしてくれたのを機に、俺たちは再結成した。その後、初期のメンバーだったドラムのEvandroが抜け、代わりに今でもメンバーであるSidartaが加入。再結成してからは、良い歌詞を書くこと、地元でギグを企画することに集中した。そして、プレッシャーを感じず、リラックスしてバンドを続けていこうとしたんだ。NCというバンド名は、社会にも、ハードコア・シーンにも、俺たちの日常にも飼い慣らされないという意味さ。CORROSION OF CONFORMITYと、NAO RELIGIAOを合わせた感じでもあるね。音源には『Famintos Por Liberdade』(テープと7")、『Basta』(CDと12")、『Autoflagelo Da Humanidade』(7")があるぜ」

■メンバーは仕事しているの?それとも音楽で生活している?ブラジルでバンドをやる上で、最もしんどいことは?

「みんな仕事をしているよ。音楽をやったって金が出ていく一方さ。友達がこう言うんだ。俺たちはミュージシャンじゃない、ノイジーなアーティストだって。困難はたしかに存在する。だけど難しいことではないんだ。シーンにいるクソ野郎とか、イデオロギーだとか、あらゆる重圧を気にしなけりゃいい。俺にとって大変なのは、このメンバーと共に生きることだね。5人、5つの頭、5つのパーソナリティ…。とにかくシーンやイデオロギーを考えながら活動なんてしていないよ。やりたいようにやるだけさ!俺たちは、馬鹿げたルールを押しつけてきては、シーンではこう立ち振る舞うべき、なんて命じてくるハードコア界のインチキ野郎にいつも中指を立てているんだ。だから俺たちのギグは公明正大なんだよ」

■歌詞のテーマは?どうやって書いているの?

「歌詞は、人生そのものから多大なる影響を受けているんだ。俺がほぼ100%書いているんだけど、日々の生活からインスピレーションを得ているから作詞は容易だね。俺に関する事柄全て、何を読んだか、そんなことが結論として人生へと達するのさ」

■どんなバンドから影響を受けたのかな?

「よく聴いているバンドはBOSKOPS、LOS CRUDOS、CRUDE SS、POISON IDEA、DISCHARGE、ANTI CIMEX、ACTION DIRECT、RIISTETYT、TRAGEDY、DRILLER KILLER、OLHO SECO、初期のCORROSION OF CONFORMITY、初期のAGNOSTIC FRONT、OFFENDERS、ATTITUDE ADJUSTMENT、MDCとかだね。要は好んで聴くバンド全てから影響を受けているんだよ。NEW MODEL ARMYからDROP DEAD、そしてJOY DIVISIONにEXTORTIONまでね!」

■最新作は『Autoflagelo Da Humanidade』7"EPだけど、その制作過程について説明してもらえるかな?結果には満足している?

「NCはシンプルだからね、公平且つ直接的なバンドなんだよ。特に俺は、レコーディングのために何日も何週間もスタジオにこもっていられるほど、辛抱強くないからね。楽器の録音を全て終えたところで、俺がヴォーカルを録る。全てにかかった時間は5、6時間だったかな。飲まず食わず、しゃべらずにやって、且つプレッシャーとストレスなくね。それから、どうミックスしてもらいたいかを説明すると、数週間後に準備ができたとスタジオから電話がかかってくる。聴いてみて、どこか修正、もしくは改善するか話し合う。『Autoflagelo Da Humanidade』はクールな作品だ。だけど、ミックスの完成度をもっとあげられたようにも思う」

■君の人生にとって、パンク/ハードコアの意味とは?NÃO CONFORMISMOは、アティテュードと共鳴しているパンク/ハードコア・バンドだと思う?

「俺がパンクと初めて出会ったのは、1983~84年のことだった。ブラジルのPunk Rock DiscosがリリースしたRATTUSの『Rajoitettu Ydinsota』を通してな。当時の俺は12、3歳だったが、本当に人生が激変したよ。パンクは俺の人生で最重要の存在だ。真のパンクと出会って俺が学んだ最大の出来事は、DIY哲学によって人生が変えられるってことさ!バンドや音楽に限った話しではなく、俺が言いたいのは、DIYは人生の質をより良くしてくれるってこと。俺たちはパンク・ミュージックを聴き、そしてプレイしている。歌詞は本当のことだけを書いているし、俺たちの作品は100%インディペンデントで100%　DIYだ。俺たちの音楽スタイルはパンク・カルチャーに根差したもので、それはつまり俺たちの日々を反映したものでもある。ルールに縛られない、"シーン"と呼ばれるものなんかには構わない。そういった事実が、活動を続ける動機となっているのさ」

■君たちが始めた頃のハードコアと現在のハードコア、そこに違いはあると思う?

「何も変わらないよ。なぜなら俺たちには揺るぎない考えがある。ハードコアが持つ、その意味についてのね。ハードコアとは、そいつの日常生活を反映している。バンドTシャツを着て歩くことでも、Facebookに人目を引く言葉を書くことでも、抗議文を投稿するだけで実際には何もしないなんてことじゃないんだ。俺たちのハードコアとは、常に抵抗、そしてルールの破壊を意味している。融和だの、クルーだの、ファミリーだのを歌っているバンドを聴いたりサポートしたりするほど、俺は辛抱強くない。そんなことを歌っているやつらの大部分が、実際にはそんな実生活を送っていないし、タフなポーズをしているだけ。あとは写真写りの良い洋服選びをしているんだ。やつらにとってのハードコアとは、最近のAGNOSTIC FRONTだとか、その手のニューヨークのバンド、MADBALLとかなんだろうよ。NCは写真の撮影会なんてしないぜ。俺たちは演奏すること、チャリティー・ギグをするのが好きなんだ。サポートする価値があるものに対して、何ら見返りを求めずにな。それって現在では失われてしまったものだろう?今となっては、ショーがうまくいくように、業者に金を払う時代だぜ!ハハハハハ、笑っちまうね。資本主義の反対にあるべきハードコアが真逆になっちまったよ!!!」

■ブラジルのシーンってどうなの?良いところ、悪いところは?サポートは受けられる?

「君がシーンをどう捉えているかによるな。俺の考えるシーンというのは、まったく正反対の何かだな。俺がここブラジルで目撃したシーンてやつは、足を引っ張り合っては、お互いにサポートすることもなく、リスペクトにも欠けている。バンドだけじゃないぜ。レーベルもディストロもショップもジンもだ。無名のレーベルが無名のバンドをリリースしてもサポートなんてありゃしない。俺はベルリンに行ったことがある。スクワットでイヴェントを企画しているやつと連絡を取っていたんだが、俺が滞在していたときにそいつのギグがあったんだ。俺はそいつに、自分がバンドをやっていること、そしてレーベルもやってて音源をリリースしていることを話した。するとすぐさま彼は、音源を陳列できるように、スクワットにブースを用意してくれたんだ!俺はそのブースに立ち、自己紹介をした。そしたら、30分もかからずに俺が持ってきたすべての音源とTシャツが売れたんだ。ベルリンのレコード・ショップでも同じことが起こったよ。俺がよそ者だから、なんて障害はなかったし、そんなこと本当に誰も気にしていなかった。俺の仕事を尊重してくれていたんだ。だけどここブラジルでは、リスペクトが大いに欠如している。まずはどう利益をあげるかを考えているんだ。無名のバンドは利益をもたらさない。NCの作品を扱ってもらおうとしても、返答すらないんだぜ。ラジオ番組に音源を送りたいからとアドレスを問い合わせても、"分かった"という返事があったきりさ。対照的に、2012年にEqualizing Distort(カナダのパンク・ラジオ番組)のスタッフが音源について尋ねてきた。それで俺は音源を送ったところ、嬉しいことに彼らはNCを番組で何回もかけてくれたんだ。日曜日のトロントでね。更には2012年5月の一位を獲得して(http://equalizingxdistort.blogspot.com.br/2012_05_01_archive.html)、その年のトップ10にも選ばれたんだ。2013年にはブラジルにMASSGRAVを招聘した。俺は、俺の地元以外で企画に協力してくれるやつを探したけど、誰も応じてくれなかったよ。結局、他に類を見ないほど素晴らしいショーが俺の地元で行われた。おかげで今になって、他の都市のやつらがどうして他の場所でもショーをやらなかったんだ?って訊いてくる。そんなの、誰も協力してくれなかったからに決まっているだろ!」

■NÃO CONFORMISMOの今後の予定は?新作はあるのかな?ブラジルや外国へのツアーは?

「俺たちはもっとチャリティー・ギグをやって、作曲とレコーディングを続けていきたいね。俺たちには先頭を走る義務があるからな。もっと色んな場所でもやりたいけど、様々な理由があって、そうそうできるものでもないんだ。だけどもうすぐ、ATTITUDE AWARE RECORDSがいくつかブッキングしてくれる予定さ」

■読者にメッセージはある?

「自分自身に誠実且つ、正直でいてほしい。他人にどう思われようが、何を言われようが気にするなよ。君の人生を生きるのは君だけなんだから。真にインディペンデントな仕事に対してはサポートをしようぜ。そしてインチキな銭ゲバ野郎共にはたくさんのファックをお見舞いしてやれ」

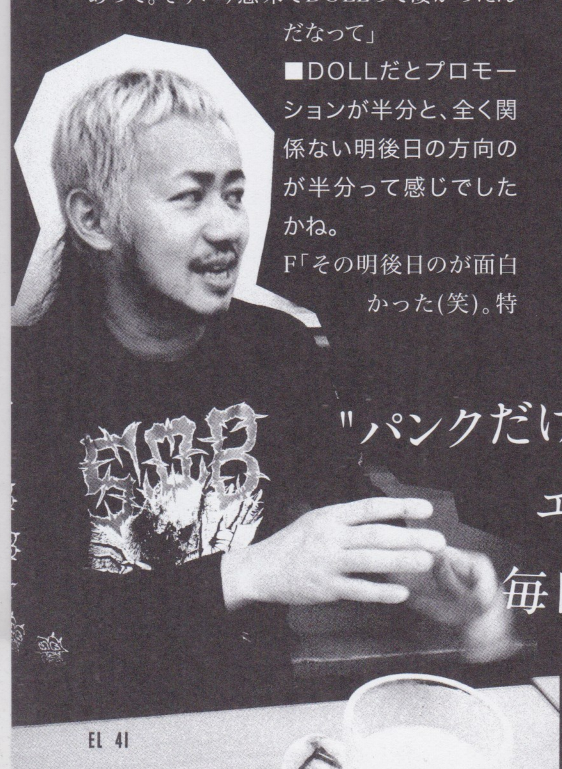
連絡先:
naoconformismo@bol.com.br
facebook.com/NaoConformismo



FAST vs EL ZINE
ファンジン対談？

ファスト・コアからパワーヴァイオレンス、グラインド、クラスト、メタル、スキンズ、ビートダウン等々を、ジャンルレスにクロスオーヴァーさせるパンク・ファンジン、"FAST FOR SPEED FREAKS"改め現"FAST zine"を発行しているEfu Matsumotoさん(以下F)。
端的に言えば単なる飲み友達なんですが、「ファンジン対談でもしましょうか」と言ったら「やろうやろう」となったので、とりあえずやってみました(笑)。
ただ、「僕たちのファンジンって最高だよね、イェーイ」と馴れ合っているだけじゃ気持ち悪いので、日本が生んだFelix Von Havocこと歯に衣着せぬ率直な意見でお馴染みの(?)BREAK THE CONNECTION RECORDSのSIOくん(以下S)にも登場してもらいました。…結果、"ファンジン対談"というよりは、両ファンジンに対する"ダメ出し大会"の様相を呈したわけですが(笑)、ナアナアではなく、キチンと向き合って「俺はお前のここがダメだと思う」と言ってもらえる/言い合える関係というのは、実に健全で素晴らしいものだなと、改めて思った次第です(一体何の話しだ…)。　[5月31日　歌舞伎町　かっぱ]

■パンクの紙媒体の現状について、どう思っていますか?
F「つまんない。ぶっちゃけ」
■それは"もっと色々出てくればいいのになぁ"っていう?
F「みんな似たりよったりの気がするんだけど。決まりきった日本のバンドばかりで。結局プロモーションで掲載されるっていうのがあって。そういう意味でDOLLって凄かったんだなって」
■DOLLだとプロモーションが半分と、全く関係ない明後日の方向のが半分って感じでしたかね。
F「その明後日のが面白かった(笑)。特集によって販売数が違ったとかあったと思うけど」
S「けど2人のジンは論点がズレているからね(笑)。今、そんなコアなバンドに興味があるやつなんていないし、ちょっと時代に逆行しているんじゃないの?内容的に」
■ダメ出しです(泣)。
S「自分が好きなのを取り上げるのはもちろんだけどさ、質問がマニュアル的っていうか固いんだよ(笑)。お互いにさ、"パンクだけ!"ってときから信念が変わってきているでしょ?エフさんは地平を辿ったり、かたや(山路は)毎日ランニングで健康志向なアウトドア野郎だし。それなのに誌面ではお堅いコアな部分ばかりやっていたら共感する人は少ないよ。コアなバンドマン層以外」
■ただ、ANASAZIを表紙にしたりすると、"分かってるね!"って言ってくれる人とかいるわけよ。死んだ方がましのメンバーとか。
S「だからそれはコアな人の数少ない意見じゃん!流行りの音をやらないバンドだからこそ、そこに反応するんだろうけど。ま、そういうジンか(笑)」
■今はそういう(コアな)人たちしか残っていないんじゃないの?パンクを聴いているリスナーとか、ファンジンの読者の人たちって。
S「けどそこにだけ向けて作るんだったら、コピーしたペーパーにすればいいじゃん。ちゃんとした冊子にしているから手に取りにくくなっているんじゃないの?」
■それ言ったら、"オンライン・ジンにして"って話しになっちゃうよね。
F「それは選択肢としてないな。一番最初にジンを出したとき、14～15年前って、COMIN CORRECTとかWHAT HAPPENS NEXT?とデス・メタルとかみたいなのが同じシーンにいて、それが好きで。それから自分はスキンやサイコビリーが好きになって、そこから離れちゃったんだけど、去年XIBALBAってバンドが新譜出してその辺を改めて色々聴き始めたら、今までは別々のところにいたと思っていたバンド、例えばHATEBREEDとINFESTで言えば、最新号でも書いたけど、HATEBREEDのメンバーがINFESTのTシャツ着ていたり、XIBALBAみたいなビートダウン系のバンドがNAUSEAと一緒にやったり。あとは、SLAPSHOTとINFESTが仲良いみたいで、でも日本だとSLAPSHOTって嫌われる存在だったり。一方でINFESTはカリスマで。こう、偏った情報で偏った見方をするのがもどかしいというか」
S「俺がもっともどかしいと思ったのは、Chris Dodge(INFEST etc)がインタヴュー(「FAST/ISSUE#9」に掲載)で、"最近の日本のバンドで好きなのはMIND OF ASIAN"って言っていたのには驚いたけどね。最近じゃねーじゃん!昔であれ現行であれ海外バンドにあいった質問すると、"現行の日本のバンドをホント聴いてないんだな"って思うよ。レコード出してたり名の通ったバンドなんか特にね」
F「僕の英語がダメダメだからちゃんと伝わん



"パンクだけ!"ってときから信念が変わってきているでしょ?
エフさんは地平を辿ったり、かたや(山路は)
毎日ランニングで健康志向なアウトドア野郎だし

←BREAK THE CONNECTION RECORDS の SIO くん

なかったのかも(笑)」
■話しを戻して、"オンラインにしちまえ"っていうのは、バンドに対して"レコードは作らずに、BandcampとかSoundCloudで配信だけすれば"ってのと一緒でさ。"形として残したい"ってのは、バンドをやる人もジンを作る人も一緒なんじゃないの?
S「そこに、"金銭的に損してもいいから作りたい"って気持ちはあるの?」
F「どこかあるよ、それは。ずっと赤字がハンパなかったら問題あるけど」
S「赤字でもそこまで痛くない赤字だったら、部数を減らすとかあるじゃん。そこで、特定の人にだけ届けたいのか、知らない人にも手に取ってもらいたいのか?っていう」
F「ぶっちゃけ"これで喰っていこう"というのはないし、趣味と言ったら語弊があるかもだけど。ただ、赤字が重なると辛いから、それはバンドとかレーベルやっている人と同じで。自分は20年以上前にEAT MAGAZINEの創刊準備号を手にしたときが衝撃的で、"これだよ!"ってのがあったんで。表紙はSLAYERで中はNOFXとかASSUCKとか出ていて、94年当時はまだまだアンダーグラウンドだったブラック・メタルもあって。当時はDOLLとBURRN!だけみたいな(状況で)。ネットもないし。そこから得たものは凄かったので」
■僕は読者だった頃、DOLLのMRRの転載記事が好きだったんですよ。ああいう、ワケの分かんないバンドが載っていると、ワクワクして。やっぱり知らないバンドを知りたいというのが根本にある。だから、みんなが知っているバンドじゃなく、未知のバンドを紹介したいというのが。
S「そのMRRも売れなくてオンラインにもしてるよね?今はネットで情報過多だし、バンドのライヴ映像も見れちゃうから誌面の写真を見てもワクワクだったり、"こんな渋い恰好してんだ!"ってのがないから、余計手に取らないってのも一理あると思う。別にジンなんて高いもんじゃないじゃん。とりあえず買うもんでしょ。それはデモ音源にも同じことが言えると思うんだよね。とりあえず何でも買うでしょ?当たり外れ云々以前に(笑)。それがないんだから、ジンにも同じことが言えるんじゃないの。あとは(ちゃんと製本された)冊子だから手にしないとかね」
F「FASTも第1号の、最初期のものはコンビニ・コピーでサイズも今のEL ZINEサイズだったよ。たしか最初30部くらい作った。1冊作るのに両面コピーを8回。そうこうしているうちにトナーがなくなるので、そしたらまた別のコンビニに行って(笑)。当時はセブンのコピー機が良い黒が出たね(笑)。思ったより買ってくれる人がいて、店から追加の連絡が来る度に街中のコンビニに行きまくってて、合計100冊くらい作ったと思う。で、もうさすがに印刷頼もうって思ったから、わざわざチープにすることはしないね」
■エフさんも僕も、基本的に本が好きだからねぇ…。ただ、EL ZINEは外に対する訴求力がないんだよね。
S「それなー(笑)。それは音源が売れないのと共通していてさ、"新しいバンドを知ろう"っていうのがパッケージではないんだよ」
F「それと関連しているか分からないけど、表紙とか、いつもと大して変わらないと思われるかもしれないけど、自分の中ではパッと見で、ファスト・コアとかハードコアとかが分かる雰囲気を出しているつもり」
S「それならライヴ写真がいいんじゃない?アー写よりさぁ」
F「去年の(最新号)はね。ただ自画自賛じゃないけど、パッと見で手に取りたくなるように、それを目指して。ある意味、表紙に一番力を入れているし」
S「メジャーじゃないけど、メジャーだよね」
F「え、どういう意味?」
S「王手流通雑誌みたいな感じってこと」
F「メジャーな雑誌っぽいってこと?」
S「そうそう。やっぱりどっちかと言えばEAT系なんだよ」
F「根底にはあると思うよ。初期のEAT、8号、9号くらいまでが」
S「EATとDOLLの違いだね。俺は別宮さんのレヴューが好きでさ。お前(山路)のレヴューもそれくらいになれば、読み応えがあると思うんだけどさぁ(笑)」
F「僕も別宮さんのレヴュー読んでBOYに行ってた(笑)」
■分かるようには書いていると思うけどね。本気で推しているのと、まぁまぁなのと。
S「俺がレヴューに関して思うのは、メンバーが元xxとかの情報云々より、一発聴いてみて自分の言葉で書いてるのが響くと思うんだよね。ちょっと皮肉や笑いも込めたりとか、そういう方が面白くない?ディティールで文字数を埋めて自分の感想は少しだけっていうのは伝わらないと思う。もうレコード屋はレーベル・インフォ通りのコメントしか載せていないんだから。担当者の耳にどう届いたかなんて分かりゃしないじゃん。インフォなんか一切無視して、自分で書いたのを載せてから見てみる(他のレコ屋のコメントも然り)方が、"あーなるほど"ってなると思うんだけどね。だから自分が見当違いのことを書いていることもあるけど、"自分の聴いているジャンルや音楽の目線で聴くとこうじゃない?"って発見もあると思うの。そういうのがね、俺は2人のレヴューを読んでて感じないのよね(笑)」
■ただ、海外からわざわざレコードを送ってくれたのに、"ダサいから載せません"って言えないよね。
F「そうだよね。だから今はファンジンに住所を載せていないの。前は(載せていたから)勝手にCDが送られてきたりとか。営業されても困るから載せてない。昔は履歴書を送られてきたからね、"働きたい"って(笑)」
S「そこはレコード屋も同じで、なんでも取る(入荷させる)って時代じゃないじゃん。同様に海外レーベルも色んな想いがあってリリースしているから"なんで取ってくんないの?"ってなるけど、段々レーベルも多種多様になって、色んなサウンドのバンドを出すじゃん。"このレーベルならレーベル買いだよね"ってのは確かになくなった。LENGUA ARMADAですらね。だから自分がコメントを書けないのは、必然と取れないのは仕方なくない?だから以前のようにどのレコ屋にも入荷してるってのがだんだん変わってきたと思

20年以上前にEAT MAGAZINEの創刊準備号を手にしたときが衝撃的で、"これだよ!"ってのがあった



↑FAST zineのEfuさん



う。だから大倉さん(RECORD BOY)のコメントだよね」

F「大倉さんは凄いよね。よくあれだけ引き出しがあるなって。もしかしたら、正直になればああなるのかなと思うけど」

S「今はネットでサンプルが聴けるから、ちょっと聴いて"これを買うのは後でいいな"ってなるけど、そこに熱いレヴューがあると、"オッ!"ってなるじゃん。で、買って"えぇ…違うじゃん"ってさ(笑)。それが必要なことだよ。例えばChris Dodgeが新しいバンド(TO THE POINT)をやっているって(FAST zineに)載っていたけど、どんな音をやっているか全然伝わってこなくてさ。もう"Chrisがいるだけじゃん"って。"今の音になっていて、INFESTの頃のような暴力的なサウンドじゃなくて残念でした。だけど僕は大好きだから〜"みたいな方が読みたいじゃん」

F「それは僕の力量不足だね(笑)。ただ、今INFESTを表紙がカッコイイと思ったんだよね。中身はビートダウンが多くてさ」

■まぁ、熱ければ必ずしも受けるのかというとそれもまた違うでしょ。だから難しいよね。

F「基本的に、さっき言ったように紙媒体が好きなのかなって」

■それがないと、印刷して発送してって面倒臭いことをやらないですよね。

F「でも、広告ばっかとか、身内だけのはつまらないし」

■その辺が程良かったのがDOLLだったのかなと。おかしなバランス感覚があったような。それがなくなって両極端に走っているんですよ、今は。

F「DOLLが面白かったのって色んな切り口で特集があったから、ディスコグラフィーとか。CD50選とか。資料的価値があるというか」

■あー、たしかに。

S「エフさんがこの間出た、アート・イヴェント(※国分寺で開催された手作りアート市/クラフトヴィレッジ)の話しとか載せたらいいんじゃないの?」

■それ、パンク関係ない…。

S「DIYじゃん!」

■でもパンクじゃないじゃん…。

S「パンクじゃないって、お前がテント背負って沖縄に行くのもパンクじゃないだろ!」

■僕は毎朝ランニングしているような、健康第一の男なので…。

S「健康になる=SxEって話しはどうよ?"昔はドランクでポリティカルなクラスト派だったけど、煙草やめて走るようになってSxEの気持ちが分かってきた"とかさ(笑)」

■一回まとめようよ(笑)。はい、今後はどうしたいですか?

F「紙媒体が好きだから、流行り廃り関係なく自分が好きなのを伝えたい。さっきも言った初期のEAT MAGAZINEがやった、ジャンルを超えた、ビートダウンもグラインドもパワーヴァイオレンスもデス・メタルも、同じ地平に。まぁ、地平っていうか、クロスオーヴァーね」

■変わらずに?

F「うん、ずっとやっていれば1人2人は共感してくれる人が必ずいて、そこに喜びを感じているというか。"こういうのが読みたかった!"って人がいてくれると、やって良かったなって」

■それをSIOくんに言わせると、"内よりになっているから、もっと外へ発信しなきゃ"ってことになるわけでしょ?

S「売りたいを前提にするなら(メジャーなバンドの)メインがあって、DOLLじゃないけど、それでまず買ってもらう。それにプラスして自分が好きなバンドを載せる、みたいなさ。そうしないと手に取ってもらえないでしょ?」

F「そうそう、そういうこと。そうしているつもり。だから毎回表紙がなかなか決まんないんだよね」

■僕はDOLLでメキシカン・ハードコア特集とか表紙でやったけどねぇ。

S「それはその特集以外にも色々あって、他に買う要素があるじゃん」

■まぁ、1人の人間がやっている限界なのかなぁ。

S「だったら逆にもっと絞ってページ数を少なくしたほうが」

F「ページ数を少なくするとそれなりに値段を下げないといけないでしょ?」

S「値段で売るのか、内容で売るのか、じゃないの?一つのバンドだけを載せるとかさ。そうすると色んな人に見てもらうのは無理かもしれないけど。今、売れている本って、万人向けじゃない、個々に向けたのが多くない?」

■もう今や万人ってのがなくなって、みんながそれぞれ何かしらのマニアになっているでしょ。…って、もうそろそろ締めましょうよ(泣)。読者にメッセージで。

S「速いのが好きならFAST zineを買えよ!って」

F「いや、ビートダウン系も載っているから(笑)。話し足りないので、続きは次の定例会で(笑)」


↓Efuさんと発行人

LASHING SPEED DEMONS VOL.22

WENDY O. WILLIAMS

みんな大好き(?)、ウェンディ・O・ウィリアムズ。人呼んで"ショック・ロックの女王"。ハードコア・パンクに先駆けた存在であり、ある意味メタルパンクの始祖の一人でもあるはずなんだけど、音楽雑誌でこの人についてまとまった記事を見たことって、ほとんど記憶にない。なので、EL ZINEでやりましょう。よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

ウェンディ・オーリアン・ウィリアムズ。1949年5月28日、ニューヨーク州ウェブスター出身。クラリネットを学び、恥ずかしがり屋の美少女だったという。そんなウェンディに何があったのか知る由もないが、10代半ばには素行が荒れ始め。16歳で家を飛び出した彼女は、住む場所も職業も転々とした果ての76年、ニューヨークに流れ着く。

ニューヨークでストリッパーをしていたウェンディに目を付けたのが、彼女が出演していたストリップ・バー「CAPTAIN KINK'S SEX FANTASY THEATER」の店長だったロッド・スウェンソンだった。そのロッドはイェール大学出身のインテリで、当時ニューヨークで勃発していたパンク・ムーヴメントに乗じて一旗揚げようとか目論んでいたらしい。かくてロッドはウェンディのマネージャーとなり、二人はロック・シーンに殴り込むのだった。以後、PLASMATICS/ウェンディが歌った歌詞のほとんどはロッドが手がけることになる。

そして1977年、PLASMATICSが結成される。結成時のラインナップはウェンディ・O・ウィリアムズ(ヴォーカル)、リチャード・ストッツ(リード・ギター)、チョウセイ・フナハラ(ベース)、ステュアート・ドイッチュ(ドラム)の4人。初ライヴは78年7月のCBGB。バンドはたちまち注目を集めることになるのだった。

その注目は、ファストでラウドな音楽性もさることながら、何よりステージでのワイルドなパフォーマンスにあった。ウェンディはテープなどで乳首を隠しただけの、ほとんど裸に近い格好でステージに立ち、チェーンソーでギターをぶった切る(当時の写真を見ると、ステージ衣装はパンツが見えるレベルの超ミニスカートとか、体操服とか、いろいろなヴァリエーションがあったようだが)。更には機関銃(空砲)をぶっ放す、大音量でスピーカーをトバす、ハンマーでTVを叩き壊す、果てはダイナマイトで車を爆破する…と、とんでもないモノだった。

ウェンディ以外も負けていない。リッチー・ストッツは青いモヒカンでバレリーナ姿、デビュー後に加入したウェス・ビーチ(リズム・ギター)は白衣…と、とことんキテレツな見た目で勝負していた。2代目ベーシストのジョン・ボウワーがパンクには珍しい黒人というのも、当時は印象的だったろう。

スキャンダラスなステージで、ニューヨーク以外でもたちまち話題騒然となったPLASMATICSは、1978年に自主レーベルから7inch「Butcher Baby」をリリースし、レコード・デビューを果たす。翌79年には12inch EP「Meet The Plasmatics」をリリースしている。

見た目やステージ・パフォーマンスで話題を呼んだPLASMATICSだったが、当然ながらそれだけで大きな存在になれるはずもなく。何よりその音楽性が破天荒だった。基本はR&Rだったと思うが、何しろ速かった。78〜79年、まだハードコア・パンクが勃興する前のことだ。当時のニューヨークにはもちろんRAMONESがいたが、PLASMATICSはこの時点でRAMONESよりも遙かに速かった。しかもそのサウンドは、RAMONESあたりにはないメタリックな響きを持っていた。

そして1980年3月、PLASMATICSはスティッフ・レコーズとの契約を得る。前後してベーシストがジョン・ボウワーに交代。スティッフから再リリースされたシングル「Butcher Baby」は、全英55位を記録。そしてバンドは1stアルバム『NEW HOPE FOR THE WRETCHED』をリリースする(脱退したチョウセイ・フナハラはその後映画製作の道に進む)。



俺が初めて聴いたPLASMATICSのアルバムが『NEW HOPE FOR THE WRETCHED』だった。レミーとの関係から遡って買ったアルバムだったが、80年にして超速くて超短い楽曲、RAWに過ぎるノイジーなサウンド…かなりショックだった。英国でハードコア・パンクが盛り上がるのは2年後のこと(もちろん、今の耳で聴けばそれほどとんでもないスピードではないのだが)。

更に、アルバム中には機関銃の発射音やら、ウェンディ・O・ウィリアムズがクラリネットから持ち替えたと思われるフリーキーなサックス・プレイも炸裂(ロッド・スウェンソンもサックスが吹けたらしいので、どちらが吹いているのかは不明なのだが)。ノイジー、かつアヴァンギャルドなサウンドてんこ盛り。一方で、各メンバーの演奏はかなり上手い。PLASMATICS…本当に早過ぎた存在だったと思う(フナハラがバンドに持ち込んだと思われる日本語のカウント"イチニッサンシー!"も印象的)。

当時の国内盤LPのブックレットにはライヴの写真もたくさんあって、それもいちいち衝撃的だった。何より、ジャケットからして凄まじい。メンバーのルックスもとんでもないし、プールに車が突っ込んでるし、プールサイドではなんか燃えてるし…。ともあれ、アルバムは全英チャートの55位となった。

スティッフと契約したことで、東海岸以外では英国で早くから注目されたPLASMATICSだったが、そのアウトレイジャスな存在感はすぐに全米にも知れ渡った。アルバムのリリース後にはロサンゼルスで2回のライヴがブッキングされたが、チケットの売れ行きが好調で、ライヴは追加されて4回行われたという。

音楽的にも見逃せない存在だったPLASMATICSだが、当時は何よりスキャンダラスなパフォーマンスありきだったと思われる。『NEW HOPE FOR WRETCHED』リリース後の1981年1月、オハイオ州クリーヴランドでのライヴでは、ウェンディ・O・ウィリアムズがステージ上での猥褻行為で逮捕(この時のウェンディの"衣装"は、シェービング・クリームだけだったという…!)。同時期の英国ツアーでも、ステージでキャデラックを爆破するという演出を予定していたためにライヴがキャンセルされたり。

ともあれ81年、PLASMATICSは2ndアルバム『BEYOND THE VALLEY OF 1984』をリリースする。ステュ・ドイッチュが脱退し、元ALICE COOPERのニール・スミスがゲストとしてドラムを叩いている。リッチー・



ストッツだけでなく、ウェンディとジョン・ボヴワーもモヒカンとなり、メンバー中3人がモヒカンというとんでもないことに…。

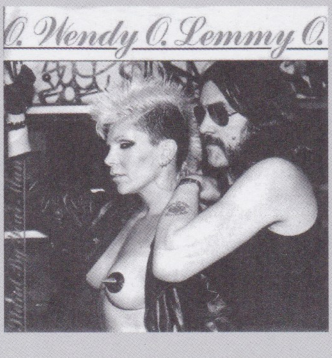
一方で、サウンドはヘヴィ・メタル色を強めている。速くて軽かったステュのドラミングから、ニールの重い演奏に変わったことも大きかったと思う。そしてリッチーのギターを含め、1stアルバムに較べると、ある意味聴きやすくなったといえないこともない。1stアルバムでは低音でしゃべるような、吐き捨てるようなスタイルだったウェンディのヴォーカルは、このアルバムではダミ声でシャウトするような唱法に変化しつつあった(一方「Summer Nite」のサビではメロディを追う、ソフトとも言える歌唱も披露している)。

ロッド・スウェンソンとバンドは、更なるメジャーな展開を意図していた。1981年、PLASMATICSは元EDGAR WINTER GROUPのダン・ハートマンをプロデューサーに迎え、ミニアルバム『METAL PRIESTESS』をリリースする。リズム・セクションはクリス"ジュニア"ロマネリ(ベース)とジョーイ・リース(ドラム)に交代していた(脱退したジョン・ボヴワーはリトル・スティーヴンのバンド他を経て、黒人メンバーによるメロディアス・ハード・ロック・バンドCROWN OF THORNSで成功を収める)。



ここに来て、サウンドはタイトル通り、更にメタル色を強めている。ウェンディ・O・ウィリアムズのヴォーカルも、初期とは全く違うダミ声のシャウトが中心となった。

そして1982年、PLASMATICSはMOTÖRHEADとのコラボレートを果たす。"WENDY & LEMMY"名義でリリースされたシングル「Stand By Your Man」はカントリーの女性シンガー、タミー・ウィネットのヒット曲のカヴァー。B面ではPLASMATICSによるMOTÖRHEAD「No Class」のカヴァー、MOTÖRHEAD(というか、レミーとリッチー・ストッツとフィルシー・アニマル・テイラー)によるPLASMATICS「Masterplan」のカヴァーが聴ける。しかしこの共演は、PLASMATICSの下品さを嫌悪した"ファスト"エディ・クラークの心をMOTÖRHEADから離れさせ、遂にはエディ脱退という悲劇のきっかけとなったのだった。



それにしてもこのシングルでのウェンディ・O・ウィリアムズの絶叫は凄まじい。どうかするとレミーの存在感を凌駕しているのではと思う。

1982年春、PLASMATICSはキャピトル・レコーズと契約し、遂にメジャー・デビューを果たすことになる。デモはダン・ハートマンがプロデュースしていたが、アルバムのプロデュースはSCORPIONSやACCEPTで知られるドイツ人プロデューサー、ディーター・ダークスが担当。ドラマーは黒人のT.C.トリヴァーに交代していた。

そして83年、バンドは3rdアルバム『COUP d'ETAT』をリリースする。MOTÖRHEAD「No Class」のカヴァーを改めて収録し、これまで以上にメタルに接近した音楽性。ただ、ウェンディのダーティーなシャウトをフィーチュアする一方でミドルテンポの楽曲が増え、初期の破天荒なアグレッシヴさは後退した感がある。とはいえ、ウェンディの耳障りなシャウトは迫力十分。



83年…既にSLAYERやMETALLICAは始動していたが、キャピトル・レコーズがそのようなアンダーグラウンドの胎動に気付くことはなかった。当時はDURAN DURANをはじめとする英国ポップ勢が全盛。『COUP d'ETAT』は商業的に成功せず。キャピトルはPLASMATICSとの契約を破棄する。

ところが、1982年の時点でKISSのジーン・シモンズがウェンディ・O・ウィリアムズに注目していたのだった。ジーンが助力を申し出たことで、ウェンディはソロ名義での活動に乗り出す。そして84年、ジーンのプロデュースにより、ウェンディは1stソロ・アルバム『WOW』をリリース。バック



はPLASMATICSのウェス・ビーチ(ギター)とT.C.トリヴァー(ドラム)、そしてジーンが"レジナルド・ヴァン・ヘルシング"という変名でベースを弾き、更には当時のKISSのメンバー全員がゲスト参加という、豪華なアルバ

ムだった。

『WOW』は、大半の楽曲でジーンがソングライティングに関わり、KISSを思わせるミドル・テンポ中心のキャッチーなハード・ロックにウェンディのダミ声が乗る、という作風。このアルバムのリリースに伴い、ウェンディは85年にグラミー賞の"最優秀女性ロック・ヴォーカル・パフォーマンス"部門にノミネートされている(結局受賞は逃したが)。

しかし、KISS人脈との蜜月はアルバム1枚で終わってしまう。1986年には『WOW』にも参加していたマイケル・レイ(ギター)とT.C.トリヴァー(ドラム)、そしてグレッグ・スミス(ベース)をバックに、2ndソロ・アルバム『KOMMANDER OF KAOS』をリリース。ウェンディ・O・ウィリアムズにとって、リッチー・ストッツとウェス・ビーチが二人とも参加していない初めてのアルバムだったが、初期と後期のPLASMATICSのハイブリッドのような、スラッシュ寄りのメタリックなスピードR＆Rを聴かせた(MOTÖRHEADの「Jailbait」もカヴァー)。ウェンディのソロ作ではコレが最高傑作だと思う。



ジャケットではレザー・パンツを履いているウェンディだが、当時のステージの写真を見ると極小のビキニ姿で、これまたインパクト大。一方でこの頃ウェンディは女優としてのデビューも果たし、86〜90年にかけて何本かの映画に出演している。

その後、しばらくウェンディ・O・ウィリアムズのバックを離れていたウェス・ビーチが戻ってくると、ウェンディはいきなりPLASMATICSの名義も復活させ、1987年にアルバム『MAGGOTS：THE RECORD』をリリースする。この時点でのバンドはウェンディを中心に、ウェス(ギター)、マイケル・レイ(ギター)、クリス・ロマネリ(ベース)、レイ・キャラハン(ドラム)。世界が蛆虫に侵略される…というストーリーを持った"スラッシュ・メタル・オペラ"で、楽曲の間に語りが挿入される意欲作だったが、商業的には成功しなかった。



その後ウェンディがPLASMATICSとして活動することはなく。88年には3rdソロ・アルバム『DEFFEST! AND BADDEST!』をリリースする。スラッシュ・メタルとラップの融合を図った、コレもある意味意欲的なアルバムではあった。初期PLASMATICSでのウェンディの歌唱がしゃべり口調だったことを思えば自然だったかも知れないが、作品の完成度の面でも商業的な面でも成功には至らず(DOLL誌上でも当時のライヴが酷評されてたな)。



PLASMATICS結成以来、ウェンディの音楽活動のコンセプトはすべてロッド・スウェンソンが担当していた。結局のところ、ロッドの策はいずれも大当たりには至らず。個人的には、コンセプトがその都度裏目に出続けたことが、ウェンディの心に影を落としたのではなかったかと思っているのだが。

1988年の大晦日、ニューヨーク。RAMONESの前座として出演したリッチー・ストッツのバンドのステージにウェンディ・O・ウィリアムズが登場し、『BEYOND THE VALLEY OF 1984』収録曲にしてPLASMATICSの代表曲のひとつである「Masterplan」を歌った。コレがウェンディのラスト・ライヴになったという。

以後、ウェンディ・O・ウィリアムズがステージに立ったり音源をリリースしたりすることはなかった。ウェンディはミュージシャンを引退し、1991年には公私に渡るパートナーとなっていたロッド・スウェンソンと共に、コネティカット州ストーズに移り住む。

引退後、ウェンディはペットのリハビリの仕事に携わりながら動物の福祉に尽力し、一方で菜食/自然食によるダイエットを訴えて活動していたという。しかし彼女の精神は荒廃していたようだ。素顔は動物好きの優しい女性だったというウェンディ…ステージでの露悪的なパフォーマンスが心にダメージを与えていたのか、様々な策を弄しながら遂にロック・シーンでスターになれなかったことが影響していたのか、今となってはわからない。

93年、97年の2回に渡って自殺を試みたウェンディは、結局98年4月6日、自宅近くの森で頭を拳銃で撃ち抜き、死体となって発見される。享年48歳。

ウェンディの死は、ジョーイ・ラモーンやレミーなど多くのミュージシャンを悲しませた。98年5月18日には、チョウセイ・フナハラやステュ・ドイッチュを含むかつてのPLASMATICSのメンバーたちがCBGBに集結し、PLASMATICSの曲を演奏して彼女を追悼したという。

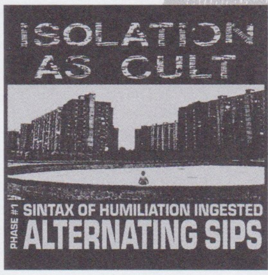
ウェンディ・O・ウィリアムズ。自身の意志によらない(?)コンセプトに最後まで引きずられ続けた存在という気もしてならない(実際のところはわからないし、仕掛け人のロッド・スウェンソンを責める気にもならないが)。その一方で、ダーティーでアウトレイジャスなメタリックR&Rを歌い続けた彼女がメタルパンクの始祖の一人であることは間違いないと思う。追悼には中途半端なタイミングだが、彼女の魂が安らかであることを切に願う。



ES GIBT KEIN WERT

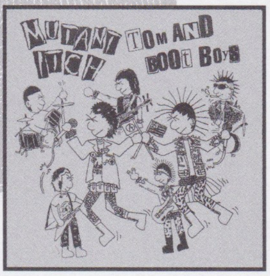
イギリスのEU離脱が大きなニュースとなりましたね。当地のパンクスは、この問題をどう考えているのか訊いてみよう!と思っていたのですが、スッカリ忘れてしまったので、…次号で隙あらばやりたいと思います!あと、ブラジルでそろそろオリンピックがある(?)みたいなので、Rafaにレポートを書いてもらったら面白いかな〜、でも絶対見に行かないよな〜、なんて愚にもつかないことを考えて日々生きています。はい、そんな人間によるディスク・レヴュー。BELGRADOの来日を勝手に祝してディスコグラフィーも書いてみましたよっと。

SPLIT/IȘOLATION AS CULT + ABORTICIDIO



Vol.19でインタヴューさせてもらったF.O.A.D. Records/CRIPPLE BASTARDSのGiulioによるIACはショートカット・ノイズ・グラインドを90曲(笑)収録。オススメの曲を挙げたいところですが、曲の切れ目が分かりません…。対するメキシコのABORTICIDIOは九州ノイズ・コアと南米ロウ・パンクとブラック・メタルの乱交で産み落とされたかの異形の忌み子。これぞ気狂いスプリット!
(F.O.A.D. Records F.O.A.D.097)7"

SPLIT/MUTANT ITCH + TOM AND BOOT BOYS



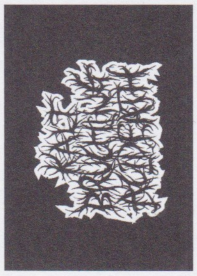
Mitchellくん(前号参照)がドラムを叩くロウ・ノイズ・パンク:MUTANT ITCHは、クラスト方面からのアプローチとはまた異なる、ポップ感を保ったヴァイオレンス・ノイズで鼓膜を気持ち良く粉砕してくれる。極限化するノイズ・コアが多い中、彼らのサウンドはどこかファニーで懐かしい。対するT&BBは新曲と"1,2 SONG"の再録で安心安全の平常運転!盤のラベルが両バンド逆になっているけど、聴けば分かるので問題ナシ!
(Dark Raids DR008 Pogo77 Records POGO76)7"

SEI TO SHI(生と死)/VIDA Y MUERTE



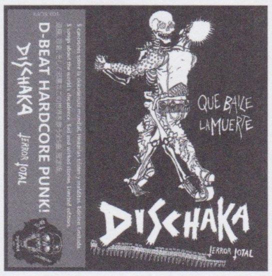
現DISCHAKAのLuisがベースを弾き、日本人のAtsushiがマイクを握る、NYCを拠点に活動していたハードコア・バンドの4曲入りシングル。全編日本語詞で、ノドから絞り出すかの熱情迸るヴォーカルに、80'sジャパニーズ・ハードコアのエッセンスが色濃く出た楽曲。不穏な空気感と、彼の地に生きる者ならではの、虚構なきリアリスティックな歌詞も刺激的だ。人種と国境を超越した不法集会from NYC!
(Nightrider Records RIDER004)7"

KALTBRUCHING ACIDEATH/5 TRACKS DEMO



前号の"YOUNG PUNKS GO FOR IT!!"でオススメされていた東京拠点のバンドの5曲入りデモ・テープ。AMEBIXを彷彿とさせる重々しくも冷徹なギターから一気呵成、SORE THROATバリのステンチ・クラストへと四散し聴く者を圧倒する!歪んだデス・メタルの感触もあるから、より加虐的で破戒的。そしてやっぱりデモはCDRよりテープに限るのです!200本限定でナンバリング入り。
(自主)CASSETTE TAPE

DISCHAKA/TERROR TOTAL



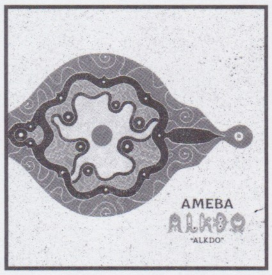
そしてDISCHAKAの、スタジオ音源5曲とライヴ音源6曲を収録した全11曲入りCD!捲し立てるスパニッシュ・ヴォーカルと共に渾然一体となって雪崩れ込んでくるノイジーなサウンドは、まさにLatino D-Beat & Kaos Raw Punk!特にライヴ音源の方はその凶悪な音質とも相俟って、張りつめた緊張感がとんでもない。ラティーノ・パンクとD-Beatマニアックスは今すぐチェックを!
(KAOS 001)CD

BELGRADO/ST



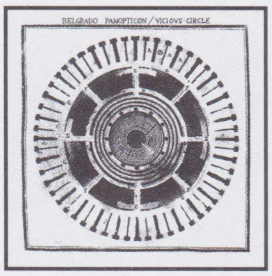
パンク/ハードコア・シーンからの、ポスト・パンク/ニューウェーブへのアプローチ。今号でもBELGRADOやOverthrow Recordsのインタヴューで語られていますが、その勃興を語る上で避けて通れない一枚こそがこの11年リリースの本作。シャープな浮遊感とダークな透明感、相反する要素とハードコアの出自ならではのコシの強さが混じり合う、衝撃&鮮烈なデビュー・アルバム!
(Discos Enfermos DE06)LP

ALKDO/AMEBA



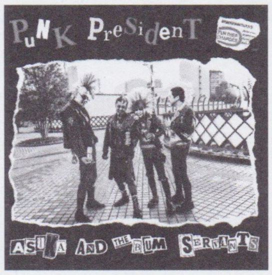
TURTLE ISLANDの永山愛樹と竹舞によるユニットで、今作ではCOOL WISE MANのメンバーなどがゲスト・ミュージシャンとして参加している。THE CLASHも韓国民謡も、そしてTURTLE ISLANDの楽曲も同一線上の、"ALKDOの音楽"として再生成。ライヴ会場とレーベル通販のみという本作の販売方法やその装幀含め、冷たい工業製品とは真逆の、人と土の匂いがする有機的な一枚だ。
(microAction MA/CD-12)CD

BELGRADO/PANOPTICON + VICIOUS CIRCLE



LVEUMのPacoがこのバンドを見逃すワケがなく、1stアルバムから約一年後にリリースされた2曲入りシングル。前作の延長線上ながらもサウンド・クオリティが向上し、原石はより洗練されその輝きを増した。硬質に力強く、ときにダンサブルで伸びやかに。アナーコ・パンクの要素が若干後退し、バンドが本来目指していたであろうポスト・パンク指向が強まった印象も。
(La Vida Es Un Mus MUS66)7"

ASUKA AND THE BUM SERVANTS/PUNK PRESIDENT



前号で1stシングルを紹介させてもらいましたが、早くも2ndシングルが!T&BBの最初期、「Punks Are Alright」の頃や、音のベクトルは全然違いますが、Pogo77がリリースした、あのTHE CRESTEDを思い出すのは…僕だけでしょうか?昨今の狙いすました"ロウ・パンク"とは確実に違う、本当の意味でのロウネスなハードコア・パンク・アタック!THE WALLのカヴァー含む5曲収録!
(Pogo77 Records POGO82)7"

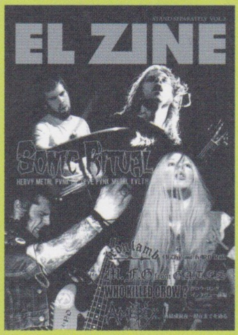
BELGRADO/SIGLO XXI

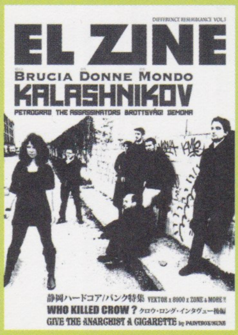


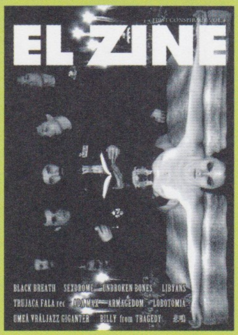
前述のシングルがこのバンドの到達点かと思っていたのですが、それは完全な誤りでした。良くも悪くも漂っていたパンクの残り香が払拭され、ゴシックな様式美とポスト・パンクの革新性に彩られた、"ネクスト・レベル"のセカンド・アルバム。ツアーと共にもたらされるであろうサード・アルバムは、この先を行くのか?期待して待ちたい。ちなみに、タイトルはベルギーのSIGLO XXへのリスペクトを表したもの(…だよね?)。
(La Vida Es Un Mus MUS77)LP

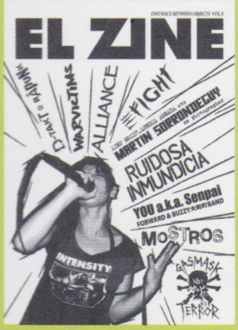


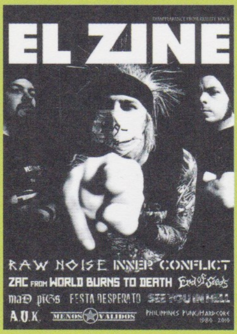


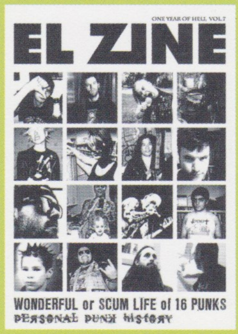


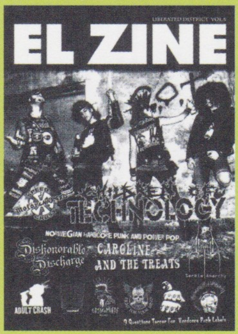


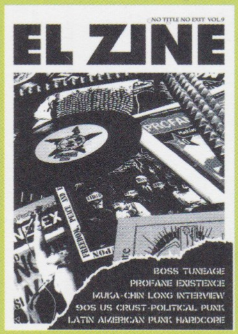




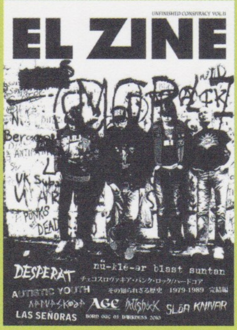


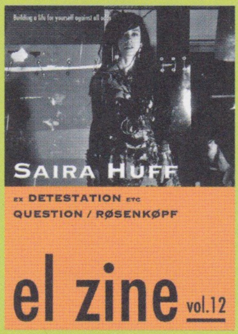


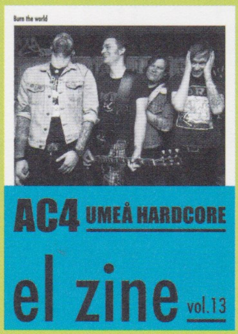








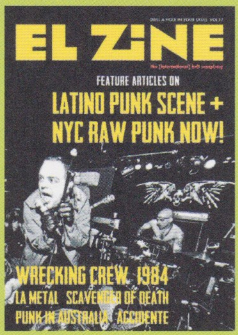


















VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13 ARE SOLD OUT!
THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

今号も読んでくれてありがとうな!あ、どうも、健康志向のランニング・アウトドア野郎こと発行人です(P41参照)。健康志向なわりに尿路結石、高血圧、飛蚊症、ギックリ腰と持病が満載です!これで健康を志向していなかったら一体どうなっていたことでしょう?!モーリーも煙草か酒、どちらかを控えたほうがいいと思います(…あと長電話も)。ほんじゃ、元気があったら次号は早めに出すかもね。Sick Punk! But Health Comes First!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.21　2016年7月31日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます



RAKTA

EL ZINE VOL.21 600 YEN

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE SEX IS COOL, BUT PUNK IS BETTER! VOL.21



KTA

N

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE SEX IS COOL, BUT PUNK IS BETTER! VOL.21

EL Z



POST PU

BE

SKIZOPHRENIA EURO TOUR REPOR

OVERTHROW RECORDS DIOS HA

WENDY O. WILLIAMS BAND OF

UNHOLY GRAVE PSYCHO SQUAT